

フィリピン Philippines

正式名称 = フィリピン共和国 Republic of the Philippines

面積 = 30 万 km²

人口(1998) = 7450 万人

首都 = マニラ Manila(日本との時差 = - 1 時間)

主要言語 = ビリピーノ, 英語, 各地方語

通貨 = フィリピン・ペソ Philippine Peso

アジア大陸の南東方, 台湾とボルネオ, スラウェシ島の間の西太平洋上にある島嶼国家。国土は大小合わせて 7100 といわれる島々からなるが, うち 3km² 以上の島は 500 にも満たず, 大多数は無名の小島, サンゴ礁島にすぎない。主要な島はルソン, ミンダナオの 2 大島, ビサヤ諸島の 7 島(サマル, レイテ, マスパテ, ボホール, セブ, ネグロス, パナイ), それにミンドロ, パラワンの計 11 島で, これだけで全国土面積の 92.5% に達し, その人口は全人口の 96% を占める。

【自然】フィリピン群島は基本的に第三紀, 第四紀の褶曲運動と火山運動により形成されたと考えられるが, その骨格形成には, ルソン島のカラバリョ山脈南西の急崖から東岸のディンガラ湾に抜け, ポリリョ海峡, ラモン湾, ラガイ湾, マスパテ島北東部を経てミンダナオ島のアグサン渓谷に達するフィリピン断層線が大きな作用を及ぼした。なお, 構造線としては北北西~南南東と北北東~南南西の 2 方向が認められる。ミンダナオ島中央高地南部には群島最高峰の活火山アポ山(2954m)がそびえ, ルソン島南部からビコル半島にかけての火山地帯には二重カルデラで有名なタール湖, 世界的なコニーデで知られるマヨン山(2417m)がある。またルソン島のカガヤン谷, 中部ルソン平野, ミンダナオ島のコタバト平野, ブキドノン台地, パナイ島のイロイロ平野, ネグロス島西海岸平野などが重要な農業地帯を形成する。

気候的には熱帯モンスーン区に属し, 多くの地域で乾季と雨季の明瞭な交替が認められる。もっとも降雨期を支配するのは地形, 特に山脈との位置関係で, その東側では北東モンスーンの影響を受けて 12 月から翌年 2 月に多雨期が現れるのに対し, 西側では南西モンスーンにより 6~11 月に降雨を見る。前者が群島東岸を代表する気候であり, 後者が西岸型である。このほか, 山脈や島にはさまれた地域に寡雨地帯が現れ(カガヤン谷, 中部ビサヤなど), 南部フィリピンの低緯度地帯では年平均した降水をもつ赤道モンスーン型の気候となる(ミンダナオ島南部)。群島を襲う台風は年平均 19 個といわれるが, この影響を受けるのはビサヤ諸島以北で, 特に東岸部で毎年大きな被害をみる。

【住民】フィリピンの住民構成はきわめて複雑に見えるが, 人種的には南方モンゴロイドといわれる新マレー系人種を中心に, 少数民族としてコーカソイドとモンゴロイド両方の形質をもつ旧マレー系人種, ネグリト, それに中国人, ヨーロッパ人が混じっているにすぎない。分離独立を叫んで今日激しく中央政府と対立しているフィリピン人イスラム教徒のモロ族にしても, 人種的にはタガログ, セブアーノと同じ新マレー系である。民族構成を複雑にしているのは, 人種ではなく宗教であり言語である。

フィリピン住民の実に 93% がキリスト教を信じる。これはスペインの遺産であって, 各町に教会が置かれ, 人々はここで毎週日曜日にミサをあげ, 洗礼, 婚礼などの人生の主要儀礼を行う。しかし, 同じキリスト教徒でもそこにはローマ・カトリック(85%), プロテスタント(3%), フィリピン独立教会(4%), イグレスシア・ニ・クリスト(キリストの教会, 1%)などの派がみられ, 別々の教会で別々の儀礼を執り行う。残る 7% の人口のうち 4~5% がイスラム教徒で, 南部を中心に約 250 万人を数える。彼らはマラッカ王国最盛期に教化され, 16 世紀後半以降フィリピンを植民地化したスペインに対し, 頑強にその支配を拒んだ唯一のフィリピン人であった。このほかの 2% はそれぞれ土着の宗教を信仰する人たちである。

フィリピン諸語は, 言語学的にはいずれもアウストロネシア(マラヨ・ポリネシア)語族に属し, マレー語, ジャワ語などとも多くの共通点をもつ。とはいえ, フィリピン人はこれらフィリピン諸語を相互に全然理解できず, 一方が他方の言語修得に最低半年を要するほどである。その数は 134 種とも 186 種ともいわれるが, 主要なものだけでもタガログ(1990 年センサスによると全人口の 27.9% が母語とする), セブアーノ(24.3%), イロカノ(9.8%)など 8 種類を数える。このように多種の言語の存在は, 住民自らの力による民族統一の歴史を欠いたことによることはいうまでもない。1939 年タガログ語を国語の基礎にすることが制定されたが, 英語がそのまま公用語, 授業用語として残ったために国語の普及は大いに遅れ(1959 年に国語はビリピーノ Pilipino と命名された), 70 年の普及率はようやく 55% にすぎなかった。70 年代に入ってからナショナリズム高揚もあって, 最近では普及がかなり進んだとみられる。

梅原 弘光

【社会】フィリピンの宗教別人口比は[住民]の項で述べられたとおりであるが, それを大別すると, キリスト教系の宗教, イスラム, その他に三分される。外来の世界宗教が到来する以前のフィリピン住民の宗教は, 精霊信仰(アニミズム)であった。今日でも山岳地帯に住む少数民族は精霊信仰をもっている。世界宗教の中で最初に伝来したのはイスラムで, 14 世紀後半ころから南部を中心に広まり, 現在ではスールー諸島, ミンダナオ島西・南部の平野部および海岸地帯, パラワン島南部の海岸地帯に広がっている。カトリシズムは 16 世紀後半にスペインの植民地支配とともにもたらされ, 全人口の 8 割以上を占める宗教となった。フィリピン独立教会は, フィリピン革命期に, カトリック教会の人種差別に抵抗して生まれた民族教会で, 1902 年に正式に発足した。信徒は北イロコス州を中心に全国に散在している。プロテスタンティズムは, アメリカの植民地支配とともに到来した。アメリカ文化はフィリピン社会にきわめて大きな影響を及ぼしたが, プロテスタンティズムはそれほど浸透しなかった。アメリカ体制期に入って, 宗教の自由が認められるようになって以降, さまざまな新宗教が登場した。その中で最大のものが, イグレスシア・ニ・クリストである。フィリピンを訪れると, 全国いたるところの町々で, 高い尖塔をもつ白亜のものものしい教会に出会う。これがイグレスシア・ニ・クリストの教会である。この他に注目される新宗教は, 一般にリサリスタ Rizalista と総称される諸宗教組織である。リサリスタの特徴は, 民族英雄リサルがやがて救世主として人々を救いに来てくれるという信仰にある。

フィリピンの宗教は多様であるが, おおかたのフィリピン人の社会生活は, カトリック教会の教会暦を中心に展開されている。とくにたいせつな年中行事は, クリスマスと四旬節の諸行事, それに各町の守護聖人を祝うフィエスタ, そして万聖節, 万霊節である。これらの年中行事には, 家族や親戚が一堂に会して相互の連帯を深め合う。現在フィリピンの民衆が実行しているカトリシズムは, かつての精霊信仰時代の儀礼や信仰を多く包摂していて, 公式のカトリシズムからは相当に逸脱している。そのような意味で, フィリピン民衆のカトリシズムはフォーク(民俗的)・カトリシズムと呼ぶことができるが, こうした現象は, 南部の人々が信仰している

イスラムについても、同様に指摘することができる。

フィリピン社会で最もたいせつな社会的紐帯は家族血縁関係である。あらゆる社会的関係は家族血縁関係を中心に組織され、拡大強化されるといっても過言ではない。家族の形態は夫婦と子どもからなる核家族が一般で、親族関係は双系制を基本とする。しかし、現実には機能している家族や親族の観念は、擬制的親族関係や姻族が加わって、もっと複雑で柔軟な広がりをもっている。擬制的血縁関係として代表的なものは、儀礼兄弟制度とコンパドラスゴ(儀礼的親子関係)である。フィリピン企業の多くが親族会社の形態をとり、社会のあらゆる場で縁者びいき(ネポティズム)が盛んなのも、こうした家族血縁関係を反映している。

フィリピンでは教育の価値が広く認められていて、教育制度も進んでいる。現在の学制は初等教育 6 年(初等科 4 年と中間課程 2 年)、中等教育 4 年、大学 4 年となっていて、最初の 6 年間は義務教育である。初等・中等教育の生徒登録率は 9 割に近い。しかし、学校教育における最大の問題は言葉である。小学校 1, 2 学年のときは地方語で教育を受け、同時に国語ビリピーノを習いはじめる。そして 3 学年以上になると英語とビリピーノが教育用語になり、上級になるに従って英語の占める比重が大きくなる。中等教育機関および大学ではほとんど英語で授業が行われている。教育を大衆化し、質的に向上させるためには、教育用語問題の解決が最大の課題である。

【歴史】

【**バランガイ社会**】フィリピンの歴史が、文献史料に基づいて本格的に明らかになるのは、16 世紀後半、この地域がスペインの植民地支配下に置かれて以後のことである。それ以前の時代については、中国の史書に断片的な記録が残されているだけで詳しいことはわからない。中国の記録で最も古いものは、13 世紀初めに書かれた趙汝当(ちようじよかつ)の《諸蕃志》で、同書にはフィリピン群島に比定される麻逸国、三嶼、蒲哩嘩の産物と風俗が記されている。しかし、これらの地名がフィリピン群島のどこに当たるかは、いまだに確定していない。

元代末の 14 世紀半ばに著された、汪大淵の《島夷誌略》には、あらたに麻里嘩(マニラ)、蘇禄(スールー)などの地名が登場する。フィリピン群島で最初に統一的な政治支配が成立したのは、この蘇禄、すなわち、スールー諸島の中心地、ホロ島においてであった。ホロ島では 15 世紀の中ごろに、スルタンのアブー・バクルが支配するスールー王国が成立した。《明史》によれば、スールー王国は中国の明朝と一時期頻りに交流した。しかしホロ島以外の地域では統一的な政治支配はみられず、住民はバランガイと呼ばれる小規模な集団を形成して生活していた。バランガイの規模は通常 30 から 100 程度の単位家族から成っていたが、交通の要衝、例えばルソン島のマニラ湾沿岸やリンガエン湾沿岸、カガヤン河口付近などには、2000 人以上、ときには 1 万人近い大規模なバランガイもみられた。

【**スペインの支配**】1565 年よりフィリピン侵略を開始したスペインは、71 年にマニラをフィリピン支配の主都と定め、以後 10 年ほどの間に、ルソン島ならびにビサヤ諸島の平地部をその支配下に置いた。そして 17 世紀前半までに、州(アルカルディーア)、町(プエブロ)、村(バリオまたはバランガイ)の 3 段階から成る地方行政制度を設立した。植民地行政の中でスペイン人が担当したのは、マニラの中央政府と州政府までで、それ以下の地方行政はフィリピン人の手にゆだねられた。これらの町村レベルの原住民役人を総称してプリンシパリーアと呼び、かつてのバランガイ社会の首長層がその任に当てられた。スペインは政教一致の支配体制をとったので、植民地の住民はすべてカトリックへの改宗を強制された。行政単位の町は、教会組織の小教区と完全に重なっていて、町役場と教会と広場が、町の中心部を形成するシンボルであった。教区司祭は通常、スペイン人修道会士が任命されたので、彼は町以下の地方社会に存在する唯一のスペイン人として、住民の精神生活のみならず、統治行政面でも絶大な権限をふるった。

スペイン統治下で住民の経済生活は長らく停滞的であった。スペイン政庁は住民に人头税(トリブート)、強制労働(ポーロ)などを課して、生産の余剰を収奪する一方、移動の自由や融資活動などに制限を加えて、住民の交易活動を抑圧した。城壁都市マニラに集住したスペイン人の消費生活を支えたのは、パリアンなどに住む中国系の商人と職人であった。中国系商人はマニラとメキシコのアカプルコを結ぶガレオン船貿易の集貨業務をも一手に引き受けて、フィリピン経営のなくてはならぬ存在となった。

スペインはルソン島とビサヤ諸島の平地部を征服したのち、未征服の山地部と南部の征服を企てた。しかし、両地域はスペイン体制の末期まで、ついにスペインの進出を許さなかった。とくに南部のイスラム地域では、ホロ島をはじめとして、ミンダナオ島のコタバト地方やラナオ地方などにモロ族による強力なスルタン国家が成立していたので、スペイン政庁はこれらイスラム地域と 3 世紀近くにわたって、モロ戦争と呼ばれる熾烈な戦いを繰り返した。

18 世紀後半に入って、スペイン政庁はフィリピンの経済開発を模索するようになった。1782 年に開始されたタバコの強制栽培制度、85 年の王立フィリピン会社の設立はその一環であった。しかし、住民経済を自給自足経済から商品作物農業へと一大転換させたのは、1834 年のマニラ開港に伴う外国貿易であった。これ以後フィリピンの外国貿易は、イギリスとアメリカを主要な相手国として発展した。両国から輸入される綿織物や機械製品に対して、フィリピンからは砂糖、マニラ麻、タバコなどの一次産品が輸出された。これらの輸出用商品作物が特定の地域で特化されるに伴って、米、トウモロコシなど、その他の農産物の商品化も進展し、フィリピン群島の広範な地域に商品農業が導入された。外国貿易を契機として、国内の流通経済も盛んになった。この分野を担ったのは、中国系メスティソ(混血)であった。生産現場の農村では、商品経済の進展に伴って高利貸が横行し、担保流れて土地を失う農民が増える一方、高利貸や仲買商人らによる土地集積が進行した。1830 年代以降はフロンティアの開発も盛んで、カガヤン谷、中部ルソンの辺境地帯、タヤバスやバタンガスの低地帯、ビサヤ諸島のネグロス島、パナイ島北・中部、セブ島などが、イロカノ族、タガログ族、セブアーノ族らによって開拓された。こうした一連の経済発展の中から、地主、仲買商人などの新興の有産階級が誕生し、植民地支配に批判を抱くようになった。

【**フィリピン革命**】植民地支配に対する抵抗運動は、スペイン進出の当初から数多く展開された。しかし、それらの抵抗運動の中で、人種差別の不当性を初めて明確に主張したのは、1840 年代末に始まるフィリピン人神父の権利擁護運動であった。この運動は 72 年のゴンブルサ事件で大弾圧をうけて潰滅したが、この事件の衝撃で目ざめた民族意識は、やがて 1880 年代にプロバガンダ運動と呼ばれる改革運動を生み出した。プロバガンダ運動の担い手は、マニラの中等教育機関(コレヒオや師範学校など)やサント・トマス大学、さらには遠くヨーロッパ諸国へ遊学ないしは留学した、新興有産階級の子弟であった。彼らは自国の主都マニラとスペインの首都マドリッドとを主要舞台にして、フィリピン支配の改革を求める言論活動を展開した。この運動の中で、リサルやデル・ピラールらの著名な知識人が輩出し、機関紙《ソリダリダッド》が発行された。プロバガンダ運動はフィリピン社会に、初めて全民族

を統一する民族思想を創り出し、植民地支配を一つの体制悪として総合的に批判する理論をつくり出したが、現実の改革要求については何一つ実現することができなかった。

96 年 8 月、ルソン島のタガログ 8 州を主要舞台にして、フィリピン革命が開始された。革命を主導したのは、秘密結社カティブーナンであった。しかし、革命開始後まもなくして、革命軍内部には、地域主義と階級の違いを主要因とする、深刻な指導権争いが生じ、革命のリーダーシップはカティブーナン総裁ボニファシオの手からカピテ州プリンシパリア階層の先頭に立つアギナルドの手に移った。アギナルド指導部は 97 年 12 月スペインと和約を結んで、革命終息をはかり、彼らは香港へ亡命した。しかし、革命戦線はむしろこの頃から全国的に拡大しはじめた。折しも、98 年 4 月、革命軍支援の名目でアメリカが事態に介入し、亡命中のアギナルドを帰国させて、再度革命政府を樹立させた。しかし、アメリカの真意がフィリピン占領にあることを知った革命軍は、独力でフィリピン全土の解放を旨とした。

98 年 6 月、革命政府は M. ボンセ、F. リチャウコの 2 人を日本へ派遣して、武器、弾薬の調達と日本の支援獲得に当たらせた。日本の軍部は当初より、フィリピン革命へ介入する機会をうかがっていたが、日本政府はアメリカのフィリピン介入に対して局外中立の立場を表明していたので、日本軍部から武器を購入しようとするボンセらの交渉は難航した。しかし、ボンセはその後、日本滞在中の孫文の紹介で宮崎滔天、犬養毅らの知遇を受け、これら日本人アジア主義者の協力で、陸軍参謀本部から中古の村田銃などの払下げを受けた。この間にアメリカは、98 年 12 月、スペインとの間にパリ条約を結んで、フィリピンの領有権を獲得した。他方、革命政府は 99 年 1 月、マロロス憲法を公布してマロロス共和国(第 1 次フィリピン共和国)を樹立した。その結果、99 年 2 月、革命軍とアメリカ軍との間で、フィリピン・アメリカ戦争が勃発するにいたった。日本陸軍から払い下げられた武器・弾薬は 99 年 7 月、布引丸に積載されて長崎港を出航したが、途中、上海沖で台風に遭って沈没し、鶴首待望する革命軍の手には届かなかった(布引丸事件)。日本陸軍はまた、武器払下げと交換に、日本軍人を革命軍に招聘するよう要請し、原禎中佐以下 5 人の軍籍を離脱した 軍人 と民間人平山周が別途フィリピンへ渡った。しかし、彼らも意思の疎通をはかれなかったことなどから、なすところなく、短期間でフィリピンを引き揚げた。軍備に劣る革命軍は執拗なゲリラ戦を展開したが、アメリカの近代兵器の前に敗北した。

【アメリカの支配】アメリカは 1902 年より本格的なフィリピン統治を開始した。軍事力に勝るアメリカは、スペインが征服することのできなかった山地部やイスラム地域にも侵略の歩を進めた。しかし、イスラム地域の抵抗は依然強力で、15 年のカーペンター=キラム協定まで戦闘が続いた。そして、この時点で初めて、フィリピン全土が一つの政府の下に置かれることになった。アメリカは、侵略戦争のさなかからすでに教育を植民地支配の柱に据えて、全国津々浦々に小学校を建設した。そして、小学校から大学まで、アメリカのカリキュラムに従って英語で授業が行われた。アメリカの統治は、当初、フィリピン委員会が立法府と行政府を兼ねるかたちで始まったが、07 年に一院制のフィリピン議会が開設され、さらに 16 年にはジョーンズ法によって二院制議会が設立されたので、立法権は漸次フィリピン人の手に移った。また、行政府のフィリピン人化も 1913 - 21 年のハリソン総督の時代にほとんど実現された。アメリカはこのようなかたちで、アメリカ流民主主義を導入したが、それを享受したのは、フィリピン議会や地方政府の選挙人資格にもみられるように、男子の有産階級出身のエリートのみであった。

アメリカ体制期に入って、フィリピン経済は完全にアメリカに支配されるようになった。1909 年に制定されたペイン=オールドリッチ関税法と、その一部を修正した 13 年の関税法で、フィリピンとアメリカの間には完全な自由貿易が成立した。その結果、フィリピンの外国貿易は輸出入ともに、全面的にアメリカ市場に依存するようになった。この貿易関係を軸に、アメリカ資本は輸出農産物加工部門、貿易・販売会社、鉱業、林業、電力事業などに進出した。

29 年に始まった世界恐慌によって、アメリカ国内では、フィリピン独立の主張が高まった。国内に大規模な農業部門を抱えるアメリカでは、フィリピンの植民地化に反対する声が当初から強かったが、大恐慌を迎えて、その主張が議会の大勢を占めるにいたったのである。その結果、34 年にタイディングズ=マクダフィー法が制定され、翌 35 年 11 月 15 日、独立準備政府たるフィリピン・コモンウェルスが発足した。この頃、フィリピン社会は激動のさなかにあった。自由貿易体制と地主制度の下で窮乏化を加えていた農民が、1920 年代以来全国各地でメシア運動を繰り広げ、中部ルソンや南タガログ地域では、組織化された大規模な農民反乱が相次いだ。こうした窮状を解決すべく、29 年にはフィリピン社会党が、また 30 年にはフィリピン共産党が結成された。

【日本軍政】1941 年 12 月 8 日、太平洋戦争の勃発と同時に、フィリピンは日本軍の侵略を被った。42 年 5 月のコレヒドール島陥落によって、フィリピン全土が日本軍の支配下に置かれた。日本軍は、42 年 1 月より占領地に対して軍政を実施したが、この軍政はまったくの暴力的抑圧体制であった。言論統制のため、軍の認める新聞、ラジオ以外は、すべての報道機関が閉鎖された。政治組織もすべて解散させられ、かわってフィリピン版大政翼賛会 カリバピ KALIBAPI (新生フィリピン奉仕団の略称)が組織された。町内には隣組制度が組織され、治安維持のための相互監視と連帯責任の組織として、あるいはまた、配給制度、勤労奉仕のための組織として用いられた。日本軍はまた、婦女子の凌辱、物資の掠奪、残忍なゲリラ狩り、びんたの濫用で住民の怒りと怨恨を買った。このため、43 年に入ると人心が離反し、反日ゲリラ運動が激化して、軍政の実行が危ぶまれるまでになった。

こうした状況を緩和するために、43 年 10 月、日本軍はラウレルを大統領とするフィリピン共和国の樹立に踏み切った。しかし、それはまったくの傀儡(かいらい)共和国だったので、反日ゲリラ活動はいっそう激化した。全国各地で結成されたおびただしい数のゲリラ組織は、その大半が連合軍西南太平洋司令部の指揮下に属する ユサツフェ・ゲリラ であったが、中部ルソンに根拠地を置いたフクバラハップは、それらとは独立に独自の目標、すなわち、日本軍の追放と地主制打倒の二つの目標を掲げて戦った。44 年 10 月、アメリカ軍のレイテ島上陸を皮切りに、アメリカのフィリピン再占領作戦が猛烈な勢いで展開され、45 年 9 月 3 日、日本軍は完全降服した。

【共和国の試練】日本軍敗退後の飢えと混乱の中で、46 年 7 月 4 日、フィリピン共和国が独立した。初代大統領にはリベラル党のロハスが就任した。しかしこの独立は、アメリカに全面的に従属した名目だけの独立であった。共和国発足の日に締結されたフィリピン通商法で、フィリピンはその後 28 年間、アメリカの経済的支配下に置かれることになった。47 年には軍事基地協定、軍事援助協定の二つの軍事協定がアメリカとの間に結ばれた。軍事基地協定によってアメリカは、フィリピンに存在する 23 の軍事基地を 99 年間にわたって使用できることになった。51 年にはさらに、両国間で相互防衛条約が結ばれた。

政府のこうした対米従属政策と地主体制温存政策に反対して、中部ルソンでは、1946 年から 50 年にかけて、フクバラハップの激しい武力闘争が展開された。土地問題は今や共和国政府の最も深刻な社会不安要因の一つとなった。55 年にマグサイサイ政権下で

制定された土地改革法、63 年にマカバガル政権下で制定された農地改革法は、この問題に答えようとしたものであるが、地主階級の支配する議会で法案は骨抜きにされ、ほとんど実効をみなかった。

1950 年代には体制内エリートの中から反米ナショナリズムが台頭し、フィリピン通商法ならびに軍事基地協定の改正が行われた。反米運動は 60 年代に入って、学生や一般知識人、労働者などの間にも広がり、60 年代後半には 文化革命 あるいは 第 2 次プロバガンダ運動 と呼ばれる、戦闘的な文化運動に発展した。おりから地下では、フィリピン共産党が再建され(1968 年 12 月)、軍事組織である新人民軍も結成された(1969 年 3 月)。こうした高揚する反体制運動と、インフレ、失業問題など山積する経済不安の中で、72 年 9 月、マルコス大統領によって戒厳令が施行され、フィリピン現代史は新しい局面を迎えた。池端 雪浦

【政治】

1946 年の独立以来フィリピンは、1935 年憲法にもとづくアメリカ型議会民主制をとり、ナショナリスト党、リベラル党の二大政党がほとんど交互に政権を交替していた。この安定状態を破ったのはマルコス長期政権(1965 - 86)の出現である。

【マルコス時代】共和国史上初の再選を果たしたマルコス Ferdinand Marcos は、1972 年 9 月戒厳令を布告、議院内閣制を規定した 1973 年憲法の公布を強行した。ただし新憲法にもとづく暫定国民議会は召集停止にしたまま旧憲法下の大統領権限は保持した。結局、81 年 1 月戒厳令を解除したときには、憲法を修正してフランス型の新大統領制を成立させ、そのもとで大統領に選出された。

1970 年代初頭における強権政治への暗転にはそれを招いた客観的な背景がある。そもそも 1935 年憲法下の議会民主政治の実態は、二大政党に集まる伝統的な各地有力家族による支配ということであった。両党間に政治基盤や政綱の上で差はなく、ともに現状維持を利益としていた。経済開発の促進、土地改革はじめ社会改革の推進、他方アメリカへの過度の依存からの脱却という焦眉の課題への対応力を欠いており、その点で 寡頭支配の打破 新社会の建設 の旗印を掲げたマルコスは、フィリピン国軍やテクノクラート、取り巻きビジネス・グループばかりか、広く国民大衆をたやすく惹きつけることができた。

しかし戒厳令初期には強権を背景に矢継ぎ早に展開された革新的政策も 1970 年代末には活力を失った。そのなかで第 2 次石油危機後の世界不況に加えて、83 年 8 月のベニグノ・アキノ元上院議員暗殺事件に起因する政情不安が、深刻な経済危機を呼び起こした。アメリカはじめ国際的な批判が高まり、抑圧されてきた有力家族など反マルコス派は、人権擁護と民主主義を掲げるカトリック教会や多様化した市民運動とともに政権打倒運動を活発化させた。マルコスは事態の打開を大統領選挙の繰上げ実施に賭けた。

【ピープル・パワー革命】1986 年 2 月の大統領選挙は国際的注視を浴びた。混乱した開票経過のなかでマルコスの当選宣告が強行されたが、その直後、国軍改革派を背景にしたエンリレ国防相とラモス副参謀長が野党統一候補コラソン・アキノ(故アキノ議員夫人)Corazon Aquino を擁して決起したことで様相は一変した。反乱派を教会が支援し市民大衆が厚い盾となって防衛するなかで、アメリカ政府が事態収拾の主導権をとり、マルコスをハワイに亡命させた。この経過は 二月革命 あるいは ピープル・パワー革命 と呼ばれる。

アキノ大統領は就任後、 暫定憲法 を公布して立法権をひきつづき掌握し、任命した憲法制定委員会に新憲法起草を急がせた。1987 年 2 月の国民投票で成立した新憲法は、アメリカ型大統領制、二院制議会など政治制度の上では 1935 年憲法体制への回帰であるが、大統領の権限の縮小、大統領・議員の任期制限(大統領は 1 期 6 年)などマルコス色の払拭と独裁再発防止の規定、国民の保護や基本的人権の保障の規定などピープル・パワーに配慮した側面も目立つ。

長期独裁政権、特にその末期の政治・経済の混乱の後を受けたアキノ政権の課題は、和平と和解、経済の再建、民主主義の復活であった。このうちわずかに達成されたのは、脱マルコス化と民主的政治過程の整備という制度面だけであった。共産系武装反乱との和平、国軍の旧悪追及を急ぐあまり、国軍改革派分子による 4 年間で 7 件のクーデタを招き、政情不安は続いた。国際的支援体制のもと始動していた経済回復も水を差されて頓挫した。

これらの課題を最終的に完成させたのは、1992 年 5 月に新憲法下で選出された初の大統領フィデル・ラモス Fidel Ramos である。ラモスは、就任するや武装反乱諸勢力への恩赦と共産党合法化の方針を表明、95 年に国軍改革派との、96 年にイスラムのモロ民族解放戦線との和平にこぎつけた。共産系の民族民主戦線—新人民軍との長い交渉は妥結に至っていないが、共産勢力自体は 93 年に分裂し、勢力は著しく減退した。電力危機の克服など着実な経済運営と対外開放化政策を好感した外資の急流入により、94 年以来経済も好転し、2000 年に周辺諸国の水準に追いつくことを国家目標に掲げるに至っている。

新憲法の一つの柱、地方分権化は、1991 年地方自治法に結実した。地方行政組織は 1995 年現在、76 州、60 特別市と 1543 郡、4 万 1908 バランガイ(村)からなっている。76 州は行政上 16 地方(コルディリエーラ、ムスリム・ミンダナオの 2 自治地方を含む)として括られることが多い。

【外交】対米関係に過度に傾斜していた対外関係は、マルコス政権以来多角化を強めている。1974 年のラウレル・ラングレー通商協定の満期失効は対米 特殊関係 脱却の第一歩であったが、軍事関係でも 91 年、上院はついに在フィリピンの米海空軍基地の存続を否決した。米軍は翌年 11 月撤退を完了し、米比間に残るのは 1951 年調印の相互防衛条約だけとなった。アメリカは経済関係では、往復の貿易額、直接投資残高において優位を保つが、日本に輸入額、年次投資額、とりわけ政府開発援助額で首位の座を譲っている。ただし近年の対外関係多角化の力点はアジア、特に ASEAN におかれている。

米軍撤退は、国内治安主眼の貧弱な防衛力を対外防衛中心に再編する課題を提起した。1995 年の国軍近代化法の制定により 15 カ年計画、当面は 5 カ年計画で兵力を 10 万人に縮小する一方、装備の近代化を急ぐ構えである。

【経済・産業】1 人当り国民総生産 1050 ドル(1995)は中所得国のうちでも低位に属し、またその伸びも世界有数の高い人口増加率(90 年代の年平均 2.3%)も災いして 1985～94 年の年平均 1.7%と鈍い。しかも富の分配は、全世帯の上位 10%が全所得の 36%を手にし、全世帯の 36%が絶対的貧困層に属する状態である(1994)。

労働人口の半数近くが従事する農業では、食糧作物である米・トウモロコシが全収穫面積 1251 万 ha の 52%を占める。輸出作物ではココナッツの比重が同 25%と高く、バナナ、砂糖キビ、コーヒー、アバカ(マニラ麻)と続く(1995)。1960 年代後半以降の高収量品種の導入で米が一時自給状態となったが、80 年代半ばから輸入がふたたび常態化している。懸案の土地改革は、マルコス政権、アキノ政権とも初期には大々的に取り上げたが、持続的な推進力に欠けた。とりわけ膨大な土地なし農業労働者の問題は深刻である。

工業では、独立後、輸入・為替管理、奨励的税制、割高の為替レートなど一連の保護政策が奏功して輸入代替工業化が進展し、1960 年代初頭ではアジアをリードしていたが、その後は停滞的傾向を強めた。高関税や輸入規制など国内保護政策を維持した結果、

雇用節約、国内需要依存、低生産性、資源浪費が体質化したのである。マルコス期に工業政策の転換が図られ、輸出多角化に若干の成果を見たが、政治的に既得権益に手をつけられず、保護主義は基本的に改まらなかった。やっと 80 年の危機に至って経済構造調整計画が始まり、課題は後続の政権に引き継がれた。ラモス政権になって、経済の自由化、規制緩和、公営企業の民営化などの効果が現れ、経済成長の加速化に寄与している。

サービス業は特に就業構造の上から注目される。都市での工業の雇用吸収力の弱さが、農村から排出された過剰労働力をサービス業に向かわせるのであるが、その実体は都市における各種雑業を形成する部分が多く、偽装された不完全就業と見られる。農村、都市を通じて雇用創出は最大の課題であるが、特記すべきことに全世界的に出稼労働者が展開し(1995 年推計で海外在住の移民と出稼労働者計 600 万人)、安全弁となっている。

1990 年代に入り外国直接投資の急流入によって輸出の伸びと構成の変化が著しい。95 年現在、輸出の 77% が非在来の工業製品(半導体など電気電子製品が 43%、衣料品が 15%)であり、在来品は最大のココナッツ製品でも 6% にすぎない。これは反面、中間財、資本財の輸入急増を招き貿易赤字を拡大させているが、出稼ぎ労働者を中心とした海外からの送金は 94 年に約 60 億ドルとも推定され、貿易赤字の大半を埋めている。浅野 幸穂

【文化】フィリピン社会の歴史的形成過程を反映して、フィリピン文化は地域差に富んでいる。大別すると、カトリック文化圏、イスラム文化圏、山地少数民族文化圏に分けられるが、各文化圏の中でも文化領域によっては差異がある。しかしその一方、フィリピン群島全体に共通した文化があることも否定できない。ここでは、国民の大多数が属するカトリック文化圏を中心にみていくことにしよう。

フィリピンで早くから発達した文化様式の一つは、口承の歌と叙事詩であった。この伝統をうけて、スペイン体制期に入ると、パシオンをはじめとする宗教的内容の詩や、コリド korido、アウィット awit などの韻文形式の物語が盛んになった。バラグタスが書いた《フロランテとラウラ》(タガログ語。1838 年作)は、アウィットの古典的名作である。スペインはまた、カトリシズムの宣教をかねて、コメディヤ komedya、モロモロなどと呼ばれる芝居の形式を普及させた。フィリピンで書かれた文学が盛んになったのは、19 世紀末葉のプロパガンダ運動期に入ってからのものであった。スペイン語で長編小説を著したりサルやパテルノ Pedro A. Paterno(1858 - 1911)らが著名である。19 世紀末葉にスペインから伝わったサルスエラは、20 世紀に入ってフィリピンのことばで盛んに演じられるようになり、1920～30 年代に最盛期を迎えた。

サルスエラが衰退する頃から、アメリカ文学の影響を受けた英語の短編小説が盛んになった。英語文学が盛んになるに伴って、フィリピン諸語による文学は、未熟な文学として蔑視されるようになり、この傾向は 1950 年代ころまで続いた。しかし、その中で、L. K. サントスや A. V. エルナンデスらは、タガログ語で優れた社会派の小説や詩を著した。60 年代後半から文化の民族化運動が盛んになり、ピリピーノ語作家や詩人が輩出するようになった。英語の現代作家の中では、ホアキン Nick Joaquin やゴンサレス N. V. M. Gonzalez らが国際的にも知られている。

フィリピンで絵画芸術が本格的に始まったのは、19 世紀末葉に 2 人の巨匠 J. ルナとイダルゴ Felix Resurreccion Hidalgo が登場してからのものである。20 世紀前半には風俗画が盛んで、この流れの中から F. アモルソロが登場した。20 世紀中ごろにいたって、共和国独立と歩調を合わせるように、フィリピン現代絵画時代が幕開けし、オカンボ Hernando R. Ocampo、フランシスコ Carlos V. Francisco、ルース Arturo Rogerio Luz らの多彩な才能が流派を競うようになった。また、この頃からようやく、彫刻芸術にも関心が寄せられるようになり、現在は、トレンティーノ Guillermo Tolentino、アブエバ Napoleon Abueva の 2 人の巨匠が目ざましい活躍を示している。先述の文学と並んで、スペイン文化の影響を強力にうけたのは建築であった。かつてフィリピンには石造りの建造物はほとんどみられなかったが、スペインの植民地支配以後、アンティラン様式と呼ばれる石造りの家が上流階層に広まり、現在でもいたる所にその姿をとどめている。スペイン建築文化の粋が発揮されたのは教会建築であった。教会建築の多くは、現在でも、往時の荘厳なバロック様式を保っている。池端 雪浦

【音楽、舞踊】混血とキリスト教化が顕著な中心部では、ヨーロッパ音楽をそのままの形で演奏したり、スペイン的色彩を残しながらも新しいフィリピン様式と呼べる音楽と舞踊をつくりあげている。たとえば ロンダヤ rondalla という合奏形態は、ギター、マンドリン、フレット付きベースを伴奏に、ユニゾン、3 度平行、パート合唱による親しみやすい旋律をうたい、社交ダンス的に着飾りパターン化したステップで踊る集いの場を支えている。さらに、マレー系の伝統であった ろうそく踊 (ろうそくを立てた皿を手や頭にのせる)や竹踊 ティンクリン tingkling (長い竹の棒をリズムカルに打ち合わせ、踊り手は足をはさまれないように規則正しいステップでアクロバットの如くに踊る)などが、西洋的にアレンジされて受け継がれている。伝統芸能が根強く生きているのは周辺地域においてである。ルソン島北部の山地民族(俗称イゴロット族)はインドシナとのつながりを暗示する平(たいら)ゴング(銅鑼)を大きさの異なる 6 個ないしその倍数で組み合わせ、1 人が一つずつ担当し、構え方や手の使い方を微妙に変えて、音色の多様性を利用した独特のアンサンブルをつくりあげている。このアンサンブル形態は、搗奏竹筒、割れ竹、パンパイプス、竹筒琴の演奏に共通する構成原理をもっている。南部のミンダナオ島やスルー諸島ではゴングに突起がつき、旋律演奏が主眼となる点で北部と大きく異なり、むしろインドネシアのガムランとの関連が大きい。ゴングを横にねかせて枠の上に並べたクリンタン kulintang を中心とするアンサンブルは、5 音階とコロトミック(コロトミー colotomy 音楽的句読法)な規則正しい時間分割を最大の特徴としている。フィリピンの代表的な楽器としては、このほかに口琴(竹製のクビン、金属製のオンナ)、舟形撥弦のクジャピ(カチャビ)、ノーズ・フルート、割れ目太鼓、搗奏竹筒、鉢巻式歌口の笛などがある。音楽は北部の自由リズムとファルセット多用の合唱や語りの独唱、南部のイスラム教徒による装飾音の多い歌唱などに特徴がある。山口 修

タガログ語 タガログ語 Tagalog

フィリピンのマニラを中心とする諸州に行われる言語で、アウストロネシア語族のうち西部語派(インドネシア語派)に属する。タガログ語を母語とする人口は約 1000 万(1975)で、それはフィリピン全人口の 4 分の 1 に満たないが、1937 年にすでにフィリピンの国語に指定され(このタガログ語を基礎とした共通語はピリピノ語 Pilipino と呼ばれる)、小学校の正課として教えられているから、タガログ語を理解する人口は多い。タガログ語と最も近い関係にある言語は、ルソン島南端のピコル語 Bicol と、パナイ島、サマル島、レイテ島に行われる北部ビサヤ諸語(ビサヤ語)である。タガログ語の音素は/a, e, i, o, u, p, t, k, ʌ, b, d, ʃ, m, n, ɸ, s, h, l, r, w, y/および母音の長短である。語順は VSO(動・主・目(客))あるいは VOS(S が代名詞の場合は常に VSO)。修飾語は 1 語ならば被修飾語の前に、長ければ後に現れる。動詞は態・相によってかなり複雑に変化する。土田 滋

アウストロネシア語族 アウストロネシアごぞく Austronesian

南島語族 の意。マレー・ポリネシア語族 Malayo - Polynesian と呼ばれる。西はマダガスカル島(マラガシ語)から東はイースター島(ラパヌイ語)まで、北は台湾(高山族諸語)およびハワイ島(ハワイ語)から南はニュージーランド(マオリ語)に及び広大な地域で話される諸言語を含む語族であるが、オーストラリアとニューギニアの大部分は非アウストロネシア系の言語(オーストラリア諸語、パプア諸語)である。正確な言語数は不明だが、おそらく 800 ~ 1000 にのぼるものと推定され、言語数と地域的広がりでは世界最大の語族である。

【分類と故地】アウストロネシア語族は、通常、大別して西部語派(インドネシア語派あるいはヘスペロネシア語派ともいう)と東部語派(オセアニア語派ともいう)の二つに分類されるが、台湾の高山族諸語をそれらに対立する第 3 の語派と認めるか否か、そして西部語派と東部語派の地理的な境界線は西イリアンのどのあたりにあるのか、についてはいまだに議論が多く、結論を得るにいたっていない。古くはアウストロネシア語族をインドネシア語派、メラネシア語派、ポリネシア語派に三大別する学者もいたが、現在では後 2 者は東部語派の下位区分にすぎないものと考えられている。アウストロネシア諸語を話す人口のほとんどは西部語派に属し(1980 年統計で約 2 億人)、東部語派諸語の話し手はわずかにその 100 分の 1(約 200 万人)にすぎない。

アウストロネシア語族の故地は、1889 年オランダのケルン H. Kern によってインドシナ半島北東部沿岸であったろうと推定され、多くの学者によって支持されているが、アメリカのダイエン I. Dyen は、アウストロネシア諸語の現在における分布状態から推測し、ニューギニアが故地であった可能性を示唆している(1956, 65)。

【他語族との関係】オーストラリアの W. シュミットは、アウストロネシア語族とアウストロアジア語族が親縁関係にあったとし、両者を合わせてアウストリック語族なる名称を与えたが、科学的に証明されたわけではない。近年アメリカのベネディクト P. K. Benedict は、アウストロネシア語族がコーチシナや海南島の非漢語系の言語(カダイ諸語と呼ばれる)を介してタイ諸語と親縁関係があるとし、アウストロ・タイ語族を提唱しているが、いまだ定説とはなっていない。

【祖語の再構】音韻・文法ともに、東部語派よりは西部語派の方がはるかに複雑な体系を持っており、いわば古形を保っている。一般的に言えば、東部語派は著しい簡化を蒙っており、したがって共時的にも通時的にも研究が比較的容易であるが、西部語派にあっては各言語間の差が甚だしく、研究者の数が少ないこともあって、研究が遅れている。アウストロネシア祖語の再構はドイツのデンプウォルフ O. Dempwolff によって一応の集大成を見たが(1934 - 38)、その再構は音韻と語彙の分野にとどまる。その後の研究は主としてダイエンやブラスト R. Blust らによってデンプウォルフの再構に修正を加えるという形で進められている。文法の再構は現在のところやっとその端緒についたばかりの段階である。

【言語構造の特徴】西部語派諸語における語根の音節構造は、一般に(C)V(C)(C は子音, V は母音)であるが、東部語派にあっては末尾子音が脱落し、(C)V となる言語が多い。単語の形は原則としていずれの語派でも 2 音節が基本である。表は以下のような点を例示したものである。東部語派の一般的な特徴である末尾子音の脱落(泣く, 雨), *p 対*b(左肩に付した*は言語学的な仮定としてあてはめられた表記, 形態であることを示す)の対立の消失(7, 新), ポリネシア諸語における*D 対*l の対立の消失(2, 5), 水田耕作に関する語彙が東部語派には欠けていること(稲, 稗), 西部語派の中でも台湾の言語が古形をよく保っていること, など。接頭辞, 接中辞, 接尾辞には多くの種類があり、さまざまな意味の違いや活用形, 派生語を作り得るが(表の 泣く の例を参照), 東部語派では接中辞はごく少数の単語に化石化した形で残っているのみである。動詞には能動態, 受動態の別があり, しかも受動態の中に数種の区別がある(西部語派では焦点 focus, 東部語派では自動 intransitive, 他動 transitive と呼ばれることが多い)。主語, 目的語, 行為者などの別は, 動詞の活用形と冠詞によって示される。

タガログ語では, nag - bigay(与えた)na ペ(を)bigas(米)ボ a ペ(は)ta ボ o(人)sa(に)bata ボ(子ども) (その)人は子どもに米を与えた, ボ i - b - in - igay na ペ ta ボ o ボ a ペ bigas sa bata ボ (その)米は人が子どもに与えた, b - in - igy - an na ペ ta ボ o ボ a ペ bata ボ na ペ bigas (その)子どもは人が米を与えた。フィジー語では, eratou(彼らは)ペ unu(飲む)wai(水) 彼らは水を飲む, eratou ペ unu - va na wai (その)水は彼らが飲む。土田 滋

アウストロネシア語系諸族 アウストロネシアごけいしよぞく

アウストロネシア語族つまり南島語族ないしマレー・ポリネシア語族に属する言語を用いる諸族の総称。その分布域は東はイースター島から西はマダガスカル島にまで及ぶが、その原郷は、中国大陸南部かあるいは台湾であったと考えられる。その理由は、アウストロネシア語族のなかで最も早く分岐したと思われる台湾諸語が台湾にあり、アウストロネシア語と親縁関係があると思われるアウストロアジア諸語やカダイ諸語が華南からインドシナにかけて分布しているからである。

アウストロネシア語系諸族の初期の移動とその考古学的痕跡については、まだ十分に明らかではないが、台湾における縄蓆文(じようせきもん)土器文化は、今日のアタヤル語の祖先に当たるある初期アウストロネシア語と結びつき、年代は前4000年あるいはそれよりさらに前にさかのぼるという説もある。台湾から南にフィリピンに出、そこからインドネシアにひろがったのはヘスペロネシア語派で、新石器時代のうちに西部インドネシアにまでひろがり、そのなかから紀元前後ごろにインド洋をこえてマダガスカルにもその話し手が住みつくようになってきた。アウトリigger(浮木)つきのカヌー、稲作、ピストン型のマレー式尾(ふいご)による鍛冶技術などがアウストロネシア語とともにインドネシアからマダガスカルにひろがった。太平洋を東に進んだオセアニア語派の起源地は、東南アジア島嶼部のどこかであったと思われるが、明らかでない。ニューギニアから東へポリネシアに向かう足どりは、ラピタ式土器文化によってあとづけることができる。前1000年を中心とする数百年間のうちに、新石器的な文化段階において、アウストロネシア語を話す人々はメラネシア島嶼部の大部分と西部ポリネシアに地歩を固めた。その過程で彼らは、この地域の広範な島々に

もタロイモやヤムイモのような栽培植物や、豚、犬、鶏のような家畜を持参したが、このような島の世界への進出は、彼らがアウトリIGGER-つきのカヌーという航海手段をもっていたことにより、はじめて可能となったものである。

オーストロネシア語系諸族はその移動と発達過程において、ジャワやスマトラ、バリなどに高い文明を生み出し、また中部ベトナムのチャンパ文明も彼らのつくったものであった。他方、近年まで採集狩猟段階にあったルソン島のネグリティは固有の言語を失い、オーストロネシア語系の言語を採用した。ニューギニアとメラネシアの一部地域では、オーストロネシア語系諸族は先住のパプア(非オーストロネシア)系諸族とあちこちで接触したが、その結果彼らがいかなる、またどの程度の変化を文化、言語においてこうむったかについては、まだ定説はない。

オーストロネシア語系諸族の親族組織の原型は、双系出自に基づいたものと考えられ、非単系的な親族集団が土地所有の単位として重要な役割を果たしたと言われ、ポリネシアやミクロネシアでは近年までその実例があった。東南アジア、オセアニアにおける農耕起源神話の諸形式のうちで、オーストロネシア語系諸族の世界にほとんど普遍的に分布し、かつこの地域の他の諸族の所ではそれほど著しい結びつきを示していない神話形式は、神や人の死体から作物が発生した形式である。ただ台湾にはこの神話形式が見られず、またオーストロネシア語系諸族が一般的に保持しているアウトリIGGER-つきのカヌーや高床住居もほとんど、あるいは完全に欠如しているのが目につく。これらの要素は、台湾諸語がオーストロネシア語族の主流から分岐したのちにつけ加わった要素かもしれない。大林 太良

リサル 1861 - 96 Jose Rizal

フィリピン革命に先立つ改革運動の中心的指導者、民族英雄。ルソン島南部のラグナ州カランバ町の教養ある大借地農の家庭に生まれ、マニラのアテネオ・デ・マニラ学院、サント・トマス大学で学んだ後、1882年スペインのマドリード中央大学に留学して医学と古典文学を学んだ。留学前から民族意識に目覚めていたホセは、フィリピンに比して自由主義的な植民地本国の空気の中でその自覚を強め、同胞の留学生らに呼びかけてフィリピン統治改革を求める言論活動(プロパガンダ運動)を開始した。87年出版の最初の小説《われに触れるな》はスペイン当局に強い衝撃を与え、彼らの運動を一躍有名にした。しかし、この年帰国して郷里カランバ町で組織した修道会所領の小作料値上げ反対運動は当局の徹底した弾圧を受け、指導者の彼は国外脱出を余儀なくされた。この経験以後、穏健な改革運動は不毛だとの認識を深め、状況によっては革命もやむなしとする急進的な思想を抱くにいたった。2番目の小説《反逆》(1891)はそのメッセージを伝えたものである。同時に彼はこの事件以後、スペイン当局に向かってする言論活動よりも、フィリピン人自身の民族的自覚を育成する著述活動に専念するようになった。92年6月決死の覚悟で再度帰国し、7月2日にフィリピン民族同盟を結成してその思想の実践に着手した。しかし数日後に反逆罪の名で逮捕され、ミンダナオ島のダピタンへ流刑された。幽囚の生活に疲れた彼は、96年スペイン政府軍医としてキューバ独立戦争に従軍することを申し出て、一度はスペインへ到着したが、同年8月フィリピン革命が勃発したため、革命扇動者の容疑をうけて連れ戻され、12月30日に処刑された。 池端雪浦

コンパドラスゴ compadrazgo

イベリア半島やラテン・アメリカの諸国のカトリック教徒にとくに顕著にみられる、代父母(だいふぼ)と実父母との間の関係とそれに伴う慣行をいう。一般にカトリックでは洗礼を信仰の誕生として、実際の誕生以上に重視する。子どもの洗礼式には、実親でない成人が代親として出席し、立会人としての務めを果たし、以後代親は精神的親としてふるまい、一方代子は精神的子どもとして代親に奉仕する。この精神的儀礼的親子関係はスペイン語ではパドリナスゴ padrinasgo と呼ばれ、カトリック教会によって認められ制度として確立した。正式には洗礼授与者(一般に司祭)も受礼子(代子)と儀礼的親子関係を結ぶが、民衆のレベルでは重視されない。堅信、婚姻式にも同様の関係が結ばれるが、この洗礼時の代親関係がとくに重視されており、このパドリナスゴを基にして、代親と代子の実親の間にも儀礼的關係が拡大して相互に規定しあう慣行が成立している。この傾向は地中海カトリック諸国とラテン・アメリカ諸国に顕著にみられ、とくにイベリアの南部農村地帯とラテン・アメリカ農村地帯では、制度的色彩をもって発展し定着した。彼らは互いにコンパドレ compadre(女同士では comadre)と呼びあい、友人や親しい間柄で呼びあっていた“tu”(おまえ)を避けて“usted”(あなた)を使い始める。これは代親が比喩的にキリストの聖家族に位置づけられるため、世俗的でなくなったことを意味する。以上の受礼子を媒介として実親と代親同士が相互信頼と協力によって儀礼的絆を保つ慣行をコンパドラスゴと呼ぶのである。この慣行はパドリナスゴより派生した二次的儀礼親族関係であり、現在教会は、この慣行を正式に認めていない。だがスペインより新大陸にもち込まれた儀礼的親族関係では、パドリナスゴよりもコンパドラスゴのほうがはるかに重要な意味をもっている。

親たちは子どもの誕生を機にして、有力者をコンパドレとして親族関係にとり込む好機をのがさなかった。そこでは親族なるがゆえに婚姻の回避と性のタブーは守られてはいたが、互助互惠の関係は現実生活の実利面に限られ、コンパドレという語義の意味での対等互惠の立場は希薄化し、代親に対する実親の一方的奉仕とその見返りとして庇護を与える形、つまり親方・子方の関係へと変貌していった。もちろん、同じ階層内の友人をコンパドレに迎えるときは対等平等の関係にあるが、この場合でも精神的なレベルではなく、世俗的な経済協力を置換されてきている。このようにしてコンパドラスゴの組織化は、ラテン・アメリカの農民社会を舞台に伸張り、政治・経済上の底辺にある人びとを擬制的に親族としてくみ込む前産業型の社会糾合の一形態をなしているかの観を呈している。このような関係はその舞台の都市化・産業化とあいまって解体を余儀なくされ、量的には減少するであろうが、他方、都市化の進行により個人間のパーソナルな関係が弱まるにつれて、逆にきわめて密度の高い親方・子方の結びつきが進行する傾向も無視することはできない。 親分・子分灘代父母 佐藤 信行

麻逸 まいつ

宋代、元代の中国の史書に記されたフィリピンのミンドロ島付近の名称。スペイン統治以前のフィリピン諸島に関する文献記録はきわめて少なく、その中でも最も古い記録は、中国人趙汝当が宋代の13世紀初めにまとめた《諸蕃志》に出てくる麻逸国の記述とみられている。麻逸国はミンドロ島付近をさすと考えられ、この記述は先スペイン期のフィリピン社会を知る貴重な史料である。麻逸の記述は元代に書かれた《島夷志略》にも現れるが、明代にはみられなくなり、代わって呂宋(ルソン島にあたる)の記述が登場するようになる。池端 雪浦

アブー・バクル ? - 1480 ころ Sayyid Abu Bakr

フィリピン南部にあったスルー王国の初代スルタン。公式の名はスルタン・シャリフ・ウル・ハシム Sultan Sharif ul - Hashim。スー

ルーに残されている系図録(タルシラ)によれば、彼はスマトラ島のパレンバンから来たアラブで、スーラーの中心であるホ口島の有力首長ラジャ・バギンダの娘パラミスリと結婚して、義父の政治的地位を継承するとともに、イスラムの教えを体系化して住民の改宗につとめた。その結果彼は、ホ口島の首長たちを政治的にも宗教的にも支配する、スルタンとしての地位を確立した。在位期間は1450年ころから80年ころまでと推定される。池端雪浦

スーラー王国 スーラーおうこく

フィリピン南部のスーラー諸島に形成されたイスラム王国。スーラー諸島の中心地、ホ口島では13世紀末ごろから外来商人のイスラム・コミュニティが形成されていたが、島の原住民にイスラムが普及したのは、15世紀中ごろのことであった。このころスマトラ島から渡来したアラブ人アブー・バクルが島の内陸部住民をも改宗させて、ホ口島全体にスルタン制度を樹立した。ホ口のスルタンの支配力はやがてスーラー諸島全域に拡大した。1645年にはボルネオのブルネイ王国の内紛に介入して、同島北部の領有権をも獲得した。16世紀後半フィリピン群島の北・中部がスペインの支配下に入ると、スーラー王国はスペインの南部侵略の標的となった。しかし、スーラー王国は近隣のイスラム諸勢力の協力を得て、その後3世紀余にわたってスペインの植民地支配を許さなかったばかりでなく、スペインの支配地域に対して報復の海賊行為を展開して、甚大な被害を与えた。外国勢力の侵略に対するスーラー王国の抵抗は、アメリカの支配に対してもいかに発揮された。アメリカは1898年にフィリピン群島の領有権を獲得したが、スーラー王国がアメリカの支配に服したのは、1915年のカーペンター=キラム協定によってであった。池端雪浦

バラングイ barangay

フィリピン群島がイスラム化、スペイン化を被る以前にこの地域に存在した社会組織。フィリピン群島の南部、スーラー諸島やミンダナオ島の一部は、14～16世紀にイスラム化を受け、その過程でスルタン制度の部族国家が成立した。またルソン島、ビサヤ諸島は16世紀後半にスペインの植民地支配を受け、統一的な政庁統治下に置かれた。しかし、こうしたイスラム化、スペイン化以前のフィリピンには、国家や統一的な政治支配はみられず、小規模な一種の首長を中心とする社会が散在するのみであった。この小規模な首長社会を、フィリピン国語の基礎になるタガログ語ではバラングイと呼んだので、それがフィリピン全域にわたる同種の社会をさす歴史用語になった。バラングイは通常30～100戸程度の単位家族で構成され、ダトゥあるいはマギノオなどと呼ばれる首長によって統率された。バラングイの基本的構成員は、首長の親族か姻族であったので、バラングイは親族集団と呼ぶことができる。また首長は専制的な支配者ではなく、もっぱら集団の取りまとめをする同等者中の第一人者であった。首長の下にはバラングイの中核的構成員である自由民ティマガと、アリピン・ナママハイ、アリピン・サギギルルの2種の隷属民がいた。アリピン・サギギルルはふつう戦争などで捕獲された捕虜奴隷で、売買されることもあった。アリピン・ナママハイは負債や罰金刑などのために自由民から転落した身分で、あがない金を払って元の身分に戻ることもできた。このようにバラングイ内の身分関係は、柔軟で流動性の高いものであった。人々はまたある種の儀礼を行って、所属するバラングイを移動することもできた。バラングイ内の紛争は慣習法に基づいて、首長や長老によって裁かれたが、バラングイ間の紛争には近隣の複数の首長や長老による仲裁制度が発達している地域もあって、バラングイを超える政治的統合体の芽生えもみられた。バラングイの宗教は精霊崇拜で、精霊と交流する能力をもつ司祭が、人々の生活に大きな影響力をもった。スペイン政庁は、バラングイを最末端の行政単位として、その上に町(プエブロ)、州(プロビンシア)と積み上げる地方行政組織を作り上げた。この過程でバラングイの名称はしだいに消え、バリオという呼称が一般的となった。1972年に始まるマルコス大統領の戒厳令体制下で地方行政組織の再編成がなされ、バラングイの名称が復活して最も重要な地方行政単位となった。池端雪浦

プリンシパリア principalia

スペイン統治下のフィリピンにおける原住民支配階層。スペイン政庁はフィリピン統治にあたって、町(プエブロ)および村(バリオ)レベルの統治行政に従事する原住民役職者を、一括してプリンシパリアまたはプリンシパーレス principales と呼び、これにトリブート(貢税)や強制労働、兵役などを免除する特権を与えた。具体的には現職の町長および村長、元町長、10年以上継続して村長を務めた経験者、小学校教師、町の助役、田畑監視官、家畜監視官、警備監視官などが法制上これに属した。ほかに町役場の下級役人や教会で働く人々なども、権力者に近いということでこの中に加えられることが多かった。プリンシパリアには先スペイン期の社会組織バラングイの統率者であるダトの家系に属する者が多かったので、一般住民は彼らに伝統的敬意を払った。加えてプリンシパリアにはスペイン権力の後ろだてがあり、その権威はいっそう強化された。19世紀に入って商品農業が発達すると、プリンシパリアの多くは地主あるいは仲買商人として経済力を蓄えた。同様の経済活動で富を蓄積した者が、新たにプリンシパリアとして登用されるケースも多かった。プリンシパリアはその経済力で子弟に高等教育を与え、新しい教養階層を形成した。このようにして、19世紀に入ると政治力、経済力、教養の面で、一般住民に比して圧倒的優位に立つ支配的階層が形成され、フィリピン原住民社会は2階層社会の特徴をもつにいたった。池端雪浦

トリブート tributo

スペイン植民地下のフィリピンで施行された人頭税制度。スペイン政庁はトリブート、ポーロ polo(強制労働)の二つの制度を用いて、フィリピン住民から過酷な収奪を行った。トリブートは1家族または成年に達した2人を一組とする貢納単位(トリブタリオ)ごとに課せられ、その額は制定時の1571年には1年につき銀8レアル、17世紀以降はおおむね10レアルであったが、1851年に12レアル、74年に14レアルに増額され、84年に廃止された。額自体はさほど大きくはないが、実際の徴収はこの額に見合う指定の生産物で行われたので、生産物の評価額をめぐって徴税官の不正が絶えず、住民は苦しめられた。ポーロは16～60歳の男子に対して課せられ、初めは年間40日であったが、1884年に年間15日に減ぜられ、スペイン体制の末年まで続いた。ポーロで徴収された労働力は居住町の道路や教会などの建設のほか、政庁の帆船用木材の伐採、遠征隊の雑役などのために遠隔地に送られ、十分な衣食も給せられなかったため、住民の怨嗟的になった。トリブートとポーロはそれぞれの枠内で、政庁の植民地支配に協力した一部の住民に免除の特権が認められた。このほか、スペイン支配の初期には、植民者社会が必要とする物資を一地方に強制的に割り当て、無料同然で売り渡させる、バンダラ bandala と呼ばれる制度が実施され、住民社会を疲弊させた。池端雪浦

パリアン parian

スペイン統治時代のフィリピンで、おもにマニラの中国人居住地区を指した言葉。セブやナガ、ビガンなどの中国人居住地区や、マ

ニラの日本人居住地区を指す場合もあったが、一般にはマニラのバシグ河口南岸沿いの中国人居住地区の呼称として用いられた。語源については、従来諸説があったが、現在はタガログ古語説が最も有力である。同義語として、しばしばアルカイセリーア alcaiceria(スペイン語で 生糸市場)が用いられたが、それはバリアンで中国人が取り扱った最大の商品が中国産生糸だったからである。スペイン人はフィリピンにいる中国人をサンレイ Sangley, Xanglai と呼んだが、サンレイはスペインのフィリピン経営になくなくてはならない存在だった。彼らは中国からさまざまな商品を輸入して、植民者の消費生活を支える一方、ガレオン貿易の集貨を担当した。また、各種の中国人職人、医師、薬剤師などの存在も植民者の日常生活には不可欠だった。しかし、異教徒で経済力に勝る中国人が増大することは、スペイン政庁にとって脅威でもあったので、1582 年に中国人の隔離居住地区としてバリアンを設置し、彼らの行動を監視するようになった。バリアン設置のもう一つの目的は、特別課税による財源の確保にあった。中国人は原住民より重いトリブート(貢税)を課せられ、さらに、輸入税に相当する三分税や滞留許可税を徴収された。

こうしたスペイン政庁の警戒的・抑圧的対中国人政策が原因で、17 世紀には 4 度にわたる反乱がバリアンで発生し、それに対する弾圧が中国人大虐殺事件をひき起こした。バリアンの所在地は、創設時から 1860 年の解体命令時まで幾度も移動した。大別すると、(1)城壁都市マニラの市内にあった時期(1582 - 93)、(2)マニラ城外東側のサン・ガブリエル地区にあった時期(1593 - 1784)、(3)再度マニラ城内に置かれた時期(1785 - 1860)に分かれる。最盛期は 1630 ~ 40 年代で、居住人口 2 万、店舗数 1000 以上を数えた。しかし 18 世紀後半になると、中国人の居住地区制限は大幅にゆるめられたので、バリアンの存在理由は小さくなった。池端 雪浦

ガレオン船 ガレオンせん galleon

16 世紀前半に出現した帆船の船型に基づく名まえ。ガレー船 galley に語源をもつといわれている。1535 年のポルトガルのタピスリーにその初期の姿がかかれていて、当時全盛をきわめていたカラック船に対し、船幅、竜骨長、甲板長の比が 1 : 3 : 4 と細長く、船首楼や船尾楼が低いのが外形上の特徴である。櫂(かい)を使わぬ全装帆船であるが、低く細長い船体と船首に長く突き出た衝角(後にピークヘッド beakhead と呼ばれる上部構造になる)は、ガレー船の特徴を残している。ガレオン船は 19 世紀まで続く帆船の直接の祖先といわれ、70 年代以降ヨーロッパ各国でカラック船に取って代わり、風による横流れが少なく、速力も出た船である。88 年のスペイン無敵艦隊によるイギリス侵攻作戦は、兵員を多数乗せ、高いところから切込みを行うカラック船主体のスペイン側と、遠距離からの砲撃を行うガレオン船主体のイギリス側との、戦術の差が勝敗を決めたという説もある。1600 年(慶長 5)オランダ船リーフデ号で豊後(大分県)に漂着した W. アダムズ(日本名三浦按針)が、徳川家康に請われて建造した 2 隻の船も、イギリス系のガレオン船であつたろうと推定されている。17 世紀前半にはピークヘッドも短いヘッドに変わり、ガレオン船の名まえも消えたが、新大陸やフィリピンとスペイン本国を往復する船は、18 世紀にもガレオン船と呼ばれていた。 山形 欣哉

【ガレオン貿易】広義には、15 ~ 16 世紀の大航海時代から 19 世紀にかけて、スペインおよびポルトガル両国を中心に展開されたガレオン船による大洋貿易を指す。狭義には、フィリピンのマニラとメキシコのアカプルコを結ぶ大帆船貿易を指し、今日、歴史用語として固有名詞化されて用いられるのは後者である。マニラ ~ アカプルコ貿易は、スペインがフィリピンの植民地支配に着手した 1565 年から 1815 年まで続いた。初期には 2 隻以上のガレオン船が船団を組んで、毎年 1 回太平洋を往復したが、諸般の事情から船数はやがて 2 隻に減少し、最後には 1 隻になった。マニラからアカプルコへ送られた貿易品は、おもにマニラに集貨された中国産の絹織物や陶磁器、工芸品ならびにインド産の綿織物などで、アカプルコからの帰り荷は、大量のメキシコ銀と、毎年メキシコ政庁からマニラ政庁へ送られた王室補助金、それに公文書、新任の官吏や聖職者、補給の兵員などであった。18 世紀末までスペインのフィリピン経営は、もっぱらガレオン貿易に依存していたが、この貿易はまったくの中継貿易だったので、それによってフィリピン群島内に富が蓄積されることも、またフィリピン資源の開発や生産拡大が進められることもほとんどなかった。しかし、スペイン王室はこの定期的なガレオン船の往来で、フィリピン統治を操縦していたのであるから、この貿易は、フィリピン経営の命綱だったのである。池端 雪浦

モロ族 モロぞく Moro

フィリピンのイスラム教徒を総称する名称。16 世紀後半にフィリピンを占領したスペイン人植民者によって命名された。スペイン人は 8 世紀にアフリカ北西部(ローマ時代のマウレタニア、現在のモロッコ、モーリタニア地方)からイベリア半島へ進出してきたアラブやベルベル人をモロ(ムーア人)と呼んだ。マウレタニアの住民を指すラテン語マウルス maurus がその語源である。スペインではやがて モロ は イスラム教徒 の同意語となった。そこでスペイン人は、フィリピンのイスラム教徒に対してもモロの名称を用いたのである。

スペインの進出当時は、フィリピン中北部のミンドロ島やルソン島マニラ湾一帯にもモロ族が存在したが、スペインの征服活動の結果、モロ族の居住地域は、南部のスールー諸島とミンダナオ島およびパラワン島の一部に限られるようになった。スペインはこの南部モロ族社会を征服するために、3 世紀にわたってモロ戦争と呼ばれる侵略戦争を継続したが、ついに成功しなかった。一方、モロ族はこれに対する報復として、スペイン支配下の中北部フィリピンの海岸地帯に果敢な海賊行為を繰り返したので、モロ族社会とキリスト教徒社会の間には、憎悪と対立の関係が形成された。アメリカ占領期に入って、モロ族はキリスト教徒と同一の政治体制の中に組み込まれた。しかし、両者の対立関係は解消されなかった。1946 年に樹立されたフィリピン共和国においても、モロ族社会は文化的独自性を無視されたばかりでなく、少数民族としてさまざまな差別を被ってきた。このため、モロ族の間にはアメリカの占領体制期からすでに、キリスト教徒とは別個の独立国家樹立の要求がくすぶっていたが、この不満は 70 年代初頭に、モロ民族解放戦線(MNLF)を中心とする激しい武力闘争となって爆発した。中東イスラム諸国家の支援を受けたこの運動は、今もって解決をみえない。 池端 雪浦

モロ族は、フィリピンでは公式には ムスリム・グループ と呼ばれる。フィリピン国立博物館が発行している《主要な少数民族部の分布図》によれば、ムスリム・グループとしてミンダナオ島のラナオ地区にマラナオ族、コタバト地区にマギンダナオ族、南ダバオ州南部にサンギル族、サンボアンガ沖のバシラン島にヤカン族、スールー諸島のホロ島にタウスグ族、タウィタウィ島にサマール族、そしてスールー諸島全域にかけてバジャオ族、パラワン島南方のモルボッグ島にモルボッグ族の 8 部族が記されているが、モロ族はかつて海賊として恐れられたように海洋民族であるので、実際の行動範囲はこの分布図の地域にとどまらない。サンボアンガの壮麗なモスクは有名であり、村長や有力者には ハジ の称号をもつ者(メッカ巡礼を果たした者)が多い。男は白い帽子と幅広のラッパ・ズボン、女は色彩鮮やかな広幅の腰布が特徴的である。戒律は必ずしも厳しいとはいえず、毎日定刻のコラン読誦やメッカ礼拝は厳守されてはいないが、金曜日は聖日として休む。なおモロ族というのは蔑称であるとされるが、彼ら自身はモロ族という語

に誇りをもち、モロ民族解放戦線の名が示すように、連帯感をもつ モロ社会 モロ文化 を意識している。
大島 襄二

王立フィリピン会社 おうりつフィリピンかいしゃ Real Compañía de Filipinas

スペインのフィリピン総督パスコによって 1785 年に創設された貿易会社。創設の目的は、フィリピンとスペイン本国間に直接貿易を開き、フィリピン資源の開発と政庁財政の健全化をはかることにあった。パスコが実施したタバコの強制栽培・専売制度と国民経済協会の設立は、この貿易会社創設と密接な関係をもっている。会社はマニラ～アカプルコ間の直接貿易を除いて、貿易の独占権を与えられ、また、フィリピン物産の本国向け輸出はすべて免税とする、東洋諸国への自由渡航を認める、などの特権を認められた。本国向け輸出品の中心はフィリピン産タバコで、これによって政庁財政は著しく改善された。しかし会社の経営はしだいに不振に陥り、1834 年マニラ開港を目前にして、会社は廃止された。経営不振はマニラ～アカプルコ貿易関係者の妨害や、東洋諸国との貿易で直接現地に赴かず、船載するものを購入したにとどまったことなどによる。池端 雪浦

マニラ麻 マニラアサ Manila hemp 蔴 *Musa textilis* Nレ e

アバカ abaca と呼ばれ、葉(葉比(ようしょう))から繊維を採るために栽培されるバショウ科の多年草。原産地はフィリピンとされ、東南アジア熱帯で栽培される。草姿はバナナに酷似して、高さ約 4m の葉比が巻き重なって茎状の偽茎を形成し、これが群がって株をつくる。葉身は狭長卵形で、長さ 3.5m、幅 50cm になる。果実はバナナに似て小型で、種子を有するが、増殖は主として吸芽(株から出た子苗)による。葉比から、強靱で弾力のある硬質繊維を採り、ロープや敷物などに利用する。耐水性があり、比重が小さいため、船舶用のロープに多く利用された。星川 清親

【フィリピンのマニラ麻栽培】第 2 次大戦前、とくに 1910 年代、20 年代にフィリピン最大の輸出商品であったマニラ麻も、最近では 10 大輸出商品の最下位を占めるにすぎず、年輸出額も 2000 万ドル程度(1982)である。生産低下の主たる理由は、病害のほか、戦後の人造繊維の開発によって工業製品に代替されるに至ったからである。マニラ麻収穫面積は 37 年に 50 万 ha で、生産量も 20 万 t に達したが、72 年にはそれぞれ 14.5 万 ha、11 万 t の最低水準に落ちた。当時、死滅しつつある産業 とまでいわれたが、70 年代の石油危機を契機とする人造繊維の生産費上昇によりしだいにマニラ麻への需要が回復し、81 年には 23 万 ha、13 万 t にまで増大した。しかし、マニラ麻を主要所得源とする農家数は 1971 年に 1 万 2500 戸程度にすぎず、栽培農家のほとんどは 5ha 以下の小生産者で、大農園はきわめて少ない。そのため経営合理化の余地は限られている。

フィリピンにおけるマニラ麻の主産地はルソン島南東部のアルバイ州、南・北カマリネス州、ソルソゴン州を含むビコル地方、レイテ島およびミンダナオ島のダバオ州である。マニラ麻には一定した収穫期がないため、年間均等化した降雨量があり、台風の経路からも外れているダバオ州が適地である。第 2 次大戦前、ダバオは日本人の一大移民による農業植民地として有名であった。1934 年に日本人移民数は 1 万 5000 人に達し、その農場面積は約 3 万 8700ha、ダバオで産出されるマニラ麻の 8 割を日本人が生産した。400ha をこえる日本人大農園は 25 に達したとされ、古川拓殖や太田興業会社の名が知られている。しかし、これら日本人農園は戦後すべて現地国側に接収・返還され、小生産者に分割された。その一部が最近バナナ栽培地に転換されている。マニラ麻は船舶用その他ロープの原料、漁網などにおもに用いられるが、最近では製紙原料として注目され、製紙会社の需要が増えつつある。滝川 勉

ゴンブルサ事件 ゴンブルサじけん

1872 年 2 月 17 日フィリピンで 3 人の在俗神父、ゴメス Mariano Gomez(1799 - 1872)、ブルゴス、サラモ Jacinto Zamora(1835 - 72)が処刑された事件。3 人の姓の最初の音節をつないでゴンブルサ Gom - Bur - Za 事件と呼ぶ。事件の直接の契機は、72 年 1 月、ルソン島カビテ州のサン・フェリペ要塞で起きた暴動事件であった。ここで働く労働者は、従来トリブート(貢税)と強制労働を免除されていたが、この特権が突然廃止されたので、それを不服として暴動を起こした。暴動は一日足らずで鎮圧されたが、スペイン政庁は、当時勢力を増しつつあった民族主義的運動、フィリピン人在俗神父の権利擁護運動を弾圧する口実としてこの事件を利用した。すなわち、カビテの暴動は在俗神父の運動を指導していた人々によって教唆扇動されたものであるとして、運動の中心的推進者であった上述の 3 神父を絞首刑に処するとともに、9 人の神父と 10 人の弁護士・実業家らをマリアナ諸島へ流刑した。この大弾圧によって、在俗神父の運動は現象的には潰滅したが、3 神父の処刑はスペインの人種差別と圧制を象徴する事件として、フィリピン各地に衝撃の波紋を呼び起こし、民族意識覚醒の原点となった。池端雪浦

ブルゴス 1837 - 72 Josレ A.Burgos

フィリピンのカトリック教会神父。ルソン島南イロコス州ピガンの生れ。スペイン軍人を父にもつ混血児。1859 年にサント・トマス大学神学部を卒業。65 年にマニラ大聖堂教区の司祭に任ぜられ、聖職者として輝かしい前途が期待された。フィリピンではスペイン体制初期の特殊事情から、修道士が教区司祭を務める変則的な教会制度が生まれた。これを正すために、18 世紀後半から教区司祭の在俗神父化が進められたが、在俗神父はほとんど原住民だったので、原住民神父の勢力増大を恐れたスペイン当局は、1826 年から再び元の変則的制度に戻す政策をとった。このためフィリピン人在俗神父は、49 年頃から、彼らの司祭職叙任の権利を守る運動を開始し、ブルゴスもこの運動に献身した。運動が反植民地闘争に発展することを恐れた当局は、72 年にカビテ暴動を口実に、ブルゴスら指導者を処刑あるいは流刑して大弾圧を行った。池端雪浦

サント・トマス大学 サントトマスだいがく University of Santo Tomas

1611 年にドミニコ会がフィリピンのマニラに創立したアジアで最古の大学の一つ。初めロサリオの聖母カレッジと呼ばれたが、のちにサント・トマス・カレッジと改名され、ついで 45 年に教皇インノケンティウス 10 世によって大学(ユニバーシティ)に格上げされた。フィリピンではこれより早く、1589 年にイエズス会が創立したサン・イグナシオ・カレッジがあり、1621 年に大学に格上げされたが、1768 年にイエズス会がフィリピンから追放された際、閉鎖された。19 世紀中ごろまではスペイン人植民者の子弟のみを受け入れたが、やがて現地人にも門戸を開くようになった。その中から J. リサル・デル・ピラルなどの民族主義者が誕生したのは歴史の皮肉である。教会法、民事法、医学、文学、哲学などの学部を擁する。池端雪浦

デル・ピラル 1850 - 96 Marcelo Hilario del Pilar

フィリピン革命に先立つ改革運動の中心的指導者。マニラ北隣のブラカン州ブラカン町出身。1880 年に当時の最高学府サント・トマ

ス大学を卒業すると、マニラおよびブラカン州一帯の知識人、プリンシパリーアをひそかに組織して植民地改革運動を開始した。ちょうどこの頃、植民本国スペインでもフィリピン人留学生らが植民地改革を要求する言論活動を開始したので、これ以後 1895 年ころまでをフィリピン史ではプロバガンダ運動(啓蒙宣伝活動)の時代と呼んでいる。88 年にデル・ピラールは国外追放処分を受けそうになり、スペインへ脱出、この地ですでに開始されていたフィリピン改革運動を再組織した。ここで彼が最も力を注いだ仕事は、機関紙《ソリダリダッド》の発行である。しかし同紙を中心とする彼の活動はリサールらと見解の相違をみ、またスペイン政府からはなんら具体的改革を引き出せなかったため、95 年にはフィリピンでの支持を失ってついえた。同時に彼の肉体も 7 年余の異郷での活動に力尽き、帰国を目前にバルセロナで客死した。池端雪浦

ソリダリダッド Solidaridad

スペインでフィリピン人によって発行されたフィリピン改革運動の機関紙。1880 年代初頭からスペイン支配下のフィリピンでは、プロバガンダ運動と呼ばれる改革運動が開始された。この運動はマニラや近隣諸州ばかりでなく、スペインでもフィリピン人留学生や政治的亡命者を中心に展開された。《ソリダリダッド》は後者の機関紙として 89 年 2 月 15 日に創刊され、以後半月 1 回の発行で 95 年 11 月 15 日まで続いた。編集長は当初ロペス・ハエナ Graciano Lopez - Jaena であったが、1889 年 11 月に発行地がバルセロナからマドリードへ移ったのを機にデル・ピラールに交代、以後最終号まで彼が編集の責めを負った。同紙は自由主義の立場からフィリピン支配の不正、非効率、言論および人権抑圧、修道会の専横などを批判して、スペイン政府にその改革を要求した。しかし現実的效果はほとんどなく、また運動は 90 年末からリサール派とデル・ピラール派に分裂し、それが原因で同紙も資金難、執筆者難に陥り、93 年以後の紙面はまったく精彩を欠いた。池端雪浦

カティブーナン Katipunan

フィリピン革命の母体となった秘密結社の通称。正式名称は 人民の息子らの最も気高く、最も尊敬すべき結社 である。フィリピンでは 19 世紀中ごろからスペインの植民地支配に対する改革運動が起こり、1880 年代にはリサールやデル・ピラールに指導されたプロバガンダ運動 が展開された。しかし、それらの穏健な改革運動ではスペインの圧政を正すことができなかったため、92 年 7 月 7 日、武力革命をめざすカティブーナンがマニラの下町トンドで結成された。創設メンバーはボニファシオを中心とする都市急進主義者で、彼らははじめ、マニラの労働者街や貧民街を中心に組織拡大をはかったが、95 年初頭ころからマニラ周辺諸州の農村部へも進出を開始した。96 年 3 月に機関紙《カラヤアン Kalayaan》1 号が発行されて以後、組織拡大は急速に進展した。しかし、それと同時に組織発覚の危険性も増大し、96 年 8 月、それは現実となった。かくしてカティブーナンは、8 月 30 日に準備不十分のまま、革命に突入せざるをえなかった。ひとたび革命が開始されると、カティブーナンは革命全体の指導権を掌握することができなかった。革命軍は通常プエブロ(町)ごとに組織され、個々に自律性が高かったからである。しかし、カティブーナンは、アメリカの介入などで複雑な経過をたどった革命の全過程を通じて、人々を革命へ結集するシンボリック機能を果たした。池端雪浦

ボニファシオ 1863 - 97 Andres Bonifacio

フィリピン革命の最大の指導者。マニラの下町トンドの貧しい家庭に長子として生まれ、14 歳で両親に死別したので、少年時より生計の苦勞を味わった。しかし明敏だったので、やがてイギリス商会ついでドイツ商会の職員になり、仕事のかたわら独学でスペイン語をマスターして、当時マニラに流入したヨーロッパ文学や自由主義思想、フランス革命に関する文献などに接する機会を得た。1880 年代に入ってスペイン支配の改革を求めるプロバガンダ運動が始まると、率先してこれに参加したが、知識人中心の言論活動の不毛さに失望して、92 年 7 月同志とともに武装革命をめざす秘密結社カティブーナンを結成、95 年にその第 3 代総裁となり、96 年 8 月フィリピン革命を開始した。しかし闘争の過程でアギナルドの率いるカピテ州のプリンシパリーア階層との間に指導権争いを生じ、これに敗れて、97 年 5 月 10 日アギナルド革命政府の手で処刑された。池端雪浦

アギナルド 1869 - 1964 Emilio Aguinaldo

フィリピン革命の指導者。ルソン島カピテ州の出身で、生家は長年町長をつとめた名家であった。彼も 1895 年に町長に選ばれたが、同時に秘密結社カティブーナンに入会して、スペイン支配の打倒をめざした。96 年 8 月、フィリピン革命が勃発すると、カピテ州の革命軍を率いてめざましい活躍を示し、カティブーナン総裁ボニファシオとの間に指導権争いを生じた。97 年 5 月、ボニファシオを肅清して革命の指導権を握ったが、彼の指導は日和見的で、97 年 12 月にはスペインと和を講じて闘争を放棄し、ホンコンへ亡命した。しかし、翌 98 年 4 月アメリカがスペインに宣戦布告を行うと(米西戦争)、帰国して革命戦線に復帰し、再び指導権を握った。同年 9 月、有産知識階級の後押しで、ブラカン州マロロス町に革命議会を開き、翌年 1 月にはマロロス憲法を公布して、フィリピン共和国を樹立、彼はその初代大統領に選ばれた。しかし、アメリカの真意がフィリピン占領にあることが明らかになるに及んで、99 年 2 月にフィリピン・アメリカ戦争を開始したが、アメリカの圧倒的な軍勢力の前に敗北を重ね、1901 年 3 月アメリカ軍に降服した。その後はカピテ州の郷里に隠遁して、政治の表で活躍することを好まなかったが、35 年の第 1 回コモンウェルス政府大統領選挙にかつぎ出され、ケソンに敗れた。池端 雪浦

ボンセ 1863 - 1918 Mariano Ponce

フィリピンの改革運動家、革命運動家。ルソン島中部のブラカン州バリワグ町の富裕な家庭に生まれ、1887 年にスペインのマドリード中央大学に留学して医学を修めた。スペインで展開中のフィリピン改革運動に参加し、同郷のデル・ピラールの右腕として機関紙《ソリダリダッド》の発行を創刊から終刊まで支え、自らもこれに多くの執筆を行った。96 年 7 月盟友デル・ピラールを失い、ホンコンに移った。ちょうどこのときフィリピン革命が勃発したので支援の運動に参加した。98 年 6 月には革命政府大統領アギナルドの要請で武器、弾薬を購入するために訪日し、日本亡命中の孫文や犬養毅らの協力で陸軍参謀本部から武器、弾薬の購入には成功したが、輸送に当たった布引丸が中国の寧波沖で沈没し(布引丸事件)、革命政府の手には届かなかった。アメリカ統治下に入って、フィリピン議会議員を 1 期(1910 - 12)務めた。池端雪浦

マロロス憲法 マロロスけんぽう

1899 年に制定されたフィリピンで最初の憲法。正式名称はフィリピン共和国憲法。フィリピンでは 1896 年 8 月からスペインの植民地支配を打倒する独立革命が開始され、アギナルドを大統領とする革命政府は、98 年 9 月ルソン島中部のブラカン州マロロス町

で革命議会(通称マロロス議会)を開催した。同議会は大地主、大商人、弁護士などの大資産家階級に牛耳られ、彼らは革命の指導権を自らの統制下に置くために、議会の権限を絶対化した憲法制定を急いだ。これには大統領顧問マビニの強力な反対があったが大勢に押し切れられ、99年1月21日、この憲法が発布された。同憲法に基づいて、同1月23日には第1次フィリピン共和国、通称マロロス共和国が発足した。同憲法は前文と14条101項および1追加項目からなり、三権分立、代議制、基本的人権の保障、国家と宗教の分離などを定めた近代的ブルジョア憲法である。しかし、先述の制定目的から、三権分立とはいえ、立法府の権限が圧倒的に大きい点に特徴がある。 池端雪浦

フィリピン・アメリカ戦争

1899 - 1902 年にフィリピンとアメリカの間で戦われた戦争。1896 年 8 月以来フィリピンではスペインの植民地支配を打倒する独立革命が進行していた。おりしもキューバでも 95 年 2 月からスペインに対する独立革命が始まっていた。キューバに莫大な経済権益をもつアメリカは、キューバ独立を大義名分に 98 年 4 月 25 日スペインに宣戦布告し(米西戦争)、フィリピン情勢にも介入した。アメリカは当初フィリピン独立運動支援を唱えたが、同年 5 月 1 日マニラ湾を占領したアメリカ軍は、革命軍との連帯を拒否して 8 月 13 日に単独でマニラを開城、9 月下旬よりスペインと講和条約交渉に入り、12 月 10 日両国間でパリ条約に調印した。この結果アメリカはスペインからフィリピンの領有権を獲得した。しかしこの間に革命軍は自力でルソン島からビサヤ諸島にいたるスペイン支配地を解放し、98 年 9 月には革命議会を設立、99 年 1 月にはマロロス憲法を発布して、第 1 次フィリピン共和国(マロロス共和国)を樹立していたので、こうしたアメリカの背信的侵略を許すことができなかった。

99 年 2 月フィリピン革命政府とアメリカとの間に戦闘が開始された。近代的装備に勝るアメリカ軍は破竹の勢いで革命軍の防衛線を突破し、全島に侵略の歩を進めた。99 年 3 月末首都マロロスが陥落し、11 月には革命政府大統領アギナルドが北部ルソン山岳地帯に追い込まれて、全軍の指揮能力を失った。だがアメリカにとっての苦戦はむしろこの時から始まった。各地で農民たちがそれぞれの指導者を中心に、まことに執拗なゲリラ戦を展開するにいたったからである。しかし有産階級の功利的妥協や、アギナルドの逮捕、降服などによって、アメリカの占領体制は日をおって進んだ。99 年 3 月には早くも J. G. シャーマンを委員長とする第 1 次フィリピン委員会が到着、占領行政の実施と関連の諸調査を開始した。1901 年 7 月には軍政から民政への移行が発表され、W. H. タフトが初代民政長官に就任した。そして 02 年 7 月 4 日、アメリカはフィリピン平定作戦終了を宣言、02 年 7 月 1 日にアメリカ議会を通過した フィリピン組織法 に基づいて、全面的なフィリピン植民地統治を開始した。しかし南タガログ地方、東ビサヤ地方、南部フィリピンのイスラム地域では 13 年ごろまで、アメリカの植民地支配に抵抗する戦いが続いた。池端雪浦

カーペンター=キラム協定 カーペンターキラムきょうてい

1915 年 3 月 22 日にスールー王国の第 27 代スルタン、ハマルル・キラム 2 世 Jamal - ul Kiram II とアメリカのフィリピン群島政府ミンダナオ・スールー管区長カーペンター Frank W. Carpenter との間で結ばれた覚書協定。キラム 2 世はこの協定でいっさいの世俗の権力を放棄し、宗教的権威のみを保持することになった。その結果、15 世紀中ごろから 5 世紀近く続いたスールーのスルタン制度、すなわちスールー王国は解体した。アメリカはフィリピン・アメリカ戦争の期間には、フィリピン南部のスルタンたちと一種の不介入協定を結んで平和的關係を維持したが、ルソン島、ビサヤ諸島の平定が一段落すると、不介入協定を一方的に破棄して、この地域に徹底した武力弾圧を開始した。アメリカの侵略に最も激しく抵抗したのがスールーであった。カーペンター=キラム協定はフィリピン・イスラム社会における反植民地闘争の終息と、伝統的社会秩序解体の起点を象徴するものである。 池端 雪浦

ジョーンズ法 ジョーンズほう

1916 年 8 月 29 日にアメリカ議会を通過したフィリピン自治法。一般には提案者ジョーンズ William A. Jones 議員の名前をとってジョーンズ法で知られている。この前文のなかでアメリカは初めて公式に将来のフィリピン独立を約束した。最も重要な点は、立法権がフィリピン人に与えられたことであり、この結果、フィリピン人から成る上院・下院が設置された。だが、行政権はいぜんとしてアメリカ人総督が保持し、総督はフィリピン議会を通過した法律に対し拒否権を保持した。またフィリピン議会による立法の権限も、外交、鉱山、鑄貨、外国貿易、移民については除外されており、司法権も基本的にアメリカの支配下にあった。このように多くの制限付きではあったが、当時のフィリピンでは、アメリカ主権の下での一定の自治権の拡大として評価された。 滝川 勉

ラウレル 1891 - 1959 Jose Paciano Laurel

日本占領下のフィリピン共和国大統領。法学者。ライシウム大学創設者。ルソン島南部のパタンガス州タナウアン町出身。国立フィリピン大学で法学を修めた後、イエール大学の国費留学生として留学、法学博士の学位を得た。帰国後内務次官を経て 32 歳の若さで内務大臣となったが、総督 L. ウッドの独裁的統治に抗議して辞職、いちやく民族主義者の名声をあげた。1925 年に上院議員として政界入り。35 年以降日本占領時まで最高裁判所陪席判事。38 年に東京大学から法学博士の名誉学位を受けた。日本占領下でフィリピン行政委員会の司法委員、内務委員を務め、43 年 10 月フィリピン共和国大統領に任命された。戦後の 48 年 1 月に大統領特赦で対日協力の罪を免ぜられ、51 年上院議員に最高点当選を果たした。池端 雪浦

フクバラハップ Hukbalahap

フィリピン共産党(1938 年社会党と合併)が太平洋戦争の勃発と日本軍の侵攻を契機に、1942 年 3 月 29 日、ルソン島中部のヌエバ・エシハ州カピヤオにおいて結成した抗日人民軍武装ゲリラ組織のこと。フクバラハップとは抗日人民軍のタガログ語名を略称したものである。最高司令官にはタルクが就任した。ゲリラ兵士の主力となったのは、社会党の指導下にあった全国農民組合(KPMP)の小作農や貧農、社会党の大衆組織である労働者総同盟(AMT)傘下の労働者であり、こうして日本軍の侵攻直後、中部ルソンの貧農、小作農、労働者の一大結集が実現した。戦争末期、武装ゲリラは 2 万に達した。フクバラハップと日本軍・傀儡政府軍との交戦回数は 1200 回にのぼり、死傷者 2 万 5000 の損害を与え、日本軍による農村支配をきわめて困難ならしめた。戦後、フクバラハップは人民解放軍(HMB)と名称を改め、同じくフィリピン共産党の軍事組織として国内解放のための武力闘争に転じた。50 年ごろには体制危機をもたらしたが、しだいに勢力を失い、54 年タルクは投降した。滝川 勉 Hukbong Bayan Laban sa Hapon !!!

タルク 1913 - 2005 Luis Taruc

フィリピンの革命家。マニラ北西方のパンパンガ州サン・ルイス町の貧農の子として生まれ、青年期にペドロ・アバド・サントスの社

会党に入党。同党書記として 1930 年代後半、パンパンガ州を中心に農民運動、労働争議を精力的に指導した。太平洋戦争期は、42 年 3 月にフィリピン共産党の軍事組織として結成された抗日人民軍(フクバラハップ)司令官としてゲリラ戦に従事し、一躍有名となった。戦後、50 年に人民解放軍の司令官として中部ルソンを中心に武力解放闘争に従事したが、54 年 5 月、政府軍に投降し、党中央の非難を受けた。68 年 9 月、マルコス大統領の特赦を受けて出獄し、同大統領の政権下において国民議会議員、また農工業勤労者連合およびフクバラハップ退役軍人協会の会長を務めた。半生の自伝《人民の子》(1953)がある。滝川 勉

アダット adat

慣習 慣行 または 伝統的秩序 慣習法 を意味するアラビア語のアーダを起源とするマレー語で、タイ南部、マレーシア、インドネシア、フィリピン南部に広く使われる。その内容は地域的にひじょうに異なるが、広義には 現在に生きる過去の範例、規範 と言える。文書化されている場合もあるが、多くは口承である。アダットは親族集団、地縁社会における共同主義を支えてきた制度として不変の伝統として受け取られやすいが、実際には意識的、無意識的に変化していく柔軟性とあいまいさを有している。慣習法としてどこにでも存在するアダットが社会制度として問題となるのは、一つにはイスラムに対比してであり、二つには植民地政府や近代独立国家が施行する近代法制度との関連においてである。イスラムはアフリカ、インドを含めて宗教法(シャリーア)を補完するものとしてその土地特有の慣習の適用を認めているが、東南アジアのアダットは、単に宗教法に規定のない分野に残余的に生きのびたものではなく、日常生活のエチケットから国のあり方までわたる世界観の体系でもあるがゆえに、典型的にはミナンカバウ族の例に見られるようなイスラムとの損傷(かつとう)を生じる。植民地政府は、一方では宗主国の西欧法を持ち込むと同時に、オランダの 土民自治体条令 制定に端的にうかがえるように、地域ごとに異なる慣習法としてのアダットを保護・温存し、分割統治の一助とした。複数の法律体系を併存させていくという植民地時代の遺産は、独立国家における統一的な法律制度の施行を困難にした。また、アダットを民族性の基盤として高揚すべきか、因習として排除すべきかという論議も、イスラムおよび近代化とかかわりながら政治問題として現れてくる。しかしイデオロギーとしてのアダット問題は、民族誌的な現実態の記述や法律体系の枠組の中でのアダットの法的位置という問題と区別されねばならない。前田成文

アシエンダ hacienda

かつてスペインが支配していた地域における伝統的な大農園をいう。

【ラテン・アメリカ】ラテン・アメリカにおける極端な所得格差や貧困の大きな原因は、ラティフンディオ latifundio(大土地所有)の存在にあるが、この大土地所有は一般に大規模な輸出向け商品生産を行うプランテーション型と伝統的なアシエンダ型に分けられる(ブラジルについては ファゼンダ 参照)。アシエンダの特徴は、(1)国内・地域市場向け商品生産と自給生産の並存、(2)資本・技術の欠如、(3)土地の低利用、生産の非効率、(4)間接経営部門(地主—小作関係)の存在、(5)原住民共同体への労働力依存、(6)地主の家父長的支配、があげられる。このようにアシエンダの存在は、近代的な農村の成立を妨げ、農業の停滞をもたらし、地主はその収益を奢侈的な消費に回すなど、ラテン・アメリカにおける近代化の大きな阻害要因となっている。アシエンダはメキシコ、中米の一部、アンデス諸国に一般的である。

アシエンダの出現は16世紀末～17世紀初頭にさかのぼる。16世紀中葉、それまでの原住民に対する貢納・賦役制度(エンコミエンダ)が原住民人口の激減によって機能しなくなり、スペイン人自身による農業生産が開始された。こうして土地が農地として重要性を増し、スペイン当局によって植民者に恩賞地として贈与され、さらに16世紀末、コンポシションと呼ばれる手続を経て土地所有権が確立した。アシエンダという用語は本来 財産 を意味するが、耕地の拡大、灌漑などの設備、労働力が付随して地価が上昇するとともに、不動産としての 土地 の意味に転用された。植民地時代に進行した大土地所有は、独立革命においても影響を受けず、むしろ自由主義改革によって共同体、教会などの法人による土地所有が禁止され、その所有地を吸収していった。さらに1880年代に始まるラテン・アメリカの資本主義形成期における世界市場への統合の深化は、商品農業のための耕地の拡大、労働力確保を目的とするアシエンダの隣接農地への侵食を加速化させ、土地の集中がこの時期に顕著となった。

アシエンダの経営は小作地と地主直営地に大別される。前者はさらに地代形態により雇役小作(小作農の名称——コロノ、インキリノ、ワシブンゲロ)、分益小作(ヤナコナ、アパルセロ、メディエロ)、賃小作(アレングタリオ)に区別され、直営地においては農業労働者(ガニャン、ペオン、アフエリノ、ボルンタリオ)が低賃金労働を行う。アシエンダの構成員は、19世紀中葉のメキシコの例でみると、地主の代理である支配人、司祭、管理人、正書記、経理士などのエリート層、人夫頭、書記、教師、番人などの中間職、ペオン、下働き人夫などの農場労働者である。19世紀末のメキシコでは農民からの大規模な土地収奪が進行し、広大な土地が外国資本や大土地所有者に払い下げられた。これがメキシコ革命の直接の原因である。メキシコではカルデナス政権下(1934 - 40)で実質的な土地分配が実施された。他の諸国における農地改革の実施年は次のとおりである。ボリビア(1953)、キューバ(1959、63)、ベネズエラ(1960)、ペルー(1969)、チリ(1971)、ニカラグア(1979)。嶋 豊治

【フィリピン】フィリピンにおいてアシエンダは、歴史的には18世紀後半に始まる商品生産の展開に伴ってみられるようになる。系譜的にはスペイン国王からの下賜を中心に、狂信者からの寄進、強奪で得た土地を併合したカトリック教団所領での農園開設と、スペイン人、スペイン・メスティソなど特権階級の王領地地下げによる未墾地での農園開発の二つがある。前者はマニラなど古い都市周辺部に分布し、通常インキリノと呼ばれる借地人が農民と小作契約を結んで商品作物の栽培を行った。後者は時期的にやや遅れて19世紀後半以降急増し、ネグロス島北・西部一帯、バナイ島内陸部、ルソン島中部平野内陸部など開発の遅れた地方でみられる。これらアシエンダは、高利貸的土地兼併による分散耕地所有とは対照的に、地続きの大団地からなり、かつては数千haに及ぶ広大なものも珍しくなかった。しかし均分相続制をはじめ、切売りなどでその後細分化が急速に進み、現在では100～300haくらいの規模が普通である。今日ではネグロス島の甘蔗(サトウキビ)アシエンダと中部ルソンの米作および甘蔗アシエンダにその典型を求めることができ、前者が賃労働に依拠した経営であるのに対し、後者は農地を細分して農民に貸し付ける小作経営である。なお、教団所領のアシエンダは、すでに大部分が解体した。梅原弘光

アボ[山] Mount Apo

フィリピン、ミンダナオ島南部、ダバオ市と北コタバト州の境界にまたがってそびえる火山。標高2954m、フィリピンの最高峰である。古くはすぐ北のタロモ山(2693m)を含む一つの大きな火山であったが、大爆発により山頂部を失い、その後の小爆発で別々の頂上ができたと考えられる。アボの名は土着語のアブイ(火の意)に由来するとも言われる。付近一帯は国立公園、東麓斜面にはマニラアサバナ農園がひらける。梅原弘光

アモルソロ 1892 - 1972 Fernando Amorsolo

フィリピンの画家。マニラ市パコの生れ。1914年にフィリピン大学芸術学部を卒業。19年に奨学金を得てスペインへ留学。マドリードのサン・フェルナンド王立学院で1年間勉強した。彼の画風にはスペインの巨匠ベラスケスとマネ、ルノアールなど印象派の影響が強い。多数の風俗画と肖像画を残しているが、代表作は農村生活を描いた風俗画である。アメリカ人植民者の熱帯の牧歌的農村生

活に対するエキゾティシズムと、アメリカ支配下で急速な変化を迫られたフィリピン人の古き良き時代への郷愁が、彼の作品傾向に大きな影響を与えている。 池端雪浦

イエズス会

カトリック教会内の司祭修道会の一つ。16世紀イグナティウス・デ・ロヨラによって創立された。耶蘇(やそ)会とも書かれ、同会士はジェスイット Jesuit と呼ばれる。

【創立と精神】イグナティウスはマンレサの神体験後、パリ大学で出会った6人の同志 P. ファーブル、ザビエル、D. ライネス、N. ボバディリャ、A.サルメロン、S. ロドリゲスとともに、1534年8月15日パリのモンマルトルにおいて 貞潔・清貧・エルサレム巡礼 の悲願をたてた。36年同日の誓願更新にあたって、さらに3人の友 C. ル・ジェ、J. コデュール、P. プロエが加わった。彼らは37年6月ころイグナティウスの著書《心霊修行(霊操)》の精神に従って自分たちを イエズスの友 と呼ぶことにし、教皇に従うことを決めた。ベネチアからローマへの途上のこと、ローマ近郊のラ・ストラダ小聖堂でイグナティウスは、生涯で最も決定的な神的直観 イエズスの小さいこの共同体がどこまでも十字架につけられたキリストの友となる という恵みを受けたといわれる。この神的直観はイエズス会の心の拠点となった。イグナティウスは38年、復活祭に同志一同をローマに招集し、修道会創立の計画について数週間討議した結果、教皇認可を願うことに決めた。39年9月3日彼らは《会掟草案》を教皇パウルス3世に提出し、口頭で創立の承認を受けたが、同教皇は40年9月27日、これを《イエズス会創立勅書》をもって正式に認可した。41年4月8日イグナティウスが初代総長に選ばれた。イエズス会は より大なる神の栄光のために 諸所をめぐり、神に対するすぐれた奉仕と人類救済のため、希望の存する世界のどこにも居住する ことを念願としている。これは 人間は主なる神を賛美し、敬い、神に仕え、それによって自己の救済を完成するために創造された とする精神に基づいている。

【盛衰と現状】イエズス会は修道会史上新転換を画し、一定の修道服や歌唱祈裳などの古い生活形式を廃止して全世界にとび立っていった。創立者イグナティウスの没年(1556)には会士1000、管区12、中興の祖第5代総長アクアビバ C. Aquaviva 時代(1581 - 1615)には会士1万3112、管区32に達し、その使徒的活動、学校教育、学問研究は世界各国において進展した。しかし18世紀末の反教会的嵐の中でポルトガル(1759)、フランス(1764)、スペインやナポリ(1767)、その他の国における同会の禁止と追放が断行された。このような政治的圧迫に直面して教皇クレメンス14世は1773年7月21日 教会の平和のために親しいものさえ犠牲にしなければならない と書き、イエズス会解散を命じた。しかし同会はロシアのエカチェリナ2世の下に合法的に生命を保った。ナポレオンの失脚後、教皇ピウス7世はフランス幽閉からローマへ帰還してまもなく、1814年8月7日勅書《全教会の憂慮》をもってイエズス会再興を宣言した。20年ロシアは一転して全国土から会士を追放した。多くの盛衰の運命を体験したが、イエズス会は創立当初の生命力を保持し、教会奉仕に献身した。1983年現在同会は第29代総長コルベンバハ P. H. Kolvenbach の指導の下に会士2万6622を有し、管区83に分かれている。日本では、教皇ピウス10世の命令によって、ザビエルの遺産を継ぐべく1908年10月18日再渡来し、上智大学(1911)、六甲学院(1937)、栄光学園(1947)、エリザベト音楽大学(1948)、広島学院(1956)の創立その他の使徒的事業に活動が続いている。日本管区は日本人会士と世界各国から集まった会士を合わせて337、国際的性格をもっている。鈴木宣明

【東アジア・インドにおける活動】ジェスイットと総称される教団会士は、軍隊制度に倣った厳しい規律と強固な結合を誇り、反宗教改革運動と東方伝道にとりくんだ。彼らの出身はポルトガル、スペインをはじめ、イタリア、フランス、オランダ、ベルギーなどであった。ポルトガルの進出に伴って、教団はゴアに本拠を置き、東南アジア、中国、日本を含む広大な インド管区 を布教地域とした。

1549年(天文18)、ゴアから東南アジアを経て鹿児島に上陸したザビエルによって日本での布教が始められた。その後、織田信長の保護もあり、フィグレイド M. de Figuereido、フロイス、バリニャーノらは京都、長崎を中心に教化を進め、17世紀初めには、全国の信徒は約20万人にのぼった。その中から、大村純忠、大友宗麟、有馬晴信らのキリシタン大名もあらわれ、また天正遣欧使節も派遣された。しかし、87年(天正15)、豊臣秀吉によるバテレン追放令、1612年(慶長17)、徳川幕府によるキリシタン禁教令によって教団は厳しい弾圧を受けた。教団は実践的な布教対策をとるべく、日本の風俗、文化、気候などの理解に努め、その関心のあり方、内容はフロイスの《日本史》、バリニャーノの《日本巡察記》などに詳しくみられる。また《日葡辞書》の編纂や活版印刷術の導入のように、イエズス会がもたらした文化的功績は大きい。 キリシタン

中国では、リッチが1583年に広東に布教活動の第一歩をしるした。教団は皇帝や中央、地方の士大夫など主として当時の指導層と接触し、彼らの改宗を心がけた。瞿太素、徐光啓、李之藻らの士大夫信徒は暦学・数学・地理学の科学知識を習得し、会士とともにその普及に力を尽くした。イエズス会は、中国の伝統的慣習を受容する布教方針をとり、それは他教団との意見対立をもたらした。やがて 典礼問題 を契機として、1706年(康熙45)以降、布教は禁止され、会士も追放された。その後、19世紀半ばまで禁圧された教団は、1842年(道光22)に再び活動を認められ、江蘇、河北、安廬を中心に拡大した。中国のイエズス会受容の要因には、西欧科学技術・知識の吸収があった。そのことは一面、弾圧下にあっても欽天監(国立天文台)の職員などに任じられた中国人信徒を通じて布教の維持を可能にしたが、他面では民衆の教化については弱く、清朝期には仇教運動(反キリスト教運動)の中で民衆の激しい排斥・批判の対象ともなった。

東南アジアでは、16世紀末にスペインの強い影響下にあった**フィリピン**で、イエズス会は諸教派とともにカトリック勢力の一派を形成した。タイでは、バルグアルネラ T. Valguarnera 神父を主とするフランス・イエズス会が要塞その他の建築の設計・技術を援助し、ナライ王の信を得た。そのため17世紀後半の20余年間に、バンコク、アユタヤ、ピサヌロークに教会、学校、病院を開設して、布教、医療活動に従事し、その他タイ文字のローマ字化を行った。

インドでは教団の本拠地であったゴア周辺で1560年ころから強力に布教が進められた。その結果、96年には13の会堂と3万余人の信者を得るに至った。もっとも、当時の布教活動は、日本、中国においてもみられたように、教団を派遣した国々の貿易上、軍事上、政治上の意図や利害を強く反映しており、ややもすると、現地の人々や伝統文化に対する無定見な批判や寺院の破壊・異端審問といった極端な形であられることもあった。また、信徒の資格については、ザビエルのように 使徒信条 を信ずる者ならば信者であるとする考えもあり、必ずしも厳格なものではなかった。1580年から95年の間、3度にわたって教団はムガル宮廷に使節を送り、アクアビバ R. Aquaviva やモンセラテ A. Monserrate らがアクバルとその宮廷貴族の教化を図った。その後、ジャハーンギールの保護を受けてラホールに教会を建設するなど、インド人の間に布教が続けたが、やがてムガル帝国とポルトガルとの関係悪化によって、イエズス会は禁止されることになった。南インドではビジャヤナガル王国の支配者たちや地方領主にも働きかけたが、同時にマラバル地方のヒンドゥー教徒やコロマンデル沿岸南部の部族集団の改宗にも力を入れた。布教を通じ、デュボア J. A. Dubois

やベスチ C. G. Beschi のような優れた会士によって、民衆の風俗・慣習・儀礼・伝承・カーストの記録や報告書、あるいはタミル語の辞典・文法書といった当時の南インド社会・文化に関する貴重な資料が残された。インドでは中国にみられたような典礼問題や激しい排教運動は生じなかったが、キリスト教徒もヒンドゥー社会秩序の中の一つのカーストとして位置づけられるという状況が形成された。重松 伸司

イグレシア・ニ・クリスト Iglesia Ni Cristo[タガログ]

1914年7月27日にフィリピンでフィリピン人マナロFelix Manalo により創立されたキリスト教会。英語の正式名称は Church of Christ。創立者マナロを 神の最後の使い と規定する独自の教義をもち、この教会の信徒となる以外に救いはあり得ないとする立場を堅持している。第2次世界大戦以前にはルソン島を中心とする小集団にすぎなかったが、戦後急激な教勢の拡大を達成し、50年末にはほぼフィリピン全土に進出した。63年には創立者の死去にともない、息子のエラニョ・マナロが監督の地位を継承し、独自の教義を保持しつつも多方面での社会奉仕活動を開始した。68年以後は海外のフィリピン人移民社会でも積極的な伝道を行っている。70年現在でフィリピン国民の1.3%にあたる47万5407名を信徒としており、フィリピンではカトリック教会、フィリピン独立教会に次ぐ教勢を有する。寺田勇文

糸満[市] いとまん

沖縄県、沖縄島(本島)南西端、那覇から南へ12kmにある市。1961年隣接の三和、兼城(かねぐすく)、高嶺の3村と合体、71年市制。人口5万3496(1995)。旧糸満町は漁業の町で、勇敢な糸満漁夫は、昔から日本本土をはじめフィリピン、マレー半島、ジャワ、スマトラ、セレベス、ボルネオ、ニューギニアなどの海域で アギヤー と呼ぶ独特の追込み漁法で活躍したが、今ではそのかげは薄れた。現在第3種漁港に指定されており、南方漁業の中継基地をめざしている。農業はサトウキビ、野菜、花卉が栽培され、畜産では豚、肉用牛が飼育される。公有水面の広大な埋立てが進み、工業団地とともに、新しい市街地が形成されてきた。名所旧跡に富み、なかでも幸地腹門中墓は沖縄県最大の破風墓といわれ、規模の大きさや構造のみごとくことで知られる。また、氏神をまつてある聖地の白銀堂は参拝者が多い。南端の喜屋武(きやん)岬の断崖上にある具志川城跡は史跡に指定されている。海神祭のハーリーと大綱引は有名。第2次世界大戦最後の激戦地で、黎明の塔、ひめゆりの塔、健児の塔など各種の慰霊塔が立ち、沖縄戦跡国定公園となっている。田里友哲

イネ 稲

コムギ、トウモロコシとならんで世界の三大穀物の一つに数えられるイネ科の一年草で、その穀粒である米は、世界人口の半数におよぶ人間の主食をまかなっている。日本では古来、農業の中心に位置づけられてきた重要な作物である。

【起源と伝播】

世界の熱帯から暖温帯にかけての湿地には、二十数種におよぶ野生稲(イネ属植物)が自生している。イネ属の分類に関しては古くから諸説が提出されているが、染色体数やゲノム分析により、Oryzae 節、Ridleyanae 節、Granulatae 節および Schlechterianae 節の4節に分ける見方が有力である。このうち、Oryzae 節に属する野生稲の1種オリザ・ペレニス *O. perennis* から栽培種が分化したとみなされている。ただし西アフリカの一部の地域では、Oryzae 節に属する別の野生稲オリザ・ブレビリギュラータ *O. breviligulata* から起源したとされるアフリカイネ *O. glaberrima* が栽培されており、これと区別する場合には、通常の栽培稲 *O. sativa* をアジアイネと呼ぶ。

アジアイネの栽培の起源地については、インドの東海岸、インド北部、あるいはアッサムから中国の雲南にかけての地域などとする説があり、確定していないが、アッサムから中国の雲南にかけての地域とする説が現在有力になりつつある。イネの語源については二、三の系譜が指摘されている。その一つは、インド最古の古典とされるベダに現れるサンスクリットのブリーヒ *vr̥hi* で、アラビア語のウルズ、ラテン語のオリザをはじめとして、ヨーロッパ語のイネを意味する言葉は、すべてこれと同一系譜のものとされている。日本語のウルチもまたこれと語源を等しくするのではないかとされ、九州、四国で用いられていたウルシネのシネが転訛してイネとなったとする見方もある。一方、イネは飯根(いいね)に由来するともいわれる。もう一つの系譜は、中国で古くから用いられていた冗(トウ)、稲(タオ)に始まるもので、日本語の稲(とう)、朝鮮語のトやタイ語のカオが同系統とされる。またマレー半島やジャワではパディが一般的である。いずれにしても、その栽培の始まりは前4000年以前にさかのぼるとされ、有史前には東南アジア諸地域に広く伝播したものと考えられる。西方への伝播についてみると、前4世紀にはメソポタミアに達し、6~7世紀には地中海沿岸地域およびアフリカ東海岸に分布が拡大している。また南北両アメリカには17世紀末から18世紀に伝わり、19世紀末にはオーストラリアに達し、現在その栽培は六大洲のすべてにおよんでいる。

日本へは中国より伝播したことには異論はないが、その経路については中国南部より琉球諸島を経由して南九州に伝来したという説、長江(揚子江)河口域より対馬海流に乗って南朝鮮を経由するかあるいは直接に北九州に伝わったという説、および中国大陆から陸地伝いに朝鮮半島を経て北九州に伝来したとする説など諸説がある。近年は農学、考古学、民俗学などの検討を通じ、対馬海流説が最も有力視されている。いずれにしても、北九州における稲作の始まりは縄文時代晩期にまでさかのぼるもので、時代の経過とともに稲作は東進し、1世紀初めには近畿地方に、さらに3~4世紀の間に関東地方にまで達したものとみられる。その後稲作は北上し、平安時代(9世紀ころ)には奥羽地方に拡大し、鎌倉時代(13世紀ころ)には本州最北部にまでおよんだとされているが、近年の考古学的な調査結果からは、その時代が弥生時代にまでさかのぼるのではないかとこの見方も提出されてきている。北海道南部には江戸時代(18世紀)に導入されているが、北海道に本格的な稲作が始まるのは明治時代に入ってからのことである。

【日本型とインド型】日本型とインド型アジアイネは通常日本型とインド型に大別される。場合によっては、両者の中間的な形質を示す中間型(ジャワ型ともいわれる)が区別されることがある。日本型のイネは草型が小さく、低温に対する抵抗性が強い。穀粒は小型で丸みを帯び、炊いた場合に粘り気が強い。これに対してインド型のイネは草型が大きく、浮稲のように5mに達するものもあり低温には弱い。穀粒は細長く、食味はぱさぱさした印象を与える。世界の栽培地域をみると、日本型のイネは日本および中国中北部を中心として、北アメリカのカリフォルニア州などで栽培されている。一方インド型のイネは南アジアの熱帯・亜熱帯地域を中心として、中国南部、南アメリカおよびヨーロッパと北アメリカの南部で栽培されている。インドネシアなど南アジアの島嶼(とうしょ)部で栽培されるイネは中間型のものが多い。

【水稻と陸稲およびうるち種ともち種】日本型とインド型の別を問わず、イネは耕地の水条件に適応して分化したとみられる水稻

と陸稲(おかぼ)に区別される。水稲は通常湛水(たんすい)した水田に栽培されるが、耐乾性の強い陸稲は畑に栽培される。世界的にみれば水稲の作付比率が圧倒的に高いが、東南アジアの山岳地帯などを中心として、水利のととのわない地域において、陸稲は重要な畑作物の一つとなっている。イネはまた米質の相違にもとづいて、うるち(粳)種ともち(糯)種とに区別されている。両者の相違は米のデンプンを構成するアミロースとアミロペクチンの量的割合の違いによるもので、うるち種ではアミロース含量が高いのに対し、もち種ではほとんどがアミロペクチンからなっている。成熟した米粒はうるち種では半透明になるが、もち種では乳白色に濁る場合が多い。

【イネの栽培】

イネの栽培方式は移植栽培と直播(ちよくはん)栽培とに大別される。移植栽培は別途に育苗した苗を、耕起し代掻き・整地した本田に田植する方式であり、直播栽培は耕起・整地した水田または畑に直接播種(はしゅ)して育てる方式である。日本で最も普通に行われている水稲の移植栽培を中心として、以下栽培法の概略を示す。栽培の時期すなわち作期は、春先に播種し、5～6月に田植を行い、秋に収穫することを基本とするが、地域によっては、作期をずらせた早期栽培、早植栽培、晩期栽培など各種の方式がある。西南暖地では、年2回の稲作を行う二期作もかつては行われていた。用いられる品種は、地域の自然条件や作期との関連で選定されるが、いずれの場合も播種に先立って、塩水選などによる優良種子の選別や種子消毒の行われることが多く、また発芽の斉一性をはかるため、温湯に浸漬(しんじ)して芽出しを行うことも少なくない。各種の苗代あるいは育苗施設で入念に育成された苗は、機械または手によって本田に移植される。本田の施肥は、耕起時に元肥として施すことのほかに、イネの生育に対応して、分けつ期、幼穂形成期および登熟期にわたって、何回もの追肥が行われる。生育期間中の水田の水管理は重要な農作業の一つで、田植後の活着期および出穂期前後は深水とし、分けつ期は間断灌漑や中干しによって水田土壌の還元化を防止し、根の健全化をはかる。登熟期の後半からは徐々に落水し、乾いた水田で収穫作業が行われるようにするのが望ましい。収穫は人力または機械力によって行われ、稲架(はさ)で乾燥した後、脱穀・調製して収納する。

【世界の稲作】

世界の米の9割以上はアジアの熱帯から温帯にかけての諸国で生産される。主要な生産国として、インド、中国、インドネシア、バングラデシュ、タイ、日本、フィリピン、韓国、パキスタン、ベトナムをあげることができるが、近年は南北両アメリカ、オーストラリア、イタリアなどで生産が拡大しつつある。イネはコムギやトウモロコシとは異なり、主要生産国の多くが発展途上国であるために国内消費が多く、国際市場への出回り量は少ない。

熱帯起源とみられるイネの栽培地が、気候温暖な地域を中心とすることはいうまでもないが、近年は諸技術の発達により、中国東北部やヨーロッパ大陸においては北緯50° 近くまで、またオーストラリアでは南緯40° 近くまで、その栽培域を拡大している。また標高についてみると、ネパールや中国においては、2000m以上の高地で栽培の行われている場合がある。これら世界各地に拡大している稲作の主体をなすものは、水田における水稲栽培である。水田は程度の差はあっても、イネの生育期間中は湛水状態におかれるという点で、通常の畑とは異なる特殊環境を形づくっている。湛水下の水田土壌中では物質の分解がゆるやかで地力の損耗が少ないこと、灌漑水を通じて栄養分の天然供給が行われること、さらに畑ではつねに問題となる土壌浸食から免れることなどは水田の大きな利点とされている。また湛水下で栽培される水稲には、陸稲をも含めて多くの畑作物にみられる連作障害が起こらない。古来アジア諸地域で、ほとんど無肥料のまま連綿として水稲が栽培され、多くの人口を養ってきた理由は、このような水田の特殊性にもとづくものと考えられる。世界における稲作技術の現状はきわめて多様であり、欧米の先進国で行われている機械化による大規模栽培から、アジアの発展途上国で行われているような粗放で小規模な栽培まで各種のものがみられる。それぞれの技術水準に対応して、単位面積当りの収量は、オーストラリア、イタリア、スペイン、エジプトなど非アジア圏の諸国で高く、アジアでは日本および韓国が群を抜いている。山崎耕宇

イフガオ族 イフガオぞく Ifugao

フィリピン、ルソン島北部、コルディエラ山脈東部に位置するイフガオ州一帯に住むプロト・マレー系の少数民族。人口13万(1975)。標高1000～1500mの山腹に、泥壁あるいは石垣を築いて棚田を作り、水稲耕作を行うことで知られる。特にバナウ工周辺の景観は有名である。稲作は社会的・宗教的に重要な意味を持ち、農作業の各段階に応じたさまざまな儀礼が発達している。また棚田や水牛の所有数によって貧富の格差が見られ、米の生産余剰を持つ富裕層、棚田をほとんど持たない貧困層、およびその中間層という階層化が見られる。米を自給できない家族の場合、焼畑にサツマイモなどを植えて代用食としている。集落は棚田の近くなどに数戸から20戸前後ずつ散在し、その住居は4本の支柱に支えられた高床式で、内部に炉のある一間の家屋を基本とする。居住単位は夫婦と未婚の子どもたちから成る核家族が普通であるが、かつて子どもたちは一定年齢(10歳前後)に達すると、アガマンと呼ばれる男女それぞれの共同寝所で寝泊りした。売買、貸借、相続、水の権利、および紛争処理の手続などに関する厳格な慣習法を持つが、社会全体を統合する政治組織や首長は存在しなかった。父方、母方の第3イトコまでの親族によって構成されるいわゆるキンドレッドが、日々の生活、農耕儀礼、そしてかつて頻繁に行われた首狩りや紛争などに際して重要な機能を有した。彼らの宗教観念によれば、天空、地上、地下、川上、川下の五つに世界は分かれ、名前を持つものだけでも1000以上といわれる神々や諸精霊が、かなり整然としたヒエラルヒーをもって存在している。祖霊は、しかるべき慰撫を怠ると生者の魂を抜き取って病気を引き起こすと考えられており、そうした病気に際しては巫者によって治病儀礼が行われる。清水展

イモガイ(芋貝) イモガイ cone shell

サトイモの子いものような形をしたイモガイ科Conidae の巻貝の総称。日本産約120種。殻は通常高さ7～8cm、倒円錐形で厚く堅固、巻きは多いが通常低い。最後の巻きが大部分を占める。殻口は狭くて細長い。殻表は種類によって模様が異なるが、多くはその上にわら色の殻皮をかぶっていて、薄いときは模様が透けて見えるが、厚いときは子いもが皮をかぶっているようで模様は見えない。体は殻の中に深く引き込めるのでミナシガイの名もある。ふたは通常軟体に比べて小さく、ない種類もある。多くは熱帯地方の潮間帯や浅海の岩礁や砂泥底にすむが、アコメイモガイEndemoconus sieboldi のように水深200m以上の泥底にすむ種もある。軟体には口に1列に並ぶ矢のような形の歯がある。これは毒腺につながっていて、これでゴカイ類、貝類、魚類などの品を突き刺すとその毒で麻酔されて動けなくなる。口をのばして広げ、品を丸のみにする。神経性の毒であるが、魚類(多くは小型のハゼ類)を品とするアンボイナガイ Gastrodium geographus (イラスト) などとはくに猛毒で、刺されると数秒で動けなくなる。ときに採取時に人が刺されて死ぬことがある。沖縄でも1927、35年に刺されて死亡したという記録がある。人のイモガイ類による刺傷の報告は198

2年までに79例にも及んでいるが、死亡例(22人)はほとんどがアンボイナガイである。タガヤサンミナシガイ *Darioconus textile* もその例とされるがはっきりしない。ほかはハチに刺されたくらいの程度まで種々である。夏季に産卵するが、卵臥は白色で扁平な四角形状、これを多数並列させて岩に産みつける。イモガイ類はサンゴ礁に多くの種類がいつしよにすむが、種類によって食べる品のゴカイ類や貝類などの種類が異なっていて、食い分け現象が顕著であるが、イモガイが1種しかいないカリフォルニアの海域では、ゴカイ類や貝類など多くの種を選択せず食べている。イモガイ類は美しい模様の種類が多くて収集家に珍重されるが、とくにウミノサカイイモガイ *D.gloriamaris* は稀産として珍重され、3000ドルもしたことがあり、貝類標本中最高値とされたが、リュウグウオキナエビスガイ *Entemnotrochus rumphii* の1万ドルに抜かれた。現在はフィリピンなどで多く採集されるようになり昔日の値はしない。波部忠重

イリエワニ *estuarine crocodile* 湾 *Crocodylus porosus*

クロコダイル科のワニでもっとも危険な種類といわれる(イラスト)。インド洋のラカディープ諸島から東南アジア一帯、フィリピン、オーストラリア北部、フィジー諸島に及ぶ広域に分布する。全長は平均3.5~4.5m、最大が7.5mくらい。吻(ふん)部は比較的長く長さはその基部の幅の1.7~2.1倍ほどで、眼の前から吻端にかけて2条の隆起が走る。後頭鱗板を欠き頸鱗板は4枚。体背面や四肢には黒斑が点在する。潮線までの河口や入江の汽水域にすみ、海にも泳ぎ出る。後肢の水かきが発達して遊泳力に優れ、遠くの島にも泳ぎ渡る。品は家畜を含む哺乳類、魚類。性質が荒く水浴や漁をする人たちが襲われることもある。夜間、大きな獲物を襲うときは後肢で立ち、背後から抱きつくようにして水中に引きずりこむといわれる。雌は川岸に泥の巣をつくり25~50個ほどを産卵し、子ワニは3~5ヵ月で孵化(ふか)する。松井孝爾

イリガン *Iligan*

フィリピンのミンダナオ島北岸のイリガン湾に臨む工業都市。人口27万3000(1995)。第2次大戦前までは一港町にすぎなかったが、1950年代以降アグス川下流のマリア・クリスティーナ滝電源開発を基礎に重化学工業建設が進められ、“フィリピンのピッツバーグ”となるのが期待されている。現在、製鉄、鉄合金、肥料、カーバイドなどの工場が操業中。ブームの町だけに人口増加が激しく、1948年の2万6000から95年には10倍余に増加した。梅原弘光

イロイロ *Iloilo*

フィリピンのパナイ島南部、ハロ河口に位置する港市。人口33万5000(1995)。対岸のギマラス島に守られた天然の良港とその背後に開ける肥沃なイロイロ平野に恵まれて、古くからパナイ島、対岸のネグロス島など西ビサヤ地方の政治・経済・文化の中心地であった。1855年の外国貿易に対する開港以来、ネグロス島での糖業勃興、パナイ島での米の商品生産展開により1930年代まで大いに栄えた。第2次大戦後はやや停滞気味であるが、著名な政治家、詩人、作家が輩出、市内には中央官庁出先機関から有名大学、放送局、博物館などが立ち並び、行政・文化の中心地の地位を保っている。梅原弘光

イロカノ族 *イロカノぞく Ilokano*

フィリピンのいわゆる平地キリスト教民のグループで、ルソン島北部の西海岸のイロコス・ノルテ、イロコス・スール両州およびカガヤン河谷などに住み、イロカノ語を話す。人口約468万(1975)で、セブアーノ族、タガログ族に次いで第3位、総人口の11%を占める。その性向は他の諸族に比して勤勉で忍耐強く、生活は質素で倹約家であるといわれる。料理にはイワシなどの小魚を塩漬にしたバゴオンと呼ばれる調味料を頻繁に用い、野菜を煮ておかずとすることを好む。基本的な生業は稲作であるが、土地に対して人口が稠密なため、19世紀からカガヤン河谷への大規模な移住が行われ、近年では中部ルソン、ミンダナオ島、さらにはハワイやアメリカ本土に新天地を求めて移民となる者が多い。また商品作物としてのタバコ栽培が盛んで、フィリピンの紙巻タバコの80%以上(1970)を生産している。イロカノ族出身者のなかには、マルコス大統領をはじめ、政府や軍の要職に就いている者が多い。清水展

インディアス *Las Indias*

スペイン人が発見、征服、植民した地域の総称。おおむね現在の西インド諸島、南アメリカ、北アメリカの一部およびフィリピン諸島を指す。もともとインディアスとは現在のインド、中国、日本などを含めた東アジア地域の総称で、新大陸を指すものではなかった。中世ヨーロッパにおいては、世界はヨーロッパ、アフリカ、アジアの三大陸から成るというのが通説であり、中でも東アジアの地理については空想の域を出なかった。14・15世紀の地理学者の描く東アジアの地図は不正確で、インド半島などはほとんど省かれていた。したがってコロンブスが西方航路で目指したのは現在のインドではなくて空想的な東アジア、つまりインディアスであった。しかもコロンブスに大きな影響を与えたピエール・ダイイの《世界の姿 *Imago mundi*》には、インディアス一帯には怪物や一つ目の人間などが住むと説かれていた。こうした地理知識にもとづいてコロンブスは西方航海に乗り出し、1492年10月、グアナハニ島(現、ワトリング島)に到達し、そこに住む原住民を インディアスの人びと つまり インディオ と呼んだ。コロンブスは終生インディアスに到達したという誤った信念を捨てなかった。こうして、コロンブス以降数多くのスペイン人が西方航海を企て、次々と未知の島々や陸を発見、征服、植民することになるが、それらの地域はすべてインディアスと総称され、スペイン国王は19世紀初頭に至るまで インディアスの王 *rex Indiarum* の称号のもとに、臣下である インディオ をインディアス枢機会議を介して統治したのである。なお アメリカ という呼称は1507年にマルティン・ワルトゼーミュラーがアメリゴ・ベスプッチの報告記をもとに、インディアスを新大陸とみなしてそれに付した呼称である。新世界 染田秀藤

インディアス枢機会議 *インディアスすうきかいぎ Consejo Real y Supremo de las Indias*

インディアス(新大陸の植民地およびフィリピン)に関係するあらゆる事柄について国王を補佐するスペインの官僚組織。もともとフェルナンド2世の時代、1511年にカスティリヤ枢機会議内にインディアス会議が設けられており、この会議が24年8月、カルロス1世の勅令によって国王直属の独立した枢機会議に格上げされた。会議の議長および議員の任免は王室によって行われ、その構成員と定員は時代によりかなり変化がみられる。下級官吏として、弁護士、財務官、世界誌学者、数学者、史官などがある。枢機会議の機能については、42年の インディアス新法 (インディアス法)によって一応規定されたが、最終的には71年9月24日付フェリペ2世の勅令で定められた。立法・行政・司法の三権に相当する権力を行使し、植民地関係の業務で国王権力を代行した。したがって植民地当局はそれぞれの職務に関して常に枢機会議へ報告を行う義務を負った。枢機会議は植民地関係の法律を起草、発布したり、植民地で

発生した民事訴訟の上級裁判所の役目を負い、アウディエンシアと通商院の間でおきた諸問題、あるいはアウディエンシア同士の係争の最終審をも管轄した。また、植民地の官吏や高位聖職者(大司教、司教など)の任命に際し、国王の有する指名権も行使した。枢機会議は被任命者を監視する役目を負い、副王(副王制)に対するレシデンシア(執務査察制度)の報告を検討したり、植民地の実情を調査するためピシタドル(巡察吏)を派遣したりした。枢機会議は16～17世紀を通じてインディアス関係の専門家が属する国王の諮問機関として最も重要なものであったが、18世紀初頭、フェリペ5世が海軍・インディアス省を設置し、枢機会議の活動を司法関係に限定した。その後、枢機会議は1812年のカディス会議によって廃止が決定されたが、フェルナンド7世の復位後、再建され、34年まで存続した。 梁田秀藤

歌垣

男女が集会し相互に掛合歌をうたうことによって求愛し、あるいは恋愛遊戯をする習俗で、年中行事あるいは儀礼として行われることが多い。分布は古代日本のほかに、現代では中国南部からインドシナ半島北部の諸民族において濃密であり、フィリピンやインドネシアにも類似の掛合歌が行われている。中国貴州省南東部のミャオ族の場合では、歌垣はミャオ語で遊方といい漢語では揺馬郎という。村には遊方を催す場所が、村はずれの山の背に決められており、2月2日の敬橋節のような祭日や農閑期に行われる。毎晩8時から9時ごろから、夜中の1時から2時ごろまでつづく。女は15～16歳、男は16～17歳になると参加できる。60～70組の恋人が集まり、互いに向かい合って手をつなぎ、軽やかに裏声で恋歌を対唱し、愛情を伝え合い、他の組の邪魔はしない。ベトナム北部のバクニン省の農村では、旧暦3月5日から12日までの村の鎮守の祭りには、毎晩集会所での儀式が終わったあとで、若い人たちは村の門のそばの繁みの下で掛合歌をやった。対になって歌い、その内容は愛をテーマとしていた。それから恋人たちは隠れたところに行き交わったが、その際、少女の同意なしに連れて行くことはできなかった。こうして親密になった二人は、祭日後、結婚することができた。このような歌垣は、元来は集団的な成年式だったと考えられている。歌垣で婚約し、その後、多くの場合は収穫後に結婚式を挙げるとというのが古い形式であったろう。この歌垣を催す民族には焼畑耕作をやっているものと、水稻耕作を営むものとの両方が含まれているが、おそらく元来は山地の焼畑耕作文化の要素であったろう。中国南部では、歌垣の習俗とほぼ重なって、結婚しても夫妻は別居し、しばらく一方が他方のところに通い、子どもが生まれてから同居する不落家の習俗が分布し、日本の妻問い婚を思わせる。大林太良

ウナギ eel

ウナギ目ウナギ科 Anguillidae の硬骨魚の総称、またはそのうちの1種を指す。ウナギ類は海で生まれ淡水中で成長するが、その生活史はまだなぞに包まれている部分が多い。いずれもウナギ属 *Anguilla* の魚で世界中に16種いるが、そのうち3種はそれぞれ2亜種に分けられているので計19種類。日本にいるものはウナギとオオウナギの2種である。すべて温水性魚類で、熱帯ないし温帯に分布する。

体は円筒形で、胸びれはよく発達しているが、腹びれはなく、背びれ、尾びれ、しりびれは連続している。鰓蓋(さいがい)は発達せず、比較的小さな鰓孔(えらあな)を開く。体色は背面が黒く、腹面は白色で、ときにやや黄色みを帯びる。うろこは長楕円形で小さく、皮膚に埋没してモザイク状に並んでいる。うろこには輪紋があるが、年齢を推定するには内耳にある耳石の輪紋によるほうが正確である。胃は噴門胃、盲臥胃、幽門胃の3部分に分かれ、腸は直走して短い。血液中にイクチオトキシン *ichthyotoxin* と呼ばれる神経毒を含む。

夜行性で、淡水中に生活している成魚は日中は水中の物陰に潜み、夜間泳ぎ出して小魚、エビ、カニ、ミミズ、水生昆虫などを捕食する。遊泳は蛇行型。体の表面に多量の粘液(ムチン *mucine* などの糖タンパクを主とする複雑な物質よりなる)を分泌し、皮膚呼吸の能力も優れているので、雨が降った後など、水中から出て湿った地面をはってかなりの距離を移動することがある。川と連絡のない池などにウナギがすみついていることがあるのもこの性質による。

【生活史】ウナギの成熟年齢は一定していないが、早いものは生後5、6年、遅いものでも12年ほどで成熟する。いずれにせよ、川の中で十分に成長し、成熟し始めたウナギは9～11月ころ、産卵のため川を下って海に入る。このときには、体の背面および胸びれは濃黒色となり、腹面も黒みを帯びた銀色に輝いてくるので銀腹(ぎんばら)ウナギと呼ばれる。海に出た後、産卵場に達するまでの過程についてはわかっていない。産卵場も明らかでないが、大西洋のウナギの産卵場はデンマークの海洋生物学者シュミット Ernst Johannes Schmidt(1877 - 1933)によってつきとめられた。体が透明でヤナギの葉のような形をしたレプトセファラス(葉形幼生)がウナギの仔魚(しぎよ)であることは、当時すでに知られていた。シュミットは1904年から調査船で北大西洋の各水域を回って採集を重ねた末、より小さなレプトセファラスの採集される場所をたどって、ついに22年バミューダ島の南東方のサルガッソー海がウナギの産卵場であることをつきとめた。日本のウナギの産卵場はまだ明らかにされていないが、これまでのレプトセファラスの採集された位置や海洋条件などから判断して、沖縄の南方、台湾の東方の水域が産卵場としてもっとも有力視されている。

卵は浮遊性で、産卵時の卵径は約1mmであるが、日本のウナギでは産み出されると直ちに吸水して1.8mm程度になり、およそ35時間後に孵化(ふか)。レプトセファラスとして黒潮にのって日本近海まで流れ、陸岸に近づいたところで変態するものと考えられる。変態後の稚魚の形は成魚と同様であるが、まだ体は透明でシラスウナギと呼ばれる。シラスウナギは河口周辺に集まり、やがて群れをなして川をのぼり、体色はしだいに着色してクロコと呼ばれるようになる。以後は淡水中にすみつき成長することになる。

ウナギ *Anguilla japonica* (イラスト) は北海道石狩川と襟裳岬以南の日本の各地、朝鮮半島、南西諸島、台湾、中国、北ベトナムにわたって分布。日本では太平洋側、とくに利根川以南に多い。全長はふつう40～50cmであるが、ときに1mを超すものもある。脊椎骨数は112～119。シラスウナギの来遊は11、12月から4月にわたる。各地で養殖されている。漁法としては一本釣り、置鈎(おきばり)、縄釣り、ウナギかき、ウナギ筒、引網、やな、待網などのほか、地方によりさまざまな小規模漁具を用いる方法もある。蒲焼、白焼き、酢の物、卵とじなどとして賞味され、肝臓、消化管は肝吸いとされる。

オオウナギ *A. marmorata* (イラスト) はカニクイともいう。本州南部から中国、**フィリピン**、ニューギニア、インド洋、アフリカ南東部にわたり分布範囲はすこぶる広い。体表には黒褐色の斑紋がある。名前が示すようにはなはだ大きくなり、全長1m以上になるものが少なくない。脊椎骨数は100～110。日本のおもな生息地では天然記念物に指定され保護されている。

【民俗、伝承】アリストテレスがウナギの泥中自然発生を説き、また水中に落下した馬の毛がウナギに化したとか、祖霊や水生の小虫が化したと語る民族があるように、ウナギはその形態、発生の不可思議さから、古来、世界の各地で信仰の対象となってきた。台湾の高砂族の中にはウナギをまったく食せず、また漁猟中はウナギといっってはならないという禁忌があった。マオリ族やミクロネ

シアのカナカ族、**フィリピン**のイフガオ族、マダガスカル島のベッシリオ族などでは祖先崇拜やトーテム信仰に結びついてウナギは神聖視された。

また、その形態から生殖器崇拜と結びついて、京都市三島神社、埼玉県三郷市彦倉虚空蔵堂などでは夫婦和合、子授けの信仰があり、願掛けにはウナギが交尾している絵柄の絵馬を奉納する習俗がある。伝説では片目ウナギ、物言うウナギとして登場し、川ざらえの前日、池や川の主であるウナギが坊主に化けて、その非をさとして帰る話が各地で語られている。ウナギの転生譚(たん)として山芋が化してウナギになる話が《醒睡笑》《東遊記》などに見え、笑話化している。ウナギは水界の主として登場する一方、水神、竜王、金比羅、三島明神の使われしめとされ、伊豆の三島神社の社地内では神使として捕獲は固く禁じられた。なかでも、ウナギは虚空蔵菩薩の使われしめとされ、これを祭る所の人ウナギを食べない。岐阜県郡上郡美並村の粥川では妖怪退治にこの川のウナギが虚空蔵菩薩を加護、案内したとして住人はウナギを決して捕獲せず、明治初年までこの禁を犯すと村八分の制裁を受けた。旧仙台藩領に特徴的に分布するウナン神はウナギ神で、近世初期の新田開発と洪水の頻発から、ウナギは洪水を起こすものとして、これを慰撫(いぶ)、祭りこめたものと考えられる。ウナン神社の多くは湧水地や水流の近く、さらに落雷の跡に祭られるなど水神、作神的性格が強い。佐野 賢治

ウルダネータ 1498 - 1568 Andrés de Urdaneta

スペインの航海士。貴族の家庭に生まれ、初め軍隊に入った。マゼラン遠征隊成功ののちカルロス1世が1525年に東洋へ派遣したロアイサ遠征隊に参加して、モルッカ諸島に至り、この地に約10年間滞在。この間、ポルトガルと戦い、また、この地域の地理と航海の知識を蓄えて、36年に数少ない生残りの一人として帰国した。海の冒険生活に疲れた彼は、42年にメキシコに渡りアウグスティヌス会の聖職に就く。59年にフェリペ2世よりフィリピン征服のための遠征隊指揮官を懇請されたが固辞し、代わってレガスピを推した。しかし、国王のたつての要請で、64年にレガスピ遠征隊の主席航海士として遠征に参加、フィリピン到着を果たすと同時に、北太平洋海流によってメキシコへ戻る帰路の発見に成功し、スペインのフィリピン支配の端緒を開いた。池端雪浦

APEC エーベック

アジア太平洋経済協力 Asia Pacific Economic Cooperation の略称だが、日本語ではこの後に会議という語を付けることが多い。オーストラリアのホーク首相の提唱により1989年11月にキャンベラで開かれたアジア太平洋経済協力を協議する閣僚会議が契機。その後急速に制度化が進み、今日では貿易投資の自由化・円滑化、国際協力などをめざしつつ、域外にも開かれた地域主義の推進を標榜している。日本は最初から関与しており、95年には議長国として大阪で年次閣僚会議と非公式首脳会議を主催した。

APEC は当初、東南アジア諸国連合(ASEAN)の諸国(ブルネイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ)、日本、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、韓国が参加する年1回の閣僚会議で出発した。その後、1992年にはシンガポールに小規模な事務局が設置され、93年からは非公式ながら首脳(正確には経済指導者)会議も毎年開かれるようになった。最高意思決定機関である年次閣僚会議のほかに、次のような分野別の閣僚級会議が制度化されている。貿易、教育、環境、大蔵、中小企業、運輸、科学技術、人材開発、エネルギー、電気通信・情報産業(1998年現在)。参加メンバー(主権国家以外の国際経済主体も加盟可能)も、1991年には中国、台湾、香港の同時加盟が実現し、その後メキシコとパプア・ニューギニア(1993)、チリ(1994)、ベトナム、ペルー、ロシア(1998)と拡大してきた。その結果、経済発展では南北縦断、政治体制では東西横断の珍しい広域経済協力組織になった。

もともと日本(特に通産省)とオーストラリアとが熱心に実現をめざしていたが、消極的だったASEAN 諸国の賛同を得るために ASEAN 的な理念と運営方針を受け入れ、APEC はコンセンサスに基づく緩やかな協議体として誕生した。その後、アメリカが積極的なリーダーシップをとって、組織の効率化、貿易・投資の自由化を目的とすることなどを強く主張したため、APEC のあり方をめぐって内部で対立が表面化した。経済面を中心とするいっそうの協力が望ましいことは共通理解となっている。94年には、先進国は2010年までに、その他は2020年までに貿易の自由化を実現することに合意し、各国が協調しながら自主的に自由化を進める計画が具体化しつつある。山影進

エルナンデス 1903 - 70 Amado V.Hernandez

フィリピンの現代タガログ語文学の作家、詩人、労働運動の指導者。マニラの下町トンドの生れ。大学を中退、タガログ語新聞《マブハイ Mabuhay》の記者となり、28歳で編集長となった。日本軍政下では抗日ゲリラとして活躍。戦後はフィリピン最強の労働団体 CLO の委員長に選ばれたが、1951年1月、キリーノ政権のフクバラハップ弾圧政策で逮捕され、無期懲役囚として6年間投獄された。64年に無罪の最高裁判決を得て、再び反戦・反帝国主義運動に専心。67年には B. ラッセルの招きで ベトナム反戦国際裁判 に出席。パランカ賞をはじめ三十数個の文学賞を受賞。おもな詩集に《一片の空》、小説に《鰐の涙》《猛禽》などがある。池端雪浦

オスメーニャ 1878 - 1961 Sergio Osme 4 a

アメリカ植民地支配期のフィリピンの政治家。フィリピン中部のセブ島セブ市の出身で、中国系の血が濃い。1906年にセブ州知事に当選。07年のナショナリスト党創立推進メンバーの一人で、同年開設された一院制のフィリピン議会に議席を得、16年まで議長を務めた。16年に二院制議会になって以後は、22年まで下院議長の職にあった。この間彼は、連続して与党ナショナリスト党の総裁を務め、文字どおり政治の最高指導者であった。しかし、22年に M. ケソンに国政の指導権を奪われ、35年にコモンウェルスが成立して以後はケソンの下で副大統領を務めた。日本軍政期にはケソンとともにワシントンに亡命政府を樹立、44年にケソンが死ぬと大統領に昇格したが、フィリピン共和国独立以後は、政治の第一線から退いた。池端 雪浦

外国人労働者

日本で外国人労働者問題が本格化するのは、1985年9月のブラザ合意による 円高・ドル安 の容認がひとつのメルクマークとなろう。89年12月、出入国管理及び難民認定法(入管法)が改正され、90年6月施行された(出入国管理 の項参照)。すなわち、すべての外国人を就労可と就労不可に二分するとともに、 就労不可 とされる者を雇用した場合に備え、雇用主処罰規定(3年以下の懲役または200万円以下の罰金)を新設したのである。また、在留資格を18種から28種に拡充したが、それは主として専門的な職種についてであり、外国人の 非成熟労働 への就労は従来通り認めず、外国人労働者は受け入れない、とする建前と現実との乖離は避

けられなくなった。

入管法改正後の最大の変化は、在留資格の 日本人の配偶者等 を拡大解釈することにより、就労が自由化された日系人(日本人の二世・三世)の激増であり、とくにブラジル日系人が最も多い(ブラジル の[日本人移民]の項参照)。ブラジル人、ペルー人(ほとんどが日系人とみられる)の在留者数は、1990年の約6万7000人から95年に21万人以上に増加しており、95年末現在、就労を認められた外国人約112万のうち2割近くを占める。日系人の受入れはその 身分 関係のゆえとされるが、現実には外国人労働者の導入政策となっている。また、93年4月から始まった 技能実習 制度は、 研修 という在留資格の拡充(2年の期間のうち後半は就労して技能を磨くというもの)として設けられたが、他方では中小企業の人手不足対策の面もある。このほかに資格外就労(不法就労)の外国人が多数存在し、法務省の推計によれば、96年5月現在、28万4500人に及び、国別では韓国、フィリピン、タイ、中国などが多い。黒田満

解放の神学 かいほうのしんがく Teologia de la Liberacion

貧困や抑圧からの解放によって、全人的発展をめざす神学。解放の神学は、20世紀中葉のラテン・アメリカで誕生した。その背景となるのは、開発政策の破綻によって深刻化した貧困の拡大であり、キューバ革命(1959)が惹起した広汎な革命運動のインパクトであり、さらにはその反革命として起きた権威主義的軍事政権による暴力的政治と激しい人権抑圧の状況である。これまで体制維持の役割を果たしてきたカトリック教会は、このような状況に積極的に対応して、自ら変革の主体に変貌した。この教会の変化を支えたのが、現代化を志向する教皇庁の第2バチカン公会議(1962-65)の改革路線であった。

解放の神学がカトリック教会の公の神学として公認されたのは、ラテン・アメリカ司教協議会第2回総会(メデジン会議、1968)においてである。この会議では、貧困や抑圧などの不正義を 制度化された暴力 による 罪の状態 とし、教会が貧者の側に立って平和裡に改革を進めるべきことが確認された。内面的な罪のみならず、現世的・構造的な罪からの解放と、より人間的・福音的な社会への解放をめざしたのである。解放の神学は貧しい人々や疎外された人々の解放を通じて、階級・人種・性による差別から、さらには権威主義的構造からの神学の解放をもめざす。方法論的にもこの新しい神学は、従来のドグマ的・演繹的なアプローチよりも現実を起点とする帰納的方法を採用し、分析概念としてラテン・アメリカで発展した従属論を用いた。

解放の神学の理念は信徒主導のキリスト教基礎共同体(CEB)によって体现され、草の根的な広がりをもった。南米における軍政に抵抗して民主化を進める過程で、さらに中米革命の推進力として、解放の神学が果たした役割は大きい。代表的な解放の神学者には、先駆的・急進的な例としてコロンビアでゲリラ組織に加わり殉教したトレスCamilo Torres 神父、(解放の神学)の著書で知られるペルーのグティエレス Gustavo Gutierrez、ブラジルの軍政と対決したカマラ Herder C'maraがいる。同じくブラジルの神父で著書(教会——カリスマと権力)において教皇庁の権力構造を批判したボフ Leonardo Boff は、バチカンの査問を受けたのちに聖職を離脱する。中米では、ニカラグアのサンディニスタ政権で文化相をつとめたカルデナル Ernesto Cardenal、エルサルバドルでテロの凶弾に倒れたロメロ Oscar Romero 大司教や虐殺されたイエズス会士たちがいる。

貧しい民衆の視点から聖書を読み直し、キリスト教の原点に立ちかえった解放の神学は、ラテン・アメリカにおける初めての宗教改革であり、ヨーロッパ神学からの解放をめざす固有の神学でもある。この神学は第三世界に影響と共感を与え、例えばフィリピンの反マルコス独裁闘争、韓国の民衆神学による民主化運動、さらには南アフリカにおける反アパルトヘイト闘争にもその影響がみられる。乗 浩子

カガヤン[川] Cagayan

フィリピン、ルソン島北部、カラバリオ山脈に発してシエラ・マドレ、中央コルディレラ両山脈の間を北上し、バブヤン海峡に注ぐ川。全長約440kmでフィリピン最長。マガット、イラガン、チョコなどの支流がある。沖積平野面積は1万1000km²、おもにイサベラとカガヤンの両州に広がる。気候的には流域全体で乾季がやや不明瞭で、年降水量は1500～2000mmあり、土壌もきわめて肥沃で、農業開発が期待される。梅原 弘光

カサマ制度 カサマせいど

フィリピンの主として米作にふつうにみられた小作形態。分益ないし刈分小作形態の一種である。カサマ kasama とはフィリピン語で 仲間 相棒 を意味する。小作料はふつう粋で一定の率で地主に支払われるが、その率は経営費用の分担のあり方によって変化した。たとえば、地主が土地と種子を、小作人が役畜と労働を提供し、田植と収穫費用を両方で折半で分担した場合には、収穫物は地主・小作間で半々に分けられ、これが最も一般的な形態であった。もし小作人が種子代と田植・収穫費を全額負担すれば、収穫物の2/3を取得できたが、これはまれであった。フィリピンの水田の生産力水準はごく低いから、収穫物の折半はきわめて高率の地代を意味し、小作人の貧困化の大きな要因となった。政府は第2次大戦前から小作料統制に努めたが、現在では農地改革によって、稲作とトウモロコシ作については、刈分小作制度は法的に禁じられている。 滝川 勉

華僑 かきょう Hua qiao 華僑 Overseas Chinese

本籍をもったまま海外に居住している中国人のことをいう。華僑の 僑 とはもともと仮住居の意味で、中国内地においても本籍地を離れ、他郷に住むものを僑人といった。

【華僑発展の歴史】 中国では古くから国外に出て貿易することは禁止されていたので、海外居住は法律上認められていなかった。華僑ということばも19世紀末から使われ始めたようである。しかし、実際には商人の長期にわたる海外居住もある程度まで黙認されていたことは、すでに12世紀初めの宋代の文献にみえている。13世紀に宋が元に滅ぼされたときには多くの遺民が海外に逃れ、ベトナムが宋王朝回復の一中心となった。元では宋の残存勢力を壊滅させる目的で東南アジアに軍を出したが、とくに1292年(至元29)ジャワ遠征に失敗したとき、多数の兵士が現地に残って住みついた。これが史上明らかな華僑の大量発生起源といわれている。元の末には中国の海賊が東南アジアの海上に勢力を張り、スマトラのパレンバンがその根拠地で在留中国人も数千家に上って、さながら独立国の観を呈したという。1405年(永楽3)から明の成祖が数回にわたって苦和を南海遠征に派遣したのは、これらの海賊を鎮定して政府による貿易独占を図るのが目的であった。当時すでにスマトラのほかジャワ、フィリピン、シャム等には相当数の中国人のいたことが、そのときの従軍者の記録にみえる。

やがてポルトガルを先頭とするヨーロッパ勢力の東進が始まると、これに便乗して密貿易を行う中国の海賊が近海に横行しだした。ついに明では1567年(隆慶1)広東省浚州の海澄県を開港場に指定し、中国の商人は公然と海外渡航ができるようになったのであ

る。清は北京に入城後、南方を完全に平定するのに40年近くも要したので、その間に海外に逃避したものが多かった。これを取り締まる意味から清では貿易統制を厳重にし、違反者には厳罰をもって臨んだ。しかし、中国人の海外渡航はますます盛んで、人数の増加と勢力の拡大によって現地人との間に反目を生じ、明代フィリピンのマニラでは1603年(万暦31)と37年(崇禎10)の2度も華僑の大虐殺が行われ、清代には1740年(乾隆5)ジャワのバタヴィアで同じく華僑の大虐殺事件が起こった。これに対して明・清政府は植民地の政府に抗議するどころか、まったく無関心だったのである。ところで1786年イギリスがマレー半島のペナンを領有すると、勤勉な中国人は農園や鉱山の労働者として歓迎され、やがてシンガポールの開発が進むとその需要はますます増加した。これに応じて、中国南部の貧困な農民が人さらい同様の手段で拉致され、豚の子のように悲惨な条件で東南アジア各地に強制移民させられたのである。いわゆる猪仔(ちよし)貿易 PigSelling で、1850 - 70年がもっとも顕著な時期であった。彼らは自衛のため秘密結社を組織することが多かったが、これを基盤として大勢力を築いたものもある。早く18世紀シャムでトンブリー王朝を立てた芒昭(ピヤ・タークシン)、ボルネオのポンティアナで蘭芳公司(ランファン・コンス)と称する一種の共和国を立てた羅芳伯、19世紀マラヤのクアラ・ルンブルで独立政権を起こした葉亜来のごときがそうである。

19世紀には東南アジアだけではなく、西インド、アメリカ、オーストラリア、カナダ等へも中国人労働者の進出が行われた。1860年(咸豊10)には英清北京条約で、中国人が契約労働移民として自由に海外へ渡航することが認められ、1868年(同治7)の米清バーリンゲーム条約によって海外への往来・居住・入籍の自由が認められて、非人道的な猪仔貿易は廃止された。華僑は日本やロシア領シベリアにも存在するが、彼らの地位が改善されたのは清朝が積極的に諸外国と外交関係を結ぶようになってからである。渡航当初はまったくの無一物であった労働者の中にも、困苦の末しだいに財を蓄え農園、鉱山や商店の経営に成功して財閥となるものも現れた。すると本国と密接な連絡をとり同郷・同族のものを呼び寄せて、現地で強固な団結を作るのが常である。清朝政府もしだいにこのような状況に注目し、各地に中華総商會を組織させて華僑の経済的結束を奨励するようになった。国籍についても本国との連絡を緊密にするため血統主義を採用し、多くの国が属地主義をとっているのと対立した。華僑のほうでは民族意識に目覚めるにつれて、満州民族の清朝に対する反感が高まり、孫文らの革命運動に積極的な協力をするようになる。清末の国情不安、中華民国成立後の軍閥抗争と資本主義諸国の収奪などは、中国南部の人々をいっそう海外移住に駆り立てた。その勢力が強大になり、本国の国民政府を背景として民族主義的な行動をとると、現地の政府との間に政治的摩擦を生じ、あるいは土着人との間に経済的な紛争も起こった。第1次世界大戦後は各地とも中国人の移住を制限する方針をとったが、日中戦争の開始された1937年ごろまでは華僑人口は増加の一途をたどったとみられる。現地における自然増加もあり、今日1500万人と称される東南アジア華僑(全華僑の80～85%)はだいたいこの間に固定化し現在に至っているのである(最多はインドネシアの650万人、次いでタイの610万人など)。なお、移民の[中国の移民]の項も参照されたい。

【華僑社会の実態】 華僑の故郷である中国南部は、言語や風習の違いによって多くの地域的な集団に細分されている。海外に移住した場合も本国そのままの方言や生活形態を固守してきたのであって、広東・福建・潮州・客家(ハツカ)・海南の5方言団に大別するのが普通である。広東とは広東省全体ではなく広州を中心とした珠江下流域、福建は福建省南部の閩州や廈門(アモイ)付近の出身者をさすのであり、細かくいえばそれぞれの中にさらに多くの方言区域が存在する。もともと華僑は生活苦のためやむなく本国を脱出したのであるから、本国の保護が得られないとすれば、相互にことは通ずる同郷者が集まって助け合うのは当然である。このような同郷者の団体を幫(棋)(パン)という。中国南部では地縁と血縁とが重なって一村すべてが同姓で、祖先神を同じくし共通の信仰をもっているところが少なくない。華僑は団結の中心として主要な都市に事務所を設けており、地縁団体であれば地名を冠して某會館、血縁団体であれば某氏宗祠などと称する。これらは同郷・同族の互助親睦を図るのが目的で、共同墓地の管理、学校の経営をはじめとし、たいいていそこには共通の神や祖先をまつているので、例祭日には全員が集まって懇親会を行う。また公会と称するものがあり、もともと同業組合の事務所をさすが、華僑社会では本国における出身地と職業の種類とが一致することが多いので、會館と公会との機能は簡単に区別しにくい。このような本当の意味での地縁血縁団体が発展して大きくなるほかに、政治的な要求から小地域のものが省単位の連合体を作り、客家が集まって大規模な客属団体を作る。あるいは出身地にはかわりなく、ただ同姓なるがゆえに大きな同姓団体を構成することさえ行われている。これらの団結組織が華僑勢力の基礎をなしているのだが、誤って秘密結社に引き入れられ、暴力や闘争の犠牲となり笛博やアヘンに身を持ち崩して死んだものはどれほどあるかわからない。

地方的に職業をみると、大きくいって広東人は農園や鉱山などの肉体労働者、福建人は商業・貿易、海南人は家事使用人や喫茶店などの経営、潮州人は食料品の輸出入や精米などというふうに分かれている。しかも、企業としては株式組織による公開的な会社形態をなすことなく、郷党的・同族的な私的構成をとるのが一般的であった。東南アジアでは大財閥として名を知られたものも、商業と軽工業とをを中心に事業を拡大したものにすぎず、欧米の近代資本主義的な大産業とは性質が違うわけで、ここに華僑経済発展の限界があったのである。それは農業的な現地人経済と欧米的資本主義経済の中間にあり、さらに同じく華僑間においても封鎖的、孤立的であったといえよう。

第2次世界大戦中、華僑はいたるところで日本軍の圧制を受けて莫大な損害を被った(例えば、シンガポール華僑殺害事件)。大戦が終わると、東南アジア各地では各民族が独立し、自分たちの国家作りを始めた。華僑の立場はまったく変わり、従来は欧米の植民地において現地の住民を圧迫していたのが、逆に独立した各民族国家の支配を受けねばならなくなったのである。これらの新興国が華僑勢力を抑制しようとするのは当然のことであるが、一方、華僑の本国である中国は大戦後まもなく政治的に大陸と台湾とに分裂してしまった。新興国の多くは台湾側に立ち、国内の共産党排撃を行った。これに対し大陸側の態度も積極的で、その間にはさまれた華僑はきわめて苦しい立場に追い込まれた。しかし、彼らは得意の自衛力を発揮して経済復興に努力し続けてきた。新興国の政策には歩調を合わせ、旧来の二重国籍を捨て現地の国籍を取得させる方針に従って、表面上本国との関連を断ち切るものが増えている。このようにして政治・経済上、現地人と同様な権利をもったほうが有利だからである。タイ国では非常に多くのものがその国籍を取得し、正式な意味での華僑は少ないはずなのだが、血統主義からすると華僑の数はその何倍にも上るといわれる。1965年にはマレーシアからシンガポールが独立して一国を形成した。この国は総人口約200万のうち78%がもとは華僑であったが、現在では大部分が中国とは国籍上無関係なシンガポール国人なのである。このような国では、もちろん彼らは華僑でもなく中国人でもなく、自他ともに華人Chineseと称している。シンガポールであればシンガポール華人なのである。しかし、古い伝統のある中国文化を身につけていることを誇りとしているのは確かである。

このような複雑な国際情勢は、新たに中国人の海外渡航を促した。1997年の香港返還が迫ると、中国との関係に不安を感じた香港をはじめ台湾、シンガポールの華人たちは、進んでオーストラリア、アメリカ、カナダなどに根拠をおき、資本を投下するとともに、家族の安全と子女の教育を計画するようになった。彼らは昔と違って知識人が多く、受入れ国からも歓迎され、経済界のみなら

ず政治界でも信頼されている。その太平洋周辺に展開されるたくましい活力は、本国にも大きな影響を与え、むしろ香港やシンガポールの華人資本を導入し、それによって中国の近代化を進めようとする動きが顕著になってきたのである。日比野 丈夫

桂=タフト協定 かつらタフトきょうてい

1905年、アメリカと日本の間にかわされた朝鮮(大韓帝国)およびフィリピンに関する秘密覚書。同年7月、フィリピン視察の帰途来日したアメリカ陸軍長官 W. H. タフトは桂太郎首相と会談し、両者はつぎのような覚書を確認した。(1)日本はアメリカのフィリピン統治を承認する。(2)極東平和のため日本、アメリカ、イギリス3国間に好意ある了解を必要とする。(3)アメリカは韓国に対する日本の優越的支配を承認する。この秘密覚書はその後 T.ローズベルト大統領によって追認された。本覚書は、第2回日英同盟、日露講和条約とともに、日本の韓国保護国化、併合への重要な布石としての意味をもった。 日韓併合 由井 正臣

カヌー

丸太をくりぬいたり、木や竹などの骨組に獣皮や樹皮をはりつけた舟。語源は、カリブ海のハイチ島の原住民の舟 canoa に由来する。木から造られるカヌーは、形態的な特徴から四つの型に分けられる。最も単純な型は、1本の丸太をくりぬき船体とする丸木舟(くり舟)である。丸木舟は、日本では縄文時代から使用されており、ヨーロッパでも先史時代から全域にわたって用いられていた。現在それらの地域では、ほぼ板張り舟にとって代わられてしまったが、アフリカ、インド、東南アジア、ニューギニア、南アメリカなどでは、おもに河川交通や漁労に大きな位置を占めている。舟を安定させるため舷側に竹をつけたりするが、ミャンマーのメルギー諸島の漂海民モーケン族は、船幅の広い丸木舟を造って住居にしている。その製法は、大木から10m前後の船体をくりぬき、その中に水を入れて舷側を火で暖めながら船腹を広げ、横木をわたして固定する。2番目の型は、船体の片側にアウトリigger outriggerをつけたカヌーである。これはマダガスカル島からインド、マレー西海岸、インドネシアの一部を経てオセアニア全域に分布する。船体に平行して1本の浮き木がおかれる。これはカヌーの浮力を増すためでなく、バランスを保つためである。大型の帆走カヌーは、アウトリiggerを風上側において前進する。V字型で左右非対称形の船体、船首、船尾同形を特徴とするミクロネシア、中央カロリン諸島のカヌーは、今日でも800kmにおよぶ航海が可能である。3番目の型は、船体の両側にアウトリiggerのあるカヌーで、フィリピンとインドネシアに集中し、マダガスカル島やアフリカ東岸にも分布する。このカヌーは安定性に優れるが、方向転換などの操船や外洋での高い波に対して弱点があり、沿岸部や礁湖内の航行に限定される。4番目は、2そうの丸木舟を並べてつなぎ、甲板をつけた双胴船 catamaran ship(カタマラン船)である。これは19世紀までポリネシアとメラネシアの一部で使用されていた。小型のものは外洋での漁労用や他島への航海用であるが、ポリネシアの全長20~30mのものは、戦艦や王の即位式のさいの御座船として使われた。この規模のカヌーになると20tの積載量があり、多くの人間や家畜のほか多量の食料運搬が可能で、古代ポリネシア人の民族移動に使われたと推定されている。大型のカヌーは1本の丸太だけで造ることは不可能で、船底部に舷側板や船首、船尾を接合して紐で固縛する縫合船の構造をもつ。とくにニュージーランドやソロモン諸島の戦闘用カヌー、モルッカ諸島のオレンバイ、台湾のヤミ族のチヌリクランなどは肋材を備えており、板張り船の構造に近い。中央カロリン諸島では今日でも、伝統的知識を修得した船大工の指揮のもとに、斧と手斧だけで10mものカヌーが建造されている。その諸工程には、カヌーのスピードと安定性を神に祈願する呪術的儀礼が伴っている。須藤健一

カバナトゥアン Cabanatuan

フィリピン、ルソン島最大の穀倉、中部ルソン平野中東部の商業都市。人口規模は20万1000(1995)と小さいが、ルソン島東岸部に通ずる数少ない道路がここから発すること、北部ルソンと国道5号線で結ばれていることから、ルソン島中央部から北部、東部にまたがる交通・商業の一大センターとしての機能を持ち、最大の小都市の異名をとる。1950年に特別市に昇格、65年までヌエバ・エシハ州の州都であった。梅原弘光

ガルシア 1896 - 1971 Carlos Polestico Garcia

フィリピンの政治家。ボホール島出身。フィリピン法律学校を優秀な成績で卒業後、郷里で町長、州知事を務め、第2次大戦中の日本軍占領下では反日ゲリラ活動に従事した。戦後の1946年にナショナルリスタ党的の上院議員となり、53年にはマグサイサイ大統領の下で副大統領となった。57年、マグサイサイの事故死により昇格し、第4代共和国大統領に就任した。61年リベラル党のマカバガルに敗れるまでの任期中に、経済政策面で民族資本を優遇するフィリピン人優先政策をとり、民族主義的政治家として知られる。滝川勉

カビテ Cavite

フィリピン、マニラ南郊の基地の町。人口10万3000(1994)。マニラ湾の南東岸から北に向かって突出した幅1km、長さ8kmの砂州でできた半島上に位置する。スペイン統治下でサン・フェリペ要塞が築かれ、アメリカ時代には半島先端のサングレー岬に海軍基地が置かれた。こうした植民地支配の最前線にあったため、1872年には要塞内の兵器労働者暴動の発生地に、フィリピン革命時にはカウィット、イムスなど近隣の町と共に交戦中心地に、太平洋戦争時には日本軍の猛攻撃の的となった。アジア最大と言われたこの米海軍基地も1970年に返還され、ここによりやく自国の基地となった。1940年に特別市に指定され、60年代までカビテ州の州都でもあった。梅原弘光

ガルシア 1896 - 1971 Carlos Polestico Garcia

フィリピンの政治家。ボホール島出身。フィリピン法律学校を優秀な成績で卒業後、郷里で町長、州知事を務め、第2次大戦中の日本軍占領下では反日ゲリラ活動に従事した。戦後の1946年にナショナルリスタ党的の上院議員となり、53年にはマグサイサイ大統領の下で副大統領となった。57年、マグサイサイの事故死により昇格し、第4代共和国大統領に就任した。61年リベラル党のマカバガルに敗れるまでの任期中に、経済政策面で民族資本を優遇するフィリピン人優先政策をとり、民族主義的政治家として知られる。 滝川勉

ガンサ gangsa

東南アジアの青銅製打楽器。地域によって、異なる楽器をさす。フィリピンのルソン島のカリンガ族では、中型の銅鑼をいう。複数

の男子がおのおの音高の違う楽器を持ってかけ合いで打ち鳴らして用いる。インドネシアのジャワ島とバリ島では、共鳴管を持つもの(グンデル)、共鳴管を持たないもの(サロン)の両者を包括する青銅製打楽器の総称である。この種の楽器は、旋律打楽器を中心に編成される器楽合奏ガムランの骨格をなす。ジャワ島では、青銅製ガムランの同義語としてガンサが用いられる。 ガムラン 田村史子

極東選手権競技大会 きょくとうせんしゅけんきょうぎたいかい

アジア競技大会の前身ともいべき大会。フィリピン体育協会のアメリカ人 E. S. ブラウンの提唱によって、1913年マニラのカーニバルを機会に第1回大会を開き、34年の第10回大会まで続いた。参加国は、フィリピン、中国、日本が中心で開催地も3カ国の持回り、インドとオランダ領東インドが1回ずつ特別参加した。第2回大会までは東洋オリンピックあるいは極東オリンピックと一般に呼ばれていたが、第3回大会から改名された。競技は陸上、水泳、テニス、バレーボール、バスケットボール、サッカー、野球の7種目(多少の変動あり)を争う男子のみの国別対抗形式で、10回の大会のうち日本5、フィリピン4、中国が1回優勝した。当時のアジアにおける最高の国際競技会だったため、織田幹雄、南部忠平、鶴田義行、清川正二らの五輪金メダリストや野球の水原茂、若林忠志ら名選手が活躍した。最後は満州国の参加をめぐって日本と中国が対立、中国が退会して消滅した。 アジア競技大会 加藤博夫

キリーノ 1890 - 1956 Elpidio Quirino

フィリピン共和国の第2代大統領。南イロコス州ピガン市出身。フィリピン大学卒業。M. ケソンの秘書を経て、1919 - 22年下院議員、25 - 41年上院議員に選ばれた。34年に財務長官となる。46年独立後初の大統領選挙で副大統領に当選。48年4月、ロハス大統領の急逝で大統領に昇格。49年に再選された。キリーノ政権の6年間は、大戦後の経済復興のゆきづまりとフクバラハップの反体制運動で、フィリピン社会は混乱をきわめた。彼はこの状況を、アメリカの軍事援助と軍事使節団の助けで、強圧的にきり抜けた。51年に対日講和条約に調印、52年初頭より日比賠償交渉を開始した。53年の大統領選挙でマグサイサイに敗れた。池端 雪浦

クダラット ? - 1671 Katchile Qudarat

フィリピン史上でもっとも強大なイスラム国家を樹立したスルタン。1619年ころ、ミンダナオ島マギンダナオ族の首長(ダトゥ)になった。この頃マギンダナオ族はミンダナオ征服をめざすスペインの攻撃的になっていて、1637年には首都ラミタンLamitan が占領された。しかし、クダラットはまもなく、マギンダナオの地からスペイン勢力を一掃したばかりでなく、ミンダナオ西部のシブゲイ湾からイラナ湾を経て南東部のダバオ湾にいたる地域一帯の海岸地帯と、ラナオ湖周辺およびブランギ川上流域の内陸部に住むイスラム諸部族を配下におさめて、スルタン位に上り、フィリピン史上最大のスルタン国家を建設して、スペインのミンダナオ進出を阻止した。 池端雪浦

愚民政策 くみんせいさく

為政者や支配層がその権力を独占的に維持し強化すべく、民衆や被支配層の政治的・文化的な覚醒を妨げ、また政治批判能力の形成を抑止するために採用する一連の政治的術策をしばしば愚民政策とよぶ。そこでは支配層は被支配層との身分的・能力的ないし民族的な異質性を意識しながらも、ある場合にはそれを隠蔽し、ある場合にはことさらそれを強調することによって、被支配者の諸種の政治的関与の可能性を最小限化しようとする。愚民政策の背景には、一方でそもそも人民は愚かな存在にすぎないという素朴な愚民観、他方で個々の人間は可能性として主体的存在であり、時に賢民たりうるという屈折した賢民観がある。それは、支配の神話や政策に対して被支配層の忠誠や支持を調達して民衆の馴致(じゅんち)・統合をねらう支配の正統化政策とは対照的に、情報の遮断による民衆の知的疎外、アメとムチによる管理・抑圧を通じて支配政策への盲従と非抵抗とをもたらそうとする。古典的には参加を排除した民衆操縦にほかならず、独裁的な専制支配、異民族による占領・植民地支配にしばしばみられるものである。具体的な例として、素朴な愚民観を背景とする文盲政策、一定の食糧と娯楽とを提供して愚民化を誘う パンとサーカス (ムッソリーニ)の政策、あるいはアメリカのフィリピン政策に代表的なスクリーン、スポーツ、セックスによる欲望動員たる3S 政策などがある。

ところで愚民政策は裏からいえば、一方で民衆を政治的・文化的に覚醒せんとする啓蒙主義が台頭し、他方で異民族支配からの独立、植民地解放の運動の生起過程で、明確かつ批判的に問題化され打倒対象とされる一支配政策である。現代的には愚民政策は、以上のような政治能力の抑制、参加の排除、画一的行動様式の強制に限定されるものではない。もとより大衆デモクラシー、管理社会の進展という状況にあって、コマーシャルイズムの隆盛や各種催物の盛況は民衆の関心を非政治に動員する機能をもち、結果として愚民化を招来しかねない。しかし、それ以上に逆説的なことは、人民、国民、プロレタリアート を主権者シンボルとなす民主主義ないし社会主義の体制神話そのものが、言語象徴の駆使によって名目上の主権者を操作する愚民政策たりうることであろう。坂本孝治郎

黒潮文化

黒潮の流れが、気候・植生にも大きな影響を与え、西南日本における照葉樹林帯を形成する重要な要因をなした。海上交通上に諸々の意義をもつことはいうまでもなく、南方から動・植物(海の幸)をはじめ、人間や文化を運びつづけた。この海流が運ぶ漂着物や漂流者の保有する文化要素は、その共通性から 黒潮文化 の名で呼ぶにふさわしい。柳田国男が《海上の道》で説いた日本民族形成論や稲作導入の道筋については異見もあるが、その視点は 黒潮の道 を通して、南方地域と日本との人と文化の交流を考えるうえで重要である。また回遊魚を追ったり裸潜水漁労法を身につけた海民は、漂泊生活ののち、列島の各地に足跡をしるした。黒潮系民俗文化を見ると、主屋から釜屋(かまや)(炊事場)を分離し別棟とする分棟型民家や高床式穀物蔵、若者組を中心とする年齢集団およびその寝宿は、南西諸島、九州南部をはじめ太平洋岸諸地域に存在する。女性の出産・月経時にこもる別小屋である産屋(うぶや)や月小屋も黒潮洗う海域の村々にみられた。背負籠のバンドを前額、頭頂部に掛ける運搬法も南方につながりをもつものである。時代はさかのぼるが、縄文・弥生時代の習俗のなかに、南方との共通性をうかがわせるものが多く、入墨や抜歯の習俗はその好例といえよう。服装の面では、貫頭衣型服装、鉢巻、腰巻、褌(ふんどし)、脚絆があげられる。また、沖縄・奄美諸島という、海の彼方の仙界(ニライカナイ、ニルヤ、竜宮)からの来訪神信仰や、文芸の面で南方に濃厚に分布する海幸・山幸説話をはじめ、浦島子説話、羽衣伝説などが日本にも流伝し、文芸の世界を豊かなものにしている。北見 俊夫

クンディマン kundiman

フィリピン、ルソン島中央部に住むタガログ族の愛の歌。古くは、求愛に際して男が女に捧げた。通常、クンヒンディマン kung hindi man(私はしがいない者だが)で歌詞が始まることから、クンディマンと呼ばれるようになったという。囀拍子、短調で、哀感を漂わせた感傷的な旋律を特徴とする。1880年から1930年頃にかけての半世紀ほどの間に隆盛を極め、特にフィリピン革命時には《バリワッグのホセリーナ》というクンディマンを兵士達が好んで歌ったという。代表的作曲家として、近代クンディマンの父と呼ばれる B. アブドンや、F. サンチアゴ、N. アベラルド等がいる。山下美知子

ケソン 1878 - 1944 Manuel Quezon

フィリピン・コモンウェルスの初代大統領。ルソン島タヤバス州(現、ケソン州)パレル町の小学校教師の家庭に生まれ、当時の最高学府であるマニラのサント・トマス大学に学んだ。在学中にフィリピン革命が勃発、フィリピン・アメリカ戦争の段階から革命軍に参加。アメリカの植民地支配下で、1905年にタヤバス州知事に選出され、07年に開設された一院制のフィリピン議会に出馬して当選、国政の中心的人物の一人になった。09年から16年までワシントン常駐代表を務め、フィリピンの自治権を拡大するジョーンズ法の獲得に成功。この名声によって、16年開設の二院制議会では初代上院議長に選出され、07年以来フィリピン政治を牛耳ってきたオスメニヤの指導権を脅かすにいたった。22年の総選挙でナショナリスタ党集団指導派を率いて勝利を納め、フィリピン政治の第一人者となった。35年にタイディングズ=マクダフィー法に基づいてコモンウェルスが設立されると、初代大統領に就任した。41年12月、第2期目の大統領就任を目前にして日本軍のフィリピン侵略が開始されたため、翌42年ワシントンに亡命政府を樹立したが、日本軍降服の日を見ることなく客死した。池端雪浦

ケソン・シティ Quezon City

フィリピン、マニラ市とその北東マリキナ谷との間の低い丘陵地帯に位置する衛星都市。人口198万9000(1995)。1939年にマニラに隣接するリサル州の4町(カロオカン、マリキナ、パシッグ、サン・フアン・デル・モンテ)の一部が分離・統合されて誕生(当時の人口は4万人弱)、当時の大統領 M. L.ケソンにちなんで命名された。48年にフィリピン共和国の公式首都に定められ、市中央部に立つケソン記念塔周辺に広大な用地を確保、マニラからの官公庁移転が計画された。しかし移転はあまり進まなかった。75年にマニラ、ケソン・シティを含む4市13町が統合されてマニラ首都圏(メトロ・マニラ)が誕生し、翌76年に首都はその機能が残されたままのマニラに戻された。この間に住宅開発とフィリピン大学、アテネオ・デ・マニラ大学など学園移転が大いに進み、カムニン、サン・フランシスコ・デル・モンテなどの中・上級住宅団地、ディリマン一帯の学園・住宅コンプレクス、クバオの一大ショッピング・センターが形成された。梅原 弘光

古カトリック主義 コカトリックしゅぎ Altkatholizismus[ドイツ]

第1バチカン公会議(1869 - 70)の決議、ことに教皇の不可呈性宣言に反対してカトリック教会から分離したキリスト教団体。復古カトリック主義ともいう。中世以来の伝統に批判的なドイツの神学者デリンガー Johann Joseph Ignaz von D. llinger ら一部のカトリック者は公会議決議の受容を拒み、教皇にただ名誉上の首位を認めて地方教会の自主性、特殊性を尊重していた古代教会の基礎に立つべきだと主張し、1871年に独立のこの宗教団体を形成した。19世紀末の信徒数は、ドイツ、スイス、オランダ、オーストリアを合わせて16万余。20世紀に入りドイツとスイスでは半減したが、とくにアメリカ合衆国とポーランドで増え、現在は約35万。これに19世紀末スペインに対する反抗運動の中でアグリパイ Gregorio Aglipay が同様の思想から設立したフィリピン・インデペンデント・チャーチの信徒80万～100万を合わせる学者もいる。ミサの自国語共唱、断食と日曜ミサの義務解除、司祭独身制の廃止など、その信仰実践の近代化は、ようやく1960年代に始まったカトリック教会の現代化とも比較されて、興味深い。青山玄

ココ椰子 ココヤシ coconut palm 椰 Cocos nucifera L.

世界各地の熱帯の海浜や河口地域に栽培される代表的なヤシ科の高木(イラスト)。ココナッツともいう。栽培の歴史は古く、原産地や伝播(でんぱ)の歴史はつまびらかでない。インドへは3000年前にすでに渡来していたといわれる。中国の記録によると、290 - 307年ごろ中国南方やアンナンで栽培されていた。樹高30mに達し、通常は単幹で直立する。頂部に長さ5～7mの壮大な羽状葉を群生し、幹上には輪状の葉痕を残す。葉腋(ようえき)から花序を出し、分枝した花穂の基部に1～数個の雌花を、上部に多数の雄花をつける。おしべは6本、子房は3室からなり、通常そのうちの1室のみが成熟する。果実は直径10～35cm、成熟につれ緑、黄、橙黄から灰褐色となるが、品種により色調の変化は異なる。中果皮は繊維状、内果皮は堅く厚い殻となり、3個の発芽孔がある。繁殖は実生による。3～6ヵ月で発芽し、7～8年から収穫、1樹当り年間40～80個が得られる。品種が多くあり、セイロン島のキングヤシは早生で樹高が2mほどの低さで、結実するので有名である。

【利用】ココヤシの果実は、その成熟の過程でいろいろに利用されている。若いものは利用されることはほとんどないが、大きくなった半成熟果の胚乳は液状の胚乳液と内果皮に接した部分のゼラチン状の脂肪層とに分化し、胚乳液は飲用に、脂肪層は食用にされる。成熟果になると脂肪層は硬くなる。これを削り具でけずり、しぼったのがココナッツミルク coconut milk で、あらゆる食物の調味料として熱帯では多用される。また、この脂肪層をはぎ取って乾燥したのが、工業的な脂肪原料として重要なコブラ copra である。コブラはマーガリン、セッケン、ろうそく、ダイナマイトなどを作る油脂原料となる。なお、半成熟果の胚乳液は植物生体物質に富むため、植物の組織培養実験にしばしば用いられる。この場合にもココナッツミルクの呼称が用いられるので注意を要する。発芽が始まると、胚乳液の部分は油脂分に富むスポンジ状に変化し、これもやはり食用になる。花房を切り、切口からしみ出る甘い樹液は飲用とされる。またそれを発酵させたものはヤシ酒や酢となる。ヤシ酒はとくにミクロネシアで重要な嗜好品である。食物として以外にも、中果皮の繊維はヤシロープや燃料に、内果皮の殻はスプーン、飾りなどの日用品になる。葉は編料となり、籠、敷物、屋根ふきや壁材となる。若芽の柔らかい部分はココナツキャベツと呼ばれ野菜にされることがある。

フィリピン、インドネシア、オセアニア地域で大規模なプランテーション栽培がおこなわれていて、重要な現金収入源となっている。このように原住民の生活に重要なココヤシは、コブラが商品化されることもあって個人の所有とされることが多い。星川 清親 + 秋道 智弥

ゴメス ? - 1634 Luis Gomez Palomino

スペイン人のフランシスコ会士。1594年フィリピンに到着。98年(慶長3)二十六聖人殉教事件後の日本ヘジェロニモ・デ・ジェズと

ともに初めて来たが、数ヵ月の後に逮捕され、国外へ追放された。1601年同じくジェロニモと再来日して京都へ行き、10年同地のフランススコ会修院長となった。以後、主として関西で活躍し、14年キリシタン禁令で長崎へ送還されたが逃亡し、再度関西へ戻った。15 - 18年(元和1 - 4)同僚のフワン・デ・サンタ・マルタを助け、18年殉教したフワンの殉教録を執筆している。33年(寛永10)関西地方で逮捕され、長崎、大村、さらに江戸へ送られ、穴づるしの刑に処せられた。三十数年の滞日期間の大半は迫害下という困難な状況にあって、生涯を布教にささげた。岸野 久

コモンウェルス commonwealth

イギリスにおいて15世紀ごろから 共通の利益をはかる目的で構成された政治組織体 ,すなわち 国家の理想的形態 の意味で用いられた言葉で、意味上はラテン語の *respublica* や英語の *republic* と同様である。のちに同じ趣旨に立って、国家内の州の間の、また独立国・属領の間の 連邦 の意味でも用いられるようになった。歴史に現れた用語法としては、次の三つがあげられる。(1)イギリス、ピューリタン革命における共和政。1649年5月に正式に宣言された共和政は コモンウェルスにして自由国 *Commonwealth anda Free State* と称した。この時点から1660年の王政復古までにこの呼称が使われるが、1653年以降の護国縁政権の時期を含めないこともある。(2)イギリス連邦(コモンウェルス・オブ・ネーションズ)を意味する。(3)国家内の 連邦 の意味では、オーストラリアが正式の国名として1901年以来 *Commonwealth of Australia* を用いており、またフィリピン共和国がアメリカ合衆国の保護領であった時期(1935 - 46)の呼称 *Commonwealth of the Philippines* にも使われた。このほかにアメリカ合衆国においては、マサチューセッツ、ペンシルベニア、バージニア、ケンタッキーの4州は、 ステート の代りに コモンウェルス を公式の呼称にしている。今井宏

コロルム Colorum

フィリピンで、おもに1920 - 30年代に発生した千年王国主義的な社会運動に対して、外部者が付した名称。この語の起源は、19世紀初期にデ・ラ・クルスが結成したサン・ホセ信徒団の別称に統る。しかし20世紀のコロルム運動とサン・ホセ信徒団の間に直接のつながりはない。1920、30年代には、ミンダナオ島のスリガオ地方からビサヤ諸島、ルソン島諸州にいたるフィリピン各地で、コロルムの反乱が続発した。これら諸コロルム間には組織的連携はなかったが、以下のようないくつかの共通した性格がみられた。(1)参加者は都市および農村の貧民層であった。(2)貧困、不正、差別といった現実生活の苦しみからの抜本的救済を主張した。(3)千年王国主義の宗教的熱狂性とメシア思想をもっていた。(4)カトリック教会から 異端の徒 迷信の徒 とさげすまれながら、独自の信仰を堅持した。以上のような特徴をもつ組織や運動を、フィリピンでは従来、とくに権力の側から、コロルムと蔑称したのである。したがってコロルムは、1920、30年代以外の時期にも散見されるが、とくにこの時期に集中している理由は、アメリカ植民地体制下に入って、都市の労働者や農村の小作・貧農層が窮乏の度を深めたにもかかわらず、近代的な労働運動や農民運動は未発達だったことによる。今日、この語は拡大使用され、あらゆる無許可の所有物や無免許の事業を表す言葉として用いられている。池端雪浦

ゴング gong

一般に銅鑼(どら)と呼ばれる金属製の丸盆ないし円盤状の体鳴楽器。青銅で作られたものが多く、普通その中央部が打ち鳴らされる。ゴングの名称はマレー語に由来するといわれるが、この種の楽器は東南アジア一帯と中国およびその周辺で広く用いられている。日本の鉦鼓、鉦盤、伏鉦(ふせがね)、当り鉦(あたりがね)、双盤はすべてゴングの一種で、また金鼓(こんく 灘こんく)の別名をもつ鱧口(わにぐち)はゴングを最中(もなか)の皮のように二つ合わせた形状を呈している。実際にゴングに分類され得る体鳴楽器の形状は、浅い円盤状、深目の盆状、鉦鼓のごとく外側へ折り曲げられた縁をもつもの、中央に瘤状の突起をもつもの、さらに深く底の広い釜を伏せたような形(頂上に乳頭状の突起をもつ)などさまざまである。

東南アジアのゴングは演奏形態から2種に大別できる。すなわち、木杵から垂直に吊り下げられて側面から打たれるタイプと、凸面を上にして伏鉦のごとく水平に置き、上から桴(ばち)で打つタイプである。前者は概して大型で(直径が1m以上に及ぶものもある)、低く柔らかな持続性のある音色をもち、明確な音律をもたない場合が多い。後者は音色が硬質で、一定の音高に調律され、数個組み合わせると旋律を奏することもできる。英語で総称的にゴング・チャイム *gong chime* と呼んでいるのがこのタイプで、ジャワのボナンやクノン、パリのトロンボンやレヨン、フィリピンのクリンタン、タイのコン・ウォン、そして中国の雲鑼はこの種のゴングである。柘植元一

サカダ sacada

フィリピン中部の糖業地帯でみられる季節的出稼ぎ労働者のこと。サトウキビの収穫では、農場での刈取りから工場への運搬、圧搾までの作業をできるだけ敏速に行うことが、糖分減耗を防ぐための不可欠の技術的前提である。そこでサトウキビ地帯の収穫期にはどこでも大量の労働力需要が発生する。この労働力調達を、農園主たちはコントラティスタと呼ばれる手配師に依頼する場合が多い。収穫期前になると手配師たちは付近の島々に渡り、貧農、雇農、土地なし労働者の間を回って前貸金を品に労働者をかき集め、ネグロス島などサトウキビ農園の集中する島々に連れて戻ってくる。これら労働者は臨時雇労働者として農園内に住み込み、収穫期が終わるまでの数ヵ月間そこで働く。収穫が終わるとその間に蓄えたわずかばかりの賃金をもって故郷に帰ってゆく。全貌を示す正確な数字は見当たらないが、最近行われた調査によると、ネグロス島の糖業関係労働者の1~2割がこうしたサカダ労働力によって供給されていること、最大の供給先としてバナイ島のアンティケ、アクラン、カピスの諸州があげられ、全サカダ労働力の86%を占めたと報告されている。サカダが社会的に注目されるのは、一般に賃金水準が著しく低いこと、農園内の生活環境が著しく劣ることなどの労働条件の劣悪さと、賃金のピンはね、前貸金からの高利徴収、といった手配師の目に余る中間搾取が存在するからである。なお、サカダの語源はスペイン語で 引き抜く を意味するサカール *sacar* に由来するといわれるが、これは上記のような労働力調達の仕方と関係する。梅原弘光

サクダル党 サクダルとう

1930年代にフィリピンで最も急進的な反政府運動を組織した政党。組織者ラモス Benigno Ramos(1893 - 1945)はブラカン州ブラカン町出身で、州政府吏員、小学校教師などを務めたのち、マニラに出て、タガログ語によるフリーのジャーナリストとして名をなし、1917年初代上院議長ケソンの引きで上院に職を得るとともに、ケソンが催す演説会の弁士として活躍した。しかし30年、マニ

ラ的高等学校での学生ストライキを機にケソンと対立、週刊新聞《サクダル》を創刊して独自の政治活動を始めた。サクダル sak dal は 抗議 非難 という意味のタガログ語であるが、同紙はケソンの率いるナショナリスト党の寡頭政治と、宗主国アメリカに追従した政治を糾弾して、マニラ周辺諸州で多くの支持を得た。33年、政界が独立法をめぐって大混乱に陥ったのを機に、ラモスはサクダル党を結成、34年の総選挙でめざましい進出をした。サクダル党は即時完全独立を主張し、10年間のコモンウェルス期設定に反対したが、この主張は無視される形勢にあったので、35年5月2日、党員はマニラ周辺諸州で大蜂起を決行した。蜂起参加者は6万を数えたが、数十名の死者を出して1日で鎮圧された。この間ラモスは1934年から日本に滞在して日本の国粋主義者と親交を深め、蜂起時には日本から大規模な援助が行われると宣伝していたが、実行されなかった。38年、ラモスはケソンと和解して帰国したが、党員らがこれに反対したので、新たにガナップ党を設立した。日本軍のフィリピン占領時、これら2党の党員の一部は日本軍に積極的に協力した。池端雪浦

サルスエラ zarzuela

フィリピンの演劇。もとは16世紀から17世紀にかけてスペインで様式化された音楽劇で、喜劇的、風刺的なものに多く題材を取っている。フィリピンに1878年初めて来演、紹介されて以来、全島で急速に普及し、各地に専門の劇団が誕生し、それぞれの地方の言葉で上演されるようになった。身近な日常生活のできごと、特に恋愛をめぐる筋立てが多いが、モロモロ劇の構成をふまえ、フィリピン人とスペイン人、後にはフィリピン人とアメリカ人の対立など、外国支配の不当性を訴える政治的意図を秘めたものも少なくない。映画の普及に伴い、1930年代ころから衰退に向かったが、近年、政府の保護を受けて再興の試みがなされている。山下美知子

サントス 1879 - 1963 Lope K.Santos

フィリピンの作家。ルソン島リサール州の生れ。苦学してマニラの師範学校を卒業、教師となった。このときフィリピン革命を経験、以後目覚ましい社会活動が開始された。1902年にフィリピン初の労働組合、フィリピン民主労働組合の創設に参加、03年以後は《再生》ほか多数のタガログ語週刊誌の創刊、編集に携わり、自らも自然主義的社会派小説をそれらに連載、《朝焼けと日の出》(1906)は社会派タガログ文学の古典とされている。1910 - 22年にリサール州知事、ヌエバ・ビスカヤ州知事、上院議員などを歴任した。その後タガログ語、タガログ文学の普及と国語の育成につとめ、フィリピン大学その他で教壇に立つとともに、国立国語研究所の所員および所長(1941 - 45)をもつとめて、多くの貴重な業績を残した。池端雪浦

サント・トマス大学 サントトマスだいがく University of Santo Tomas

1611年にドミニコ会がフィリピンのマニラに創立したアジアで最古の大学の一つ。初めロサリオの聖母カレッジと呼ばれたが、のちにサント・トマス・カレッジと改名され、ついで45年に教皇インノケンティウス10世によって大学(ユニバーシティ)に格上げされた。フィリピンではこれより早く、1589年にイエズス会が創立したサン・イグナシオ・カレッジがあり、1621年に大学に格上げされたが、1768年にイエズス会がフィリピンから追放された際、閉鎖された。19世紀中ごろまではスペイン人植民者の子弟のみを受け入れたが、やがて現地人にも門戸を開くようになった。その中から J. リサールなどの民族主義者が誕生したのは歴史の皮肉である。教会法、民事法、医学、文学、哲学などの学部を擁する。池端雪浦

サン・フェリペ号事件 サンフェリペごうじけん

メキシコ・フィリピン間航行のスペイン船サン・フェリペ号は、1596年7月マニラを出港し暴風雨のため10月19日(慶長1年8月28日)土佐浦戸に漂着した。この報は早速領主長宗我部元親より豊臣秀吉に伝えられ、船長ランデーチョも秀吉に使者を遣わし保護を求めた。秀吉は奉行増田長盛を派遣して積荷を没収させたが、この処置に航海長が抗議してスペインの征服事業につき大言壮語し、あるいはポルトガル人がサン・フェリペ号漂着に関しスペイン人の日本征服とマニラからの渡航修道士との関係につき譏言(ざんげん)したため、当時畿内で公然と布教していたフランシスコ会修道士らが捕らわれ、翌年2月の二十六聖人の殉教となったと考えられている。この事件が秀吉のキリシタン迫害を再燃させ、殉教事件を惹起する直接の契機になったことは確実である。修復を終えたサン・フェリペ号は、97年4月浦戸よりマニラに出帆した。五野井隆史

サンボアンガ Zamboanga

フィリピンのミンダナオ島南西部、サンボアンガ半島南端に位置する都市。人口51万1000(1995)。1635年、イスラム教徒フィリピン人による北部フィリピン攻撃を撃退地点近くで制圧するために、スペインがここに要塞を建設したのが町の始まりである。市内に今なお残るピラール要塞がそれで、幾度かの攻撃を受けて放棄と再建が繰り返された。アメリカ統治下になってからの治安改善、それに伴う域内の地下資源や森林資源の開発、ココヤシやゴムなどのプランテーション開発の進展が、中・北部フィリピンからの移住者の急増をもたらし、市の地理的位置の有利性と相まって南西部フィリピンの交易・行政中心地に成長した。1936年に政令都市の指定を受け、市域面積1414km²、市の中心から最北端まで80kmもある、フィリピンで3番目の広域都市となった。南西方のスルー諸島への入口にあたること、市内がイスラム文化とキリスト教文化の会合点であることから、観光地としての魅力もある。梅原弘光

ジェロニモ・デ・ジェズ ? - 1601 Jeronimo de Jesus

スペイン語読みではヘロニモ・デ・ヘススという。ポルトガル人だがスペイン世界で活躍したフランシスコ会士。1594年(文禄3)来日し、長崎、京都で布教。二十六聖人殉教事件のさいマニラに追放された。98年(慶長3)再来日して潜伏。豊臣秀吉の死後、フィリピン、メキシコとの貿易を望む徳川家康と会い、交渉の仲介役をつとめた。99年5月江戸に ロザリオの聖母 教会を建て、キリスト教関東開教のきっかけを作った。1600年家康の使節としてマニラに渡り、翌年日本に戻り、家康に謁見後、同年10月没した。在日フランシスコ会再建のために功があった。岸野久

朱印船 しゅいんせん

御朱印船 ともいう。朱印船とは近世初頭において政府から 異国渡海御朱印状 といわれる外国向け(正しくは南洋諸地域向け)の渡航証明書、あるいは船籍証明書を与えられて渡航した船舶をいう。この場合、上記の朱印状を発行した日本の政府と、その効力を認めようとする相手国の政府との間に、相互にこの 朱印状 についての了解、承認、あるいは協定の成立が前提となっていた。

朱印船制度は1592年(文禄1)豊臣秀吉によって創設されたといわれていたが、その後の研究で92年ではないが、92 - 95年の間に成立したとされた。しかし秀吉の朱印のある朱印状は今日1通も見られず、秀吉が創設したことを傍証する当時の記録、文書も存在しないことから、この制度は徳川家康によって1601年(慶長6)の創設であるとする学説が有力となった。江戸幕府では朱印船制度の創設は01年としている(《通航一覧》)。それに家康とフィリピン長官との間に、また安南国(ベトナム)王との間に、朱印船制度の協定が成立したのも01年であり、今日残存する最古の家康の 異国渡海朱印状 は02年のもので、以後年々の朱印状が前田育徳会や相国寺その他に残存している。01年以前の南方諸地域への渡航船は、史料では 渡唐船 と呼ばれ、私貿易船として海賊船と区別されていたが、 朱印船 とは呼ばれてはいなかった。

朱印船は01年以後鎖国政策の展開した35年(寛永12)までつづけられ、その渡航総船数は350～360艘とされ、年平均約10余艘が從事し、そのなかに西南大名、幕吏、内外の豪商などが朱印船主として活躍していた。朱印船の渡航が詳細に知られるのは04年より16年(元和2)までの期間で、以心崇伝の《異国御朱印帳》《異国渡海御朱印帳》に、年度別・地域別に記録されている。朱印船の渡航地は安南国の東京(トンキン)、交趾(コーチ)国のツーラン、フェオ、柬埔寨(カンボジア)国のブノンペン、暹羅(シヤム)国(タイ)のアユタヤ、呂宋(フィリピン)のマニラ郊外のディラオやサン・ミゲルなどである。15 - 26年代の主流をなした朱印船主は、長崎の末次平蔵、船本弥平次、荒木宗太郎、糸屋随右衛門、京都の角倉了以・与一、茶屋四郎次郎、伏見屋、堺の伊与屋などである。朱印船を経営する場合、船主は幕府より朱印状の交付を受け、船舶や資本銀や商品を準備し、船長や船員を雇い入れ、ついで貿易を希望する商人を募集して客商とし、船賃をとって同乗させた。船の規模は茶屋船の場合、乗員は300人余、船の長さ45m、幅8.1mであった。

家康は当初は積極的に朱印船貿易を奨励したが、1609年ごろより諸大名の活動を抑制するようになった。大坂の陣以後は幕府の貿易統制が厳しくなり、將軍や幕府と懇意な直轄都市の豪商に限られた。また南方諸地域でも日本の朱印船の経済力をおそれて排除するようになり、各地で彼我の間にトラブルが生じていたし、日本の禁教政策の強化や武器輸出の禁制の徹底化などのこともあって、31年(寛永8)奉書船制度による貿易の制限に改められたが、35年奉書船の海外渡航は全面的に禁止された。中田易直

従軍慰安婦 じゅうぐんいあんぷ

十五年戦争期に、戦地・占領地で日本軍の監督下に置かれ、軍人・軍属の性交の相手をさせられた女性。当時は 軍慰安所従業婦 などと呼ばれたが、戦後、千田夏光《従軍慰安婦》などにより、この用語が普及した。その本質は軍性奴隷である。総数は8万とも20万ともいわれる。日本軍が慰安婦制度を監督・統制していたのは周知の事実だったが、重大な人権侵害・性犯罪だとする認識が広まるのは、1991年に韓国人被害者が名乗り出たからである。旧ユーゴ内戦での民族浄化や集団レイプなど、現代の戦争での女性に対する性暴力の再発がこの問題に新しい光をあて、根絶を求める動きが世界各地ではじまっている。

軍慰安所は1932年初めの第1次上海事変で陸海軍が作り、37年末に日中戦争が長期化してからは中国各地に、42年初めからは東南アジア・太平洋の日本軍占領地に設置された。設置の動機は日本軍将兵の強姦防止、性病蔓延防止、将兵への慰安の提供、スパイ防止にあり、そのため軍慰安所と女性の監督・統制が必要とされた。しかし、強姦事件はなくなり、軍慰安所を介して性病が蔓延した。日本人慰安婦は、原則として21歳以上の売春婦に限定され、また本人の同意が必要とされた(実際には公娼制という事実上の性奴隷制度の犠牲者が転じて軍性奴隷とされた)。朝鮮人・台湾人の場合は、売春婦以外の女性や未成年者を、軍に選定された業者が人身売買や、就業詐欺により戦地に連行するケースが多く、一部に拉致もあった。占領地では、中国人・フィリピン人・インドネシア人・マレー人・オランダ人など地元住民が徴募された。その徴募は日本軍が直接行う場合も多く、拉致のケースも少なくなかった。総じて軍慰安所には、拒否する自由、廃業の自由、外出の自由すらなかったので、本人の意思は無視され、多くの場合強制的に使役された。日本人以外の女性が数多く犠牲にされた背景には、日本の植民地・占領地支配の重圧があった。この問題は、女性に対する性暴力、人種差別(民族差別)、貧しい者に対する差別が重なった日本国家による重大な人権侵害であった。また、当時日本が加入していた婦人・児童の売買禁止に関する国際条約、強制労働に関する条約や当時成立していた慣習国際法に日本は違反していたと国連人権委員会のクマラスワミ特別報告者や国際法律家委員会・日本弁護士連合会などから指摘されている。

被害者は、日本政府の謝罪と各個人に対する賠償を要求しているが、日本政府は、法的責任はないとして拒否している。そのかわりに政府の斡旋で1995年に設立された 女性のためのアジア平和国民基金 が民間募金を行い、首相の おわびの手紙 とともに、1人当たり200万円を渡そうとしたが、被害者の多数から拒否されている。被害者の名誉回復のために、政府所管資料の全面公開、法的責任を認めた謝罪、個人賠償が求められている。吉見義明

ジョーンズ法 ジョーンズほう

1916年8月29日にアメリカ議会を通過したフィリピン自治法。一般には提案者ジョーンズ William A. Jones 議員の名前をとってジョーンズ法で知られている。この前文のなかでアメリカは初めて公式に将来のフィリピン独立を約束した。最も重要な点は、立法権がフィリピン人に与えられたことであり、この結果、フィリピン人から成る上院・下院が設置された。だが、行政権はいぜんとしてアメリカ人総督が保持し、総督はフィリピン議会を通過した法律に対し拒否権を保持した。またフィリピン議会による立法の権限も、外交、鉱山、鑄貨、外国貿易、移民については除外されており、司法権も基本的にアメリカの支配下にあった。このように多くの制限付きではあったが、当時のフィリピンでは、アメリカ主権の下での一定の自治権の拡大として評価された。滝川勉

シラン 1730 - 63 Diego Silang

スペインのフィリピン支配に抗した民族的英雄。フィリピンの主都マニラは、ヨーロッパで起きた七年戦争の余波で、1762年10月から64年5月までイギリスに占領された。長年スペイン支配に苦しんできたフィリピン人は、この事件を契機に各地でスペイン支配を打破する反乱を起こした。その中で最大のものは、ルソン島中西部パンガシナン地方での反乱(1762 - 64)とルソン島北西部イロコス地方での蜂起で、シランは後者の反乱の指導者であった。彼はルソン島中西部ラ・ウニオン州のプリンシパリーア(長老層)の家の出であったが、幼くして孤児となり、イロコス地方ピガン市の教区司祭のもとで成長した。したがってスペイン語をよくし、またピガン～マニラ間の郵便物運搬の職についたので、他地方の動きやニュースに通じていた。最初はトリブート(貢税)に苦しむ民衆の窮状とプリンシパリーアの体制不満を結合して、イロコス地方のスペイン当局に体制改革を迫ったが拒否され、1762年12月、実力でピガンからスペイン人支配者を一掃し、自ら率いる独立政府を樹立した。しかし63年5月、スペイン当局のまわし者によって暗殺され、独立政府もまもなく解体した。池端雪浦

スービック湾 スービックわん Subic Bay

フィリピン、ルソン島南西部のバターン半島西岸にある天然の良湾。東、西、北の3方をサンバレス山脈で囲まれ、幅5～10km、奥行き15kmで南シナ海に開ける。1901年に湾奥東岸のオロンガポOlongapo にアメリカ海軍基地が設けられ、その後基地施設は大きく拡張され、アメリカ海軍太平洋艦隊の母港として極東最大規模を誇るまでになった。アメリカ軍は92年に撤退し、基地の跡地は自由貿易地区として開発されることになった。基地の街として発展したオロンガポ市は人口18万(1995)を擁する。湾名は湾奥のスービック町に由来する。梅原弘光

スリガオ Surigao

フィリピン南部、ミンダナオ島北東岸の都市。スリガオ半島の突端、ピランピラン湾に面し、市域面積245km²。人口は7万9745(1980)であるが、1960年には1万6000といわれるから、この間に相当な急成長があったとみられる。北東モンスーン期に多雨季となり、年降水量は3863mmと多い。太平洋とフィリピン内海を結ぶスリガオ海峡と、内海からミンダナオ島東海岸地方に抜ける唯一の通路ヒナトゥアン水道を同時にのぞむ交通の要衝である。ラテライト鉄鉱、ニッケル鉱などの地下資源に恵まれながら大部分未開発のままになっている北スリガオ州の州都でもある。言語集団としてはセブアノ地域からの移住者が圧倒的多数を占める。梅原弘光

スルー[諸島] Sulu Archipelago

フィリピン南部、ミンダナオ島とボルネオ島の間に散らばる島々。バシラン、サマレス、ホロ、タブル、パングタラン、タウィタウィ、シプトゥ、それにカガヤン・スルーを加えた8群島からなる。火山性の比較的大きい島からサンゴ礁まで大小合わせて958島を数えるが、2.6km²以上のものは78島にすぎない。イスラム教徒フィリピン人の本拠地で、スペイン時代にもスルタンをいただく独立王国(スルー王国)を堅持した。スルタン制を廃止してフィリピンの一州となったのは1940年である。73年以降北部のバシラン州(面積1327km²)、ホロ島を中心とするスルー州(1600km²)、南部のタウィタウィ州(1087km²)の3州に分かれ、人口は3州合計75万6000(1980)。定住農耕を主要生活様式とするタウソグ、ヤカン、海上生活中心のサマル、バジャオなどが主要言語集団をなす。海産資源に恵まれ、中国料理用各種ナマコ、フカのひれ、海燕巣、装飾用の貝殻、鼈甲(べつこう)、天然真珠、黒サンゴなどが豊富に採れる。梅原弘光

セブアーノ族 セブアーノぞく Cebuano

フィリピンのいわゆる平地キリスト教民の一グループで、ビサヤ族に属し、セブ島、ボホール島、ネグロス島東部、レイテ島西部、ミンダナオ島北海岸部などに住み、セブアーノ語を話す。人口は1026万(1975)で総人口の24.3%を占め、タガログ族と並んでフィリピンで最大の言語グループを形成している。セブアーノ地域の中心セブ市には1521年にマゼランが建てたと伝えられる木の十字架や、植民地経営の基礎を築いたレガスピ隊が発見したといわれ、現在もその霊力ゆえに広範な信仰を集めている幼きイエス像 Santo Ninio などの、キリスト教にちなんだ遺跡や遺物が多い。農村部では主要作物としてトウモロコシが全耕地の半分以上で栽培され、二期作あるいは三期作が行われている。またココナッツ栽培が広く行われ、全国生産の約10%を占めている。ただし耕地面積に対して人口が稠密なため、東部ビサヤ地域やマニラ、ミンダナオ島、さらにはハワイやアメリカ本土に移住する者も多い。清水展

セブ Cebu

フィリピン中部、セブ島東岸に位置する都市。人口66万2000(1995)。セブ州の州都で、中・南部フィリピンの政治・経済・文化の中心地である。1521年世界周航の途中に立ち寄ったマゼランの一行により、ここでフィリピン最初の聖餐式と洗礼が行われた。65年スペインのレガスピ一行によって植民地経営の拠点に選ばれ、71年総督府のマニラ移転後も引き続き中・南部支配の根拠地であった。対岸のマクタン島に遮られた良港セブ港は1863年に外国貿易に開港され、コブラ、マニラ麻、砂糖などの輸海港、中部フィリピン最大の物資集散地として大いに栄えた。地理的にフィリピン群島の中心に位置することから群島一の交通の要衝でもあり、内航海運はセブ港を、国内航空便はマクタン空港を起点として中・南部フィリピン一帯に多数の航路網をもつ。山が迫っているために市街地の拡張は海岸線に沿って延び、北隣のマングラウエ市とはすでにつながり、マクタン島とは大橋で結ばれ、文字どおりの大都市圏を形成している。梅原弘光

タイディングズ=マクダフィー法 タイディングズマクダフィーほう Tydings - McDuffie Law

フィリピン独立法として知られる。アメリカ上院議員タイディングズと下院議員マクダフィーが共同作成、フランクリン・ローズベルト大統領により1934年3月24日承認され、同年5月1日、フィリピン議会で受諾された。同法は10年の経過期間(コモンウェルス期)ののち、1946年7月4日に共和国としてフィリピンが独立することを約束した。経過期間中、フィリピンはアメリカ領土としてとどまり、全フィリピン市民、官吏はアメリカに対し忠誠を義務づけられた。一方、アメリカ市民、企業はフィリピンで同国市民、企業と同等の権利を享受する特権を保有した。またフィリピン立法府の制定した通貨、通貨、外国貿易、移民についての法律はアメリカ大統領の承認を要し、直接的にはアメリカ高等弁務官の監督を受けることになった。この法律に従って翌35年には新憲法の制定、総選挙が行われ、11月15日にフィリピン・コモンウェルスが成立した。滝川勉

大東亜会議 だいとうあかいぎ

太平洋戦争中の1943年(昭和18)東京で開かれた会議。この年2月、日本軍はガダルカナル島より撤退、5月にはアッツ島守備隊が全滅するなど、戦局がいよいよ悪化するなかで、大本営政府連絡会議は、戦争完遂の決意と大東亜共栄圏の確立を内外に声明する会議の開催方針を定め、首相東条英機の東南アジア訪問後の10月はじめ、あらためて日本を中核とする政略態勢、日本に対する戦争協力を強化する必要を認め、同会議の具体的要綱を決定した。こうして11月5、6日の両日、東京で開催されたこの会議には、東条をはじめ中国行政院長汪兆銘、満州国 國務總理張景惠、フィリピン大統領ラウレル、ビルマ大統領バモー、タイ首相代行ワンウィタヤコーン、自由インド仮政府主席 S・C・ボースが出席、全会一致をもって大東亜共同宣言を採択した。6日に発表された右宣言は、大東亜各国八相提携シテ大東亜戦争ヲ完遂シ大東亜ヲ米英ノ桎梏ヨリ解放シテ其ノ自存自衛ヲ全ウシ、(1)道義に基づく共存共栄の秩序の建設、(2)自主独立の尊重と互助敦睦、(3)伝統の尊重と民族の創造性の伸暢、(4)互惠的経済発展、(5)人種差別の撤廃、文化の交流と資源の開放を綱領とする大東亜の建設を期すとうたっており、外相重光葵は1941年連合国が発表した大西洋憲章

と同一の精神に出たものとしている。馬場明

タクロバン Tacloban

フィリピン中部、レイテ島東岸にあるレイテ州の州都。人口15万3000(1994)。サマル島との間のサン・フアニコ海峡の南入口、サン・ペドロ湾に面して立地する。1874年国際貿易のため開港され、以来コブラ、木材の輸出港として大きな役割を果たしてきた。海上交通の要衝にあり、現在東ビサヤ地域最大の交易中心地で、地方行政中心地でもある。地名は、地方語で 竹製の魚具 を指すタクルブに由来するといわれる。梅原弘光

ダゴホイの乱 ダゴホイのらん

スペイン植民地下のフィリピン中南部のボホール島で、1744年から1829年まで85年の長期にわたって闘われた対スペイン反乱。指導者はボホール島イナバガ町の住民ダゴホイ Francisco Dagohoy(? - 18世紀末?)。1744年イナバガ町で巡査を務めるダゴホイの弟が教区司祭の命令で背教者の逮捕に赴いたが、決闘のすえ殺された。しかし教区司祭は、キリスト教で禁ずる決闘で死亡したという理由で殉職した弟の葬儀執行を拒否し、憤ったダゴホイは隣人らに呼びかけて蜂起した。長年スペイン当局の圧政に苦しんでいた島民は陸続としてこの呼びかけにこたえ、島中央部の険阻な山中に要塞を築いてスペイン当局と対峙した。反乱勢力は当初の3000人ほどからやがて3万人を超え、山中にはいくつかの自由な村落が形成された。マニラ政庁の再三にわたる討伐隊派遣、特赦の提供などが1829年までいずれも失敗した背景には、イギリスのマニラ占領(1762 - 64)などの政治情勢のほか、マニラから隔たった地理・地形の利、自由な村落にはぐくまれた連帯と士気、島民全体のさまざまな形での反乱支援などがあったためとみられる。池端雪浦

タサダイ族 タサダイぞく Tasaday

フィリピンのミンダナオ島、南コタバト州の山地に住むマノボ族系の小集団。標高約1200mの地点に位置する三つの洞窟に居住する。1966年にマノボ族の猟師ダファルが彼らと接触したのがきっかけとなり、国家少数民族問題担当の大統領補佐官マヌエル・エリサルデ・ジュニアによって組織された学術調査団が71年6月に現地調査した。この調査を通じてタサダイ族の存在が初めて公表された。当時の人口はわずか27名。ダファルに接触する前のタサダイ族は文明から隔離され、採集生活を営んでいた。野生のヤマイモを主食とし、木の実や芽、キノコのほか、川でとれる小魚、オタマジャクシ、カニ、エビ、カエルなどを副食としていた。おもな道具は、ヤマイモの根を掘り出す掘棒と旧石器式の石斧程度だった。ダファルと接触してから、火打石や山刀、小刀、矢や槍をもつようになり、生活空間を拡張していった。宮本勝

ダバオ Davao

フィリピン南部、ミンダナオ島南東部、ダバオ湾西岸に位置する都市。人口100万7000(1995)。20世紀初頭にはダバオ河口の小さな町にすぎなかったが、日本人実業家によるマニラ麻(アバカ)農園開発を契機に急激に発展、1914年にダバオ州の州都となり、36年には政令都市に昇格した。市域面積2211km²の超広域都市で、西方にそびえるアボ、タロモなどの火山山麓の緩斜面までが市域に含まれる。第2次大戦直前の市内在住日本人は1万8000人を数え、おもにタロモ川とシラワン川流域に住んでマニラ麻産業に従事、日本人小学校(15校)から病院(4)までもっていた。戦後は日本人の撤退、マニラ麻のモザイク病蔓延(まんえん)などで農園は一時衰退したが、現在では完全に復興している。60年代から外資系企業による日本向けのバナナ農園開発が進み、市内ではカリナン付近にいくつか開かれた。市の中心から3km北のサンタ・アナと8kmのササに港湾施設があり、マニラ麻、木材、バナナなど輸出商品はササ港から積み出される。67年ダバオ州が北、南、東の3州に分割され、ダバオは南ダバオ州の一部となり、以後州都ではなくなったが、引き続きこの地域の政治・経済・文化の中心地であることに 변りない。最近では観光資源の開発も進み、年々多くの旅行客を引きつけている。梅原弘光

タピオカ tapioca

キャッサバの塊根からつくるデンプン。粒子が大きくて精製しやすく、糖化力その他すぐれた点も多く、利用範囲の広い良質なデンプンとされる。南アメリカ、アフリカ、東南アジアなどの広い地域で生産され、主食として利用している国も多い。日本では第2次大戦後の食糧危機のさい、輸入食糧第1号としてフィリピン産のタピオカ417tが放出されたことがあり、現在ではおもにタイから輸入したものを紡績・製紙・食品工業で用いている。紡績面では糊料(こりよう)として高級織物の染色や和傘の製造に用い、製紙面では紙の表面加工や段ボール用ののりとされる。食品面では水あめ、菓子類などのほか化学調味料の原料として重要である。また、医薬品などとしてはビタミン C、ブドウ糖、アルコール、その他錠剤、粉剤の増量成型材として使われる。料理にはタピオカパールと呼ぶ高級品が用いられ、ゆでてスープの浮実にするほか、鶏卵、牛乳、砂糖などを加えてタピオカプディングをつくり、デザートなどにする。 キャッサバ 田中恒夫

タフト 1857 - 1930 William Howard Taft

アメリカ合衆国第27代大統領。在職1909 - 13年。第9代最高裁首席判事(1921 - 30)、弁護士。1901 - 04年、フィリピン総督として内乱の收拾と農地改革をはじめとする諸改革を断行。T. ローズベルト政権の陸軍長官時代(1904 - 08)、桂=タフト協定(1905)、日本移民の自主規制を約束させた日米紳士協約(1907)の締結、パナマ運河建設計画の推進、およびキューバの秩序の回復に貢献。09年、ローズベルトの後継者として大統領に就任。トラスト規制をすすめる一方、中南米、極東においていわゆる ドル外交 を推進する。ペーン=オルドリッチ関税法(1909)、自然保護政策に関するバリンジャー=ピンショー論争をめぐる共和党左派の進歩派と対立して党の分裂を招き、12年の選挙では T. W. ウィルソンに敗北。13年からイエール大学法学部教授。第1次大戦末期から国家戦時労働評議会委員長(1918 - 19)を務める。最高裁判事時代は、最高裁内の意見の調整とその能率の向上につとめる。松田武

タボン洞窟群 タボンどうくつぐん Tabon Caves

フィリピン共和国、パラワン島の中部西岸、ケソン地区のリプウン岬一帯に所在する洞窟遺跡群。かつて島であった同岬で29の石灰岩洞窟が発見され、1962年以来、フィリピン国立博物館の手で調査が行われ、フォックス R. B. Fox により概報が公刊されている。旧石器時代以降、近世に至るさまざまな時代のものがあるが、新石器時代以降、宋・元の中国陶磁を伴うものまでの長期間にわたる甕(骨壺)棺葬は、大半の洞窟で見られる。タボン洞窟では旧石器時代後期とされるチャート製、直接打法の影片石器が多数発見

され、それらは深さなどから IA, IB, II~V の6群に細分される。炭素14法による年代は、9250±250B. P.(IB)から30500±1100B. P.(IV)の数値を示す。なお洞窟の最下部は未発掘である。グリ Guri 洞窟には前5000~前2000年ころの貝塚がみられ、その全般から豚や鹿などの動物骨とともに影片石器が出土し、その上半から石刃(ブレード)も出土し石器技術の革新を示す。新石器時代の甕棺葬が発見されたのはバトゥ・プティ Batu Puti, リヤン Liyan, ニイベット・ドゥルドゥク Ngipet Duldug, マヌングル Mannunggul の諸洞窟で、他は金属期時代以降の甕棺葬である。重松和男

ダヤク族 ダヤクぞく Dayak種Dyak

オランダ系の民族学においては、ボルネオ島(カリマンタン)に住むプロト・マレー人系の原住民の総称として **ダヤク** の名称が一般的に用いられる。したがってこの語に各民族名を冠し、カヤン・ダヤク、クニャー・ダヤク、ヌガジュ・ダヤク、海ダヤク(イバン族)、陸ダヤクなどの複合名称がしばしば用いられる。ダヤク諸族間の言語・文化的類縁関係については諸説があるが、ごく大きく分けて、(1)フィリピンの諸民族と近い北部群(とくにムルト族)、(2)中央カリマンタン諸族(カヤン族、クニャー族を含む)、(3)西ボルネオ諸族(イバン族、陸ダヤク)の3群を認めることができる。

ダヤク諸族全体を通して焼畑陸稲栽培、顕著なアニミズム的世界観、発達した葬制、双系的な社会構造などの共通性が存在する。農耕方式における例外としては、北部高地のケラビット族の棚田耕作、西部海岸のミラノウ族のサゴヤシ栽培が文化史的に重要である。ボルネオ島の各地方海岸部に住むマレー人の起源は、多くの場合イスラム化したダヤク族に求められるであろう。現在でも進行中の社会過程としてダヤク族のイスラム化=マレー化は、東南アジア島嶼部の歴史を理解するうえで重要な現象である。ボルネオ北西部を占めるサラワク(現、マレーシア領)では、イギリス植民地時代からダヤクの語を海ダヤクと陸ダヤクに限定して用いてきた。日本でダヤク(ダイヤ)族という場合、実際にはイバン族をさしていることが多い。内堀基光

タール[山] Taal Volcano

フィリピン、ルソン島南部、マニラの南方約60kmにある活火山。標高311m。フィリピン最大のカルデラ湖、タール湖(東西約19km, 南北約24km)に浮かぶ中央火口丘で、その中に小さな火口湖をもつ。1572年以来25回以上の噴火が記録されており、最近では1911年、65年、70年に噴火し、付近の住民に大きな被害があった。北部外輪山の一角、タガイタイ峰から望む景観は格別で、多くの観光客を引きつけている。梅原弘光

茶壺 ちゃつぽ

葉茶を貯蔵、運搬するための壺。茶の湯では、11月になると宇治の茶園から届けられた、その年の初夏に摘んだ新茶を詰めた茶壺の口封を切って葉茶を取り出し、ただちに茶臼で碾(ひ)いて粉末にして、茶を喫する。この行事を **口切(くちきり)の茶事** と称してきわめて重要視されている。抹茶の場合、その年の新茶は、壺の中に入れ山頂の冷処において夏を越させるのがよいとされるが、これは茶壺にほどよい通気性がある葉茶の熟成を助けるものと考えられていたからである。また口封を切ってから1年間、茶壺は葉茶を保存するための容器として機能した。しかし、今ではスズの茶缶の出現もあり、さらに製茶の小売店ですでに粉末にした緑茶を缶に入れて販売しているから、茶壺は単なる **口切の茶事** だけに必要な装飾的なものになった。茶壺の中でもフィリピン渡来で **呂宋(ルソン)壺** と呼ばれるものが珍重されてきたが、フィリピンの焼物とするのは誤りである。14世紀から15世紀に中国の広東省、福建省一帯などで焼成された壺を **真壺(まつぼ)** と呼んで、16世紀に茶の湯が成立すると、名壺には **松島 三日月** などの銘も付けられて尊重された。徳川幕府は將軍家へ納める宇治から江戸への茶壺の送迎を **御茶壺道中** として、10万石の大名の通行と同じ格式を与えたため、ことさら茶壺の形式化が進んだ。真壺には文字印のある **清香**、蓮華文のある **蓮華王** があり、また瀬戸、備前、丹波、信楽などの国産品もよく知られている。戸田勝久

チャモロ族 チャモロぞく Chamorro

西太平洋、ミクロネシアのマリアナ諸島の原住民。17世紀にチャモロに殺されたイエズス会の宣教師サンビトレスは、当時のチャモロについて、体格がよく健康そうで長命の者が多いと述べている。スペイン人と接触以前のチャモロ人口は4万とも6万とも推定されている。しかしたび重なる台風や統治の必要上から行われたグアム島の特定地域への強制移住、疫病の流行、カロリン諸島への移動などの結果、最初の人口調査が行われた1710年には3539人にまで減少した。そのためスペイン政府はメキシコ人、フィリピン人労働者を積極的にグアムに導入した。彼らとチャモロ女性との間に多くの混血が生まれ、現在では純粋チャモロは存在しないといわれる。古いチャモロの社会は貴族、平民、奴隷の3階層から成り、地縁化した母系血縁集団が社会の中核であった。今日のチャモロは西欧化が進み、ほぼ全員がカトリック信者である。チャモロ語は今なお広く使われている。青柳真智子

ティンギアン族 ティンギアンぞく Tinggian

フィリピンのルソン島北西部山岳地帯に分布し、ティンギアン語を母語とする種族。人口約3万。かつて首狩りの習俗を有した種族として知られる。ティンギアンという呼称はマレー語のティンギtinggi(**山** の意)に由来し、スペイン人がこの種族の公式名として初めて用いた。ティンギアン自身は自分たちをイトネグ Itneg(**奥地の出身者** の意)と呼ぶ。一般に高地ティンギアンと渓谷ティンギアンに二分される。前者はアブラ州の東部と北部からイロコス・ノルテ州南部の高地にかけて散在する。小集落をなして住み、貧富の差はほとんどみられない。焼畑農耕を営み、陸稲やいも類を中心に栽培する。渓谷ティンギアンはアブラ州中央部からイロコス・スル州北部にかけての渓谷地帯に居住する。比較的規模の大きい村を形成し、住民は上下二つの階層に分けられる。灌漑設備を伴う階段式水田を発達させ、水稻を栽培する。宮本勝

デ・ラ・クルス 1815 - 41 Apolinario de la Cruz

フィリピンの宗教運動指導者。通称はエルマノ・プーレ Hermano Pule。ルソン島タヤバス州(現、ケソン州)ルクバン町生れ。15歳ころ修道会士を志してマニラへ出たが、修道会の人種差別で志を果たせなかった。そこで、フランシスコ会経営の病院で召使を務めつつ教義を習得。1832年ころサン・ホセ信徒団 Cofradia de San Jose を結成した。植民者スペイン人や中国系商人が富の力で免罪を得、天国への道を保証されている状況に反発して、ひたすらな **祈り** で天国を追求した。信徒団はやがて、タヤバス、ラグナ、バタガス3州に急速に拡大した。これに対してスペイン当局は、反逆的政治集団、異端集団の名目で信徒団弾圧を開始した。信徒団はこの弾圧を、 **最後の審判の日** 到来の徴と了解して、41年10月、 **反キリスト** たる当局との闘いに蜂起した。しかし蜂起

は短時日で無惨な敗北に終わり、デ・ラ・クルスも処刑された。サン・ホセ信徒団の反乱と呼ばれるこの蜂起は、フィリピンのフオーク・カトリシズムの文脈で構築された反植民地闘争の典型であった。信徒団員が祈りの最後に唱和したラテン語の文句「終りなき世界を per omnia saecula saeculorum から、部外者はこの信徒団を別称コロルムと呼んだ。池端雪浦

デル・ピラル 1850 - 96 Marcelo Hilario del Pilar

フィリピン革命に先立つ改革運動の中心的指導者。マニラ北隣のブラカン州ブラカン町出身。1880年に当時の最高学府サント・トマス大学を卒業すると、マニラおよびブラカン州一帯の知識人、プリンシパリアをひそかに組織して植民地改革運動を開始した。ちょうどこの頃、植民本国スペインでもフィリピン人留学生らが植民地改革を要求する言論活動を開始したので、これ以後1895年ころまでをフィリピン史ではプロパガンダ運動(啓蒙宣伝活動)の時代と呼んでいる。88年にデル・ピラルは国外追放処分を受けそうになり、スペインへ脱出、この地ですでに開始されていたフィリピン改革運動を再組織した。ここで彼が最も力を注いだ仕事は、機関紙《ソリダリダッド》の発行である。しかし同紙を中心とする彼の活動はリサルらと見解の相違をみ、またスペイン政府からはなんら具体的改革を引き出せなかったため、95年にはフィリピンでの支持を失ってついえた。同時に彼の肉体も7年余の異郷での活動に力尽き、帰国を目前にバルセロナで客死した。池端雪浦

闘鶏 とうけい

鶏が本能的にもつ闘争心を利用して闘わせる競戯。野鶏が最初に馴化され家鶏とされたのは東南アジアのマレー半島であろうとする説が有力である。黎明を告げる鳥としての宗教的な意義、および闘鶏という娯楽的意義が重視され、肉の利用はむしろ後代にいたってからであるらしい。その後、陸・海路を経て鶏、そして闘鶏は世界各地に伝えられた。インド、古代ペルシアからギリシアでも盛んで、サラミスの海戦(前480)を前に、ペルシア軍と闘うギリシアの名将テミストクレスが自分の軍隊に闘鶏を見せ、士気を鼓舞したという話は有名である。古代ローマからスペインを経て北部ヨーロッパに伝えられた闘鶏は、中世イギリスで大流行し、祭日の催しとして欠かせないものであったと同時に、当時の学生間でもてはやされた。16世紀のヘンリー8世は闘鶏愛好家としても知られる。

中国では、すでに《左伝》昭公二十五年(前517)の条などに見える。その後も上流階級の遊びとして行われ、魏の曹植らに「闘鶏詩」が残り、当時、闘鶏台も造られた。隋・唐時代に最も盛んで、高位高官の家では争って闘鶏用の鶏を買い、とくに玄宗の愛好ぶりは陳鴻(ちんこう)の《東城老父伝》に詳しい。この頃にはすでに民間にも流行し、おもに寒食・清明節前後に行われた。宋・元以後、しだいに衰微した。

日本では平安期にまず宮廷貴族の間で鶏合(とりあわせ)と称して好まれた。記録にも残っている有名な鶏合がいくつかあり、また紀州田辺には闘鶏神社があるほどである。江戸時代には闘鶏用に雄鶏を改良したシャモが導入され、闘鶏は庶民の間での大きな娯楽となった。明治期以降、表向きには禁止されているが、現在でもいくつかの地で行われている。

闘鶏は、動物愛護の観点から、また闘鶏に伴って笛が行われることから禁止されている国が多いが、現在でも東南アジアのマレー半島、フィリピン、スマトラ、ジャワ、ヨーロッパのフランスやルーマニアの一部地域、中南米のペルー、メキシコ、ハイチ、プエルトリコ、そしてアフリカのセネガル、エチオピアなどで見られる。多くの場合、蹴爪を切ってそこに鉄製の剣や太い針を取り付け、一方が戦意を喪失するか、または死ぬまで闘わせる。地面において闘わせるところもあるが、闘鶏用の特殊なリングを設けるところもある。笛が盛んなため、鶏の繁殖・飼育法ともに各地で高度に技術化されている。 鶏合 小川 了+植木 久行

東南アジア諸国連合 とうなんアジアしょこくれんごう Association of South - East Asian Nations

東南アジアにおける最初の本格的な地域協力機構として、1967年8月にインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイの5ヵ国によって設立された。略称は ASEAN(アセアン)。当初は、冷戦と地域紛争を切り離し、相互対立に代わって、社会・経済、文化面の相互協力を促進させることを目的としていた。しかし、70年代に入ってニクソン・ドクトリンによるアメリカのアジア離れや、米中接近に見るアジアでの緊張緩和が進むと、東南アジア地域における大国間のバランスを求めた中立地帯宣言(1971)を打ち出し、地域紛争の自主的・平和的解決の方向を明確にした。75年のサイゴン陥落後、域内緊張が高まり、とくに79年のベトナム軍のカンボジア侵攻によって危機は深まったが、インドシナ諸国との共存を求めた自主的解決の政策を保つことで、地域平和の維持に成功し、広く国際社会で注目を浴びようになった。

他方、この間に各国は強権によってではあれ、国内的な政治の安定と著しい経済成長を遂げた。経済開発が軌道に乗り、先進工業国との貿易、投資等の経済関係が深まるにつれ、共通の利益を促進するための機構上の整備が進んだ。決定機関である外相会議の下に、常設の中央事務局がジャカルタに開設されたほか、経済閣僚会議を中心とした貿易、資源、技術等の協力のための委員会が設けられ、域内特惠制度の拡充や関税引下げなど、域内経済協力を強めている。このようにして今日では発展途上国の地域協力機構のモデルとされるまでにいたっている。

日本は各国と個別的に経済関係を軸として協力関係を築いてきたが、とくに1977年の第2回首脳会議よりアジア・太平洋地域の先進国を含む拡大外相会議に参加し、ASEAN 全体への協力を強めてきた。最近では相互依存の深まりとともに、各国から日本の市場開放や技術移転等の要求が強まっている。84年にブルネイ、95年にベトナム、97年にラオスとミャンマーを加えて9ヵ国となり、東南アジアのほぼ全域をカバーする機構になったASEAN との関係は、ますます重要性を増している。 APEC 鈴木佑司

ナガ Naga

フィリピン、ルソン島南東部のピコル半島にある古い都市。南カマリネス州の州都。人口10万3000(1994)。1573年に建設されたフィリピン最古のスペイン集落の一つで、旧称をヌエバ・カセレス Nueva Caceres といい、長い間ピコル地方における植民地支配、カトリック教会行政の中心地であった。マニラからピコル半島に抜ける鉄道、幹線道路はすべてここに集まる交通の要衝であるとともに、肥沃で広大なピコル平野を後背地にもつ一大商業中心地であり、州都のみならずピコル地方全体の行政中心でもある。梅原弘光

南沙群島 なんさぐんとう

東はフィリピンのパラワン島とカリマンタン(ボルネオ)島、西はベトナムに囲まれた北緯4°~12°の間の海域に分布する200近い島嶼、岩礁からなる諸島。スプラトリー Spratly 諸島ともいう。おもな島に太平島、南威島、中業島、景宏島、鴻起島、費信島、

馬歡島、陽明礁、苦和群礁、万安礁、礼楽礁、海馬礁などがあるが、最大の太平島でも面積は0.4km²にすぎない。古来、太平洋とインド洋を結ぶ軍事・通商上の要衝である。また付近は好漁場で、近海ではマグロ、カツオ、カジキ、トビウオがとれ、諸島内では海藻、海綿、ナマコ、タイマイなどが豊富である。周囲の海域は原油、天然ガスなど豊富な地下資源の埋蔵が推定されるため、中国をはじめベトナム、フィリピン、マレーシア、台湾、ブルネイが一部または全部の領有を主張し、軍隊を島々に駐屯させている。1988年には中国とベトナムの間で軍事衝突が勃発した。現在は領有権を棚上げして、資源を共同開発する方向が各国間で模索されている。中国は92年に領海法で一方的に自国領と宣言した。曾母暗沙は中国が主張する最南端の領土である。林和生

南蛮貿易 なんばんぼうえき

1540年代より約1世紀にわたり、当時は南蛮人と称されたポルトガル、スペイン両国人の渡航によって日本商人等との間に展開された商取引。1543年(天文12)ポルトガル人の種子島漂着を契機にして、ポルトガル商船および彼らのジャンク船がリャンポー(寧波(ニンポー))、マラッカ等から西南九州の鹿児島、山川、坊津、府内、平戸等の各港に來航した。ポルトガル人は57年(弘治3)中国人からマカオ居住の許可を得、同地をゴア、マラッカと日本とを結ぶ定期航路の中継地および貿易拠点として発展させ、さらに78年(天正6)には広東市場での交易権を得て日本貿易拡大のための足固めをした。彼らの日本貿易が年々盛んになった理由の一つは、当時の明政府が海禁政策をとっていたことで、このため当時途絶していた日明間の貿易を肩代りし、かつ両国間の貿易を中継する形で進展した。ポルトガル商船が日本にもたらした商品は中国およびインドシナ産の生糸、絹織物、綿糸、金、麝香および武器等であり、日本からは銀をはじめ硫黄、蒔絵・扇子等の工芸品を持ち帰った。マカオ在住の住民たちは、68年(永禄11)以後に主要貿易品の生糸に関してアルマサンと称する一種の貿易組合を結成し、日本への輸送量を原則として1600ピコ(16万斤。1ピコ=100斤、1斤=600g)とし、定期船ナウの船長(カピタン・モール)との間に積荷についての契約を結んだ。マカオから派遣された代行人(フェートル)は日本商人と交渉して、パンカーダと呼ばれる一括方式によって売買価格を決定し生糸を売却した。ポルトガル商船は1580年代(天正8□17)には毎年50万ドゥカドの銀をマカオにもたらした。

九州の諸大名は鉄砲や硝石等の武器弾薬を入手して貿易の利を得ようとし、キリシタン宣教師にキリスト教の布教を許すなどして自領内へのポルトガル商船誘致に努めた。とくに肥前大村の領主大村純忠はみずからキリスト教に改宗し、イエズス会の要請をいれて、70年(元龜1)長崎港を開いた。翌年ポルトガル商船がはじめて長崎に入港し、同地は一寒村から貿易都市として発展していくが、ポルトガル人の長崎貿易は1638年(寛永15)までしか続かなかった。その間、1587年6月、博多で伴天連追放令を発令した豊臣秀吉は、貿易独占を意図して当時イエズス会の所領となっていた長崎を没収して直轄地とし、翌年には長崎代官を置くとともにキリシタン武将小西隆佐を派遣して、ポルトガル船将来の生糸を独占的に購入させた。

一方、秀吉のフィリピン諸島総督に対する91年の入貢勸告事件前後から、スペイン船も平戸および醍摩領内に來航して中国産生糸をもたらしようになり、1606年(慶長11)には徳川家康のたび重なる要請に応じて、スペイン船がはじめて浦賀に入港したが、スペイン人は日本から小麦粉や塩漬の魚・肉などの食料品、武器弾薬、漆器等をマニラに持ち帰った。

17世紀初頭、スペイン人に加えてオランダ、イギリス両国商人が日本貿易に参加し、中国ジャンク船が頻繁に渡航して生糸および絹織物等を将来したことによって、ポルトガル人による日本貿易独占の時代は終わった。さらに1610年1月(慶長14年12月)長崎沖におけるポルトガル商船爆沈事件によって、彼らの日本貿易は一時とだえ、マカオは大きな経済的打撃を受けた。江戸幕府は、マカオのポルトガル人に対して日本貿易復帰を許してのち、キリスト教布教と貿易の不可分性を克服し、14年禁教令を発して宣教師の国外追放を断行し、長崎貿易に対する管理体制をいっそう強化した。幕府はさらに24年宣教師の日本渡航を容認したフィリピンのスペイン人との通交関係を絶ち、ポルトガル商船に対しても潜伏した宣教師の資金源となっていた生糸類の持込みを禁じ、また彼らの密入国を阻止する口実のもとに各種規制を加えた。37年勃発の島原の乱を契機に幕府は39年ついにポルトガル商船の來航を禁じたのでポルトガル人の日本貿易はここに終息し、代わってオランダ人が日本貿易を名実ともに独占することになる。五野井隆史

南洋日本人町 なんようにはんじんまち

17世紀初めごろから末近くまで、東南アジア各地に形成された日本人居留民の町。日本人の海外渡航はすでに16世紀の終りごろから増加していたが、朱印船制度(朱印船)の確立とともに一段と盛んになった。1636年(寛永13)の第4回鎖国令発布までの約30年間に発給した朱印状の数は合計356通に達するが、実際の渡航船隻数はこれより多かったと考えられる。その行先は交趾(現在のベトナム中部)、暹羅(タイ)、呂宋(フィリピンのルソン島)、柬埔寨(カンボジア)、東京(トンキン。現在のベトナム北部)、高砂(台湾)という順位であった。渡航者は海賊、船員、商人、失業者、追放キリシタン等さまざまであり、また外国人の雇人として外国船で渡航した場合もある。当時の朱印船の乗組員数は、57人から394人まで船の大きさによってかなりの差があるが、岩生成一の計算によれば、この期間に出国した日本人総数は延べ10万人以上といわれる。彼ら渡航者の一部は現地に残り、人口の多い場合は特定の地域に日本人だけの集落をつくった。これが南洋日本人町と呼ばれるもので、だいたい朱印船渡航の頻度に応じて、ベトナム中部のフェイフォ(現在のホイアン)、トゥーラン(ダナン)、タイのアユタヤ、ルソン島のマニラ郊外にあるディラオとサン・ミゲル、カンボジアのプノンペンとピニャールーの合計7カ所であるが、他国人の間に分散して住む例は、マカオ以南に少なくとも20カ所あり、ほとんど東南アジアの全域に及んでいる。日本人町の最盛期の推定人口はマニラ郊外の3000人、アユタヤの1500人をはじめ、7カ所の全日本人町で総計5000人以上に達したようである。

これらの日本人町は多くの場合、自治権を与えられ、その頭領には日本人が選ばれた。これは言語、習慣、法律などが違うために現地政府側がとった処置であり、日本人側が要求したためではない。また日本人町を形成しなかった各地(たとえばジャカルタ、モルッカ諸島のテルナテ、(現ミャンマー)のアラカン)でも日本人統治の便宜上、頭領が選ばれていた。各地の日本人頭領の中には史料に名の残っている者が多いが、最も有名なのはアユタヤ日本人町の頭領、山田長政である。彼は部下の日本人を指揮してタイの政界を左右するほどの勢力をもち、南方リゴール州の長官に任命されたが、ついに政敵により1630年に毒殺された。この例からもわかるように、日本人の中には武勇にすぐれた者も多く、日本人の軍隊を雇っていた国王や高官などの例も少なくない。しかし、日本人の大部分は商業に従事し、とくに日本から來航する朱印船のために、生糸、鹿皮、鮫皮、蘇芳木(すおうぎ)(赤色系の染料)などの商品を買集めた。日本内地の朱印船貿易商の中には、自分の親戚や使用人を現地に常駐させる者もあり、フェイフォの平野屋六兵衛、角屋七郎兵衛、アユタヤの糸屋太右衛門などはその例であった。

これほど繁栄した日本人町も、1633年(寛永10)以後の一連の鎖国令による海外渡航禁令の強化に伴って、朱印船が來航しなくなり、また内地からの新しい人材の供給を絶たれることになった。しかも海外に長年滞在した者は帰国すると死罪に処せられるので、帰国することもできず、日本人同士の間で複雑な姻戚関係を結んでいたが、しだいに現地社会の中に吸収されていった。しかし、オ

ランダの記録によれば、フェイフォ、アユタヤ、ディラオの3カ所には1690 - 1708年ごろまで何人かの日本人が生存していたことが知られる。彼らは長い間日本を離れていても日本の生活様式をだいたい守り、床に畳を敷き、鎖国後も日本から酒、しょう油、奈良漬、鯉節、干し大根、梅干しなどを取り寄せていたらしい。また日本への通信は比較的自由であったらしく、長崎から追放されてジャカルタで1697年ごろまで生きていた混血女性ジャガタラお春その他の女性が故郷に宛てたいわゆるジャガタラ文が現存する。永積昭

ネグрито Negrito

スペイン語で 小人 人を意味し、東南アジアに点々と分布する少数民族の一般名称で、インド洋のアンダマン諸島に約600人、タイ南部と半島マレーシアの内陸に約2500人(セマン Semang 族)、フィリピン群島に約1500人(アエタ Aeta 族)居住する。これらのネグритоは形質、文化のうえでよく似ているが、その相互関係ははっきりせず、一説には東南アジア古代人の生残りといわれている。言語のうえではマレーシアのネグритоはモン・クメール語族に属するが、他地域のネグритоの言語との類縁関係はない。身体の特徴は身長1.5m以下で低く、皮膚の色は暗褐色か黒色で、ネグрито・ノーズと呼ばれる広鼻をもち、頭は短頭型、毛髪は黒の縮毛か羊毛状である。しかしかなり混血が進んでいる。現在はシャツにパンツ、スカートを身につけているが、本来の身なりは男女とも樹皮で作った小さなふんどしを身につけているだけであった。女性はその上に樹皮製の帯を腰に巻いていた。装身具が好まれ、女性は首輪、腕輪などを付け、すすや石灰で化粧する。社会生活の特徴としては、政治的統一のないいくつかの居住域に分かれ、それぞれのグループは多くのバンド(移動集団)に分かれて移動の生活をする。このバンドが政治、経済、社会の重要な単位である。おもに老夫婦、息子夫婦、孫とその他の近親によって構成されている。男は毒を塗った吹矢で狩猟し、女は塊茎類、果実、シロアリ、はちみつ、昆虫などの食物を採取し、川で漁をしながら移動する。移動生活のための小屋は風よけの差掛小屋程度のものである。婚姻は一夫一婦婚で結婚、離婚は比較的自由である。夫婦がどのバンドと共住するかは当地人たちの自由である。バンドにはリーダーのほか祭司がおり、神と人間の間を仲介する。神々の中でも雷神は、近親相姦、日中の性交、獲物の分配の不公平などには、稲妻によって罰する。この神の怒りを鎮めるために血の供犠が行われる。口羽益生

ネグロス[島] Negros Island

フィリピン中部、ビサヤ諸島中の島。セブ島とパナイ島にはさまれ、面積1万2600km²、同国で4番目に大きい。人口275万(1980)。行政的には東・西2州に分かれる。島の主軸に沿って南北に走る脊梁山脈(最高峰は標高2465mのカンラオン火山)が東岸と西岸に大きなコントラストを与えている。東岸部は山地が海岸まで迫って平地に乏しく、モンスーンによる雨も少ない(東ネグロス州の州都ドゥマゲテ Dumaguete の年降水量は1445mm)。一方、西岸部と北岸部は火山のすそ野が長く海岸までのびて肥沃な土壌に覆われ、南西モンスーンの影響で顕著な雨季がみられる(西ネグロス州の州都バコロド Bacolod の年降水量は2248mm)。19世紀後半から西岸部一帯でサトウキビ農園の開発が進み、今では全国生産の3～4割を生産する一大砂糖生産地となった。梅原弘光

バイ[湖] Laguna de Bay

フィリピン、ルソン島南部の湖。最近ではたんに ラグナ(湖) とも呼ばれる。マニラの南東部からラグナ、リサール両州にまたがって広がり、湖水面積891km²はフィリピン最大である。マニラ湾東岸部における軽い曲隆と湖南地方一帯の火山活動に伴う噴出物残滓の堆積により、マニラ湾の一部が切断されてできたと考えられる。湖底には火山性降下物がたまって水深は大部分で5m未満と浅いが、古来漁場、交通路として周辺住民の重要な生活の場となってきた。現在、湖の総合開発計画が進行中である。梅原弘光

賠償問題 ばいしょうもんだい

西欧近代史において、主権国家間の紛争に戦争という形で決着がつけられた場合、交戦国の一方が他方に対して、戦争によって生じた損害を金銭、物品などで賠償するという慣行があった。戦勝国が敗戦国に償金 indemnity を課す慣行は、17世紀以来、一般的な方式に展開し、19世紀には償金に関する規定を講和条約に盛り込むのが通常となった。国際市場の発展に応じて、国内の商品経済の柱である法体系に準拠し、償金金額の評価、支払いが行われた。

【日本】戦勝国が敗戦国に対して要求・賦課する償金、賠償には、戦勝国の戦費の負担および公私の損害を償うためのものがあるが、第2次世界大戦にいたるまでの近代日本政府はもっぱらこれの受取り手であった。日本で賠償支払い問題が生じたのは第2次世界大戦の敗北後である。大戦末期の1945年4月、米英ソ3国が賠償委員会を構成し、その代表にポーリー Edwin W. Pauley を任命し、第1次世界大戦後の過重な対独賠償が経済的混乱とナチスの台頭を招いたことを考慮して、現金や生産物の賠償を避け、軍需工業とそれに関連した過剰既存設備をおもな対象とし、経済自立を可能にする程度に抑えるという基本方針を示した。ポーリー調査団は45年11月に東京に到着し、みずからの調査、アメリカ政府・極東委員会の要望、日本政府の陳情をもとに46年4月 ポーリー最終報告 を作成し、空襲を逃れた軍需工業を中心とする重工業施設の過半を賠償として撤去することを勧告した。極東委員会では賠償の分配に関する合意が成立せず、47年4月のアメリカ政府のGHQ への指示により暫定的な施設撤去が開始され、49年5月までの2年間に4000万ドル相当分の工業施設・機械類が搬送され、中国は2000万ドル分、フィリピンは800万ドル分、イギリスは700万ドル分、オランダは500万ドル分を受け取った。

この間、アメリカは対日政策を転換して経済復興と政権の安定を急ぐようになり、それに合致する賠償方針として ストライク報告書 (1948年3月、主要軍事施設を除いた生産設備の撤去禁止を勧告)、ジョンストン報告書 (同5月、日本経済の早期自立を図るため、日本に対する経済的負担の軽減を勧告)が提出され、1949年5月、極東委員会において、アメリカのマッコイ代表が賠償のための日本の経済施設撤去の中止を宣言した。51年9月に調印されたサンフランシスコ講和条約は、連合国が1945年9月2日以前の戦争行為から生じる賠償請求権、直接軍事費に関する請求権を放棄する旨を規定し(14条)、同時に、日本軍の侵略によって与えられた損害と苦痛に対しては条約発効後の個別交渉に基づき賠償が支払われるべきことを規定した。

1952年4月28日調印の日華平和条約、同年6月9日調印の日印平和条約では、それぞれ対日賠償請求権の放棄が規定された。日本、ビルマ(現ミャンマー)は52年4月30日戦争状態を終結し、54年11月5日、平和条約および賠償・経済協力協定を締結した。これにより、10年間に2億ドルの役務と生産物を供与し、さらに経済協力として5000万ドル相当分を共同事業の形式で供与することとなった。日本・フィリピン間では1953年3月12日の沈船引揚げに関する中間賠償協定、56年5月9日の賠償協定および経済開発借款に関する交換公文が調印され、賠償5億5000万ドル、経済協力2億5000万ドルが規定された。日本・インドネシア間では58年1月20日賠償協

定が成立し、12年間に2億2308万ドルの賠償および20年間に4億ドルの借款が供与されることになった。インドシナ3国のうちカンボジア、ラオスは賠償請求権を放棄したが、南ベトナムのゴ・ジンジェム政権と日本との間では59年5月13日賠償協定および借款協定が成立、5年間に賠償3900万ドル、借款1660万ドルの供与が規定された。このほか、日本、タイの特別円債務支払いに関する協定（1955）、日韓条約(1965)、シンガポール血債問題(1966)は賠償協定の形式をとっていないが、日本による植民地支配と軍事的占領とがかかわって起こったものである。

なお、賠償問題は戦時に限らず平時にも起こり得る(国際責任 の項参照)。また、国内問題としてのそれもあるが、それらについては 国家賠償 損害賠償 公害賠償制度 等の項を参照されたい。佐々木隆爾

パイナップル pineapple 菠Ananas comosus Merr.

新大陸からの人類への贈物とされるほどに、世界各地で賞味されている果物。パイナップル科の多年草。葉は長さ約1mの剣状をなし、短い茎に向け漏斗状に配列され、少雨の利用に適応した形を示す。葉縁にとげを有する品種もあるが、1819年ころにとげのない系統が発見され、以降、経済品種として重用された。葉の先端は吹矢の矢じりに用いるほどに鋭い。主茎上に約150個の小花が、らせん状に密集した集合花序をつくり、下部から上方へ開花する。可食部は肥大した花序である。果形の均一性と一斉収穫のため、大規模栽培ではホルモンやエチレンなどの催花剤を利用して、一斉に花芽分化をさせる。南アメリカ原産であるが、世界の熱帯、亜熱帯で広く栽培されている。

日本では沖縄県に明治から大正時代にかけて、多数の品種が導入試作された。サトウキビ以上に台風に抵抗性があり、主要農産物の一つとなっている。酸性土壌にもよく生育し、乾生植物として耐乾性に優れ、葉面散布による施肥が有効である。果実は芳香の豊かさや風味のよさに加えて、ビタミン A, B, C, G に富み、タンパク質分解酵素ブロメリン bromelain を含んでいる。追熟ができないため、成熟果実を収穫した現地で、缶詰、ジュースなどの一次加工がなされる。生食やサラダのほか、ジャム、酒、アルコールなどが製造される。ジュースの搾りかすは飼料もしくは肥料に利用される。葉からとれる繊維は、フィリピンの礼服パロン・タガログをはじめ、糸、ロープ、レースなどに用いられる。また、斑(ふ)入りや紅色をおびた葉の観賞用園芸品種もある。岸本修

排日運動 はいにちうんどう

排日運動は二つの系統に大別される。一つは日本人移民に対する差別、排斥で、他は日本の侵略的行動に対する対抗措置(日貨排斥、日貨ボイコット)である。かつてのアメリカ、カナダ、ブラジル等における日本人移民の差別待遇、入国制限ないし禁止は前者であり、中国や東南アジアにおける日本商品ボイコット(日貨抵制)運動は後者に属する。

【東南アジアなど】日本の中国大陸への侵略拡大は、孫文によって 革命の母 と呼ばれた華僑にとっても看過できないことであった。東南アジア地域の華僑が、日貨排斥に動いたのは1915年の対中二十一ヶ条要求が明らかになったときに始まる。さらに19年のパリ講和会議における山東半島還付要求、23年の旅順・大連回収要求などに際しても、南洋華僑は学生、インテリ層の指導のもとに、各層が日貨ボイコット運動に参加した。

中国では、1924年国共合作が成立し、反帝・反封建の民族運動は新たな展開をとげた。こうした背景のもと、28年の済南事件のころより南洋華僑の排日運動は中国の政府・党の指導をうけるようになり、愛国・救国思想に裏づけられ、ますます熾烈(しれつ)化していった。31年、日本が満州事変を契機に中国への侵略を本格化するに及んで、東南アジア華僑による日貨排斥はより組織化され、その地域も華僑の最も多いイギリス領マレーのみならず、オランダ領東インド、フィリピン、シャム(タイ)など全域に拡大した。おりからの不景気のため足並みの乱れがあったとはいえ、これらの地域への日本商品輸出額は31年10月から翌年1月にかけてほぼ半減している。37年の蘆溝橋事件による中国への全面侵略に及んで、東南アジアの排日運動は抗日運動の性格を帯び、日貨排斥から中国への献金、さらには義勇軍の派遣にまで及んだ。そして41年12月、東南アジア全域へ侵略を拡大した日本軍は、各地で華僑の激しい抵抗運動に直面せざるをえなかった。

戦後復興から高度成長期に入った日本経済のアジア進出は、しだいに反発を招くことになり、1972年秋にはタイ学生運動が日貨排斥を呼びかけ、日本側を驚かせた。それは74年1月、田中角栄首相が東南アジアを訪問したときの 反日暴動 の前兆でもあった。韓国では、1970年に在日韓国人を就職差別した日立製作所に抗議して、その製品の輸入阻止の動きがあらわれたが、会社側敗訴により解決したため、ことなきをえた。田中宏

パウティスタ 1542 - 97 Pedro Bautista

スペイン人のフランシスコ会士。日本二十六聖人の一人。1566年フランシスコ会に入会し、81年フィリピン宣教団に加わり、メキシコを経て84年マニラに到着。フィリピンでは88 - 91年遣外管区長、91 - 93年マニラの修道院長を務めた。93年(文禄2)5月フィリピン総督ダス・マリーニャスの大使として来日、九州の名護屋で豊臣秀吉に謁見して使命を果たし、京都見物と称して滞在許可を得て上京。京都、大坂、長崎に修道院を設け布教を開始し、秀吉を刺激した。96年(慶長1)10月サン・フェリペ号事件のさい捕らえられ、97年2月長崎で他の25名とともに殉教した。1862年7月列聖された。岸野久

バギオ Baguio

フィリピンのルソン島北部にある高原都市。人口17万(1994)。中央コルディレラ山脈南部、標高約1400mの高原に位置し、年降水量は4298mmと多く、気温は年平均18 と冷涼である。ために熱帯低地にはみられない松林に覆われ、朝夕霧のかかることが多い。地名は、一説によると地方語で コケ を意味するピギウに由来する。20世紀初頭、アメリカはここに避暑地の建設を計画、急峻な山腹を中部ルソン平野に向かって一気に駆け降りるジグザグ道路の建設にとりかかり、多くの日本人労働者を雇い入れての難工事の末1905年に開通をみた。町は09年マニラに次ぐ2番目の政令都市に昇格、植民地時代の夏の主都として有名であった。45年9月フィリピンの日本軍(山下奉文大将)は、ここのアメリカ軍キャンプ(ジョン・ヘイ)で降服に正式調印した。マニラからの道路距離は250km、 パイン・シティ の愛称をもつフィリピン最大の高原避暑地として現在もシーズン中はたいへんにぎわう。ベンゲット州の州都で、北部ルソン山岳地帯の産物の一大集散地でもある。梅原弘光

バコロド Bacolod

フィリピン中部、ビサヤ諸島中のネグロス島西岸に位置する都市。人口40万2000(1995)。砂糖生産の中心地西ネグロス州の州都で、20世紀に入ってから近代糖業の展開とともに商業・金融中心地として飛躍的發展を遂げた。市内は糖業関係一色のムードに包ま

れ、目抜通りには銀行、保険・海運関係会社の近代的建物、製糖会社事務所、農業機械・肥料・農薬販売店が目につき、閑静な住宅地区にはサトウキビ農園主たちの豪邸が立ち並ぶ。梅原弘光

バシー海峡 バシーかいきょう Bashi Channel

フィリピン最北端のバタン諸島と台湾本島の間に横たわる海峡。太平洋と南シナ海を結ぶ。最深部の水深は約5000m。最狭部の幅は、台湾最南端の小蘭嶼(しょうらんしょ)とフィリピン最北端のイアミ島との間で約85km。梅原弘光

パシグ[川] Pasig River

フィリピン、ルソン島南部、マニラを東から西に横切る川。バイ湖の北西端に発し、途中パシグ町で北から流れてきたマリキナ川と合流、マニラの市街地をゆっくりと蛇行しながらマニラ湾に注ぐ。全長24kmと短い水量は豊富で、マニラ市内の景観に色を添える。スペイン時代の城郭都市イントラムロス Intramuros は河口左岸に、現在の大統領宮殿は右岸の河口から4kmの地点にある。パシグとはピリピーノ語で川もしくは砂の堤防の意である。梅原 弘光

パシオン pasyon

フィリピンで四旬節に詠唱されるイエス・キリストの受難詩。1行8音節の五行詩形式で書かれた長編の叙事詩。パシオン詠唱の慣習は18世紀初頭にさかのぼるが、現在詠唱されているパシオンは1814年にピラピル Mariano Pilapil 神父によって編集されたもので、ピラピル版パシオンと呼ばれる。この原文はタガログ語で、のちにフィリピン諸語に翻訳された。四旬節、なかでもとくに最後の聖週間に、7～8日間にわたってパシオンを詠唱するのはフィリピンだけだといわれる。加えてパシオンには、カトリシズムのフィリピン化をうかがわせる興味深い内容が多く含まれている。たとえば、キリストら登場人物が皆あたかもフィリピン人のごとく描出されていること、マリアの登場場面が多く、その部分は異常に長く叙述されていることなどである。パシオンにはイエスの受難の生涯のほか、その初めと終りの部分に、天地創造物語とこの世の終末に関する黙示録の世界が付け加えられていて、フィリピン人にとって一つの完結したキリスト教的宇宙観を教え込むうえで大きな影響力があったとみられている。四旬節に人々がうち集ってパシオンを詠唱する行為をパバサ pabasa といい、これは教会や町の広場に設けられた祭壇、小礼拝所、個人の家などで行われる。パバサほど盛んではないが、パシオンは舞台で劇としても演ぜられ、これをシナクロ sinakulo という。池端 雪浦

バシラン[島] Basilan Island

フィリピン南部、スールー諸島北端に位置し、諸島中最大の島。面積1282km²。サンボアンガ市の沖合17kmの地点に浮かび、最高峰バシラン山(標高1011m)のほかに20ヵ所にも及ぶ山頂が認められる複成火山島である。原住民はイスラム化したヤカン族で、中央政府の支配下に入ったのは20世紀に入ってからである。平坦地に欠けるが、山麓緩斜面、小河谷、沿岸低地には風化の進んだ沃土の堆積があり、ゴムのプランテーションがみられる。全島が熱帯雨林に覆われ、良質の木材を産する。北岸にある島内最大の町イサベラ Isabela は製材の町である。梅原 弘光

バスコ ? - 1805 Jose Basco(Vasco) y Vargas

18世紀後半フィリピンで画期的な経済開発を行ったスペイン総督(在任1778 - 87)。グラナダ出身の海軍軍人であった。スペイン植民地フィリピンの主都マニラは、ヨーロッパで起きた七年戦争の側圧をうけて1762 - 64年の間イギリスに占領され、スペイン政府にフィリピン統治の軍事的・経済的脆弱さを痛感させた。以後さまざまな改革が検討されたが、総督バスコが実施した経済政策は最も大きな成果を挙げた。彼は82年にタバコの強制栽培・専売制度を実施した(1881年まで継続)。これは、ルソン島北部諸州にタバコの強制栽培を命ずる一方、他の諸州ではいっさいのタバコ栽培を禁じ、政府専売店からタバコ製品を購入させるというもので、生産されたタバコはスペイン本国その他に輸出され、政府財政を大いにうるおした。その結果、従来スペイン領メキシコからの財政援助でかろうじて維持されてきたフィリピン財政は、ようやく自立できるようになった。しかし反面、この制度はフィリピン住民に多くの経済的負担と犠牲を強いた。バスコはまた1781年に国民経済協会を設立し、タバコ以外のフィリピン農産物資源の開発を行うとともに、85年には王立フィリピン会社を創立して、スペイン本国との直接貿易の促進につとめた。しかし、これらの政策は著しい成果を挙げることができなかった。池端 雪浦

バタンガス Batangas

フィリピン、ルソン島南部の地方都市。人口21万2000(1995)。マリカバン島とベルデ島を入口に配した天然の良湾であるバタンガス湾に臨み、火山性の肥沃な丘陵地からなる農業地帯を後背地にもつ。歴史は古く、1754年に州都がタールからここに移され、州名もバタンガスに変更された。しかしマニラの南約100kmという位置もあって経済的発展性に乏しく、町から市への昇格は1969年と遅れた。スペイン時代の大教会堂や最近の単科大学校舎など、市内には新旧の大建造物が目立つ。梅原 弘光

パターン攻略作戦 パターンこうりゃくさくせん

太平洋戦争の開戦と同時に日本陸軍の第14軍(司令官本間雅晴中将)はフィリピンに進攻し、1942年1月2日にはマニラを占領した。しかし、この間、アメリカ・フィリピン軍は決戦を避けて主力をパターン半島に撤収させ、以後、堅陣に拠って激しい抵抗を行った。このため日本軍は大きな損害をこうむったが、兵力の増強をえて4月上旬には同半島を攻略し、5月7日にはコレヒドール要塞を占領してフィリピン全域を完全に制圧した。なお、パターン攻略作戦の終了直後、日本軍は疲弊しきった捕虜を徒歩で移動させたため多数の死傷者を出し、また捕虜に対する暴行も行われたため、パターン死の行進 として激しい非難を浴びた。吉田 裕

パターン半島 パターンはんとう Bataan Peninsula

フィリピン、ルソン島南西部、マニラ湾の西に突出する半島。サンバレス山脈の南端にあたり、最大幅32km、全長約50km。第四紀の火山活動による火山山頂が全域に点在するが、なかでも北部のナティブ火山(標高1253m)と南部のパターン火山(標高1388m)の二つが卓越する。半島東岸には狭いながらも海岸平野が開けるが、南シナ海側は密林の覆う山岳地が海岸近くまで迫る。半島突端には天然の良港マリベレス Mariveles 港を有し、マニラ湾の入口を扼するという地理的位置の戦略的重要性は非常に高い。第2次大戦中の大激戦地であり、有名な 死の行進 の出発点でもある。マリベレスには1970年代初めに輸出加工区が建設され、多くの外国企

パナイ[島] Panay Island

フィリピン中部、ビサヤ諸島最西端に位置する。正三角形に近い形状で、属島を含む面積は1万2297km²。人口は約260万(1980)で、人口密度は211人/km²となり、これはセブ島に次いで高い。西岸部を南北に走る脊梁山脈(最高峰は2181mのマディアック山)とその中央部から北東方向にのびる丘陵性山地とが島の低地を3分する。イロイロ平野などの沖積平野と極端な乾季のない気候に恵まれ、古くから豊富に食糧を産し、開発も進んだ。19世紀後半以降イロイロ港の開港、東隣のネグロス島における糖業の発展に伴い、米とサトウキビの商品生産が著しい伸びをみせた。行政的にはイロイロ、カピス、アクラン、アンティケの4州に分かれる。梅原弘光

バナナ

単子葉植物バショウ科の果実を食用とする大型の多年草。和名はバショウ(芭蕉)に似るので、ミバショウ(実芭蕉)という。東南アジア原産で、現在は熱帯域に広まった。果物用品種のプランテーション栽培が盛んであるが、料理用バナナで代表されるように、主食としても重要な作物である。

高さ1.5~5mの葉柄がまき重なった偽茎の頂部から潤大な葉を四方に広げる。大型のため樹木とまちがえられるが、偽茎は多孔質で木質化せず、草である。偽茎の頂部から花茎を抽出垂下させ、基部には2列に並んだ雌花群(花房)が、先端部にはやはり2列に並んだ雄花群が段状につき、基部から順次開花する。果実は、ごく一部のものを除き種子がなく、形はやや曲がった円柱形であるが、短いもの、長いもの、角笛状のものなどいろいろである。肉質が熟すと軟らかくなるとともに糖度があがって甘くなるものは果物用に、未熟あるいは熟してもあまり甘くならないものは料理用に利用される。この栽培バナナは種子なしという性質をもちながら多様に分化した品種群で、東南アジア地域で複雑な過程を経て育成されたものである。すなわち、果物用バナナの大部分は、野生の種子を有するムサ・アクミナタ *Musa acuminata* Colla(インド東部から西部マレーシア地域に野生分布)から、まず種子なしでも果実がなる二倍体品種群として育成され、さらに三倍体化して種子なしになった品種が育成され、現在ではこの三倍体群が果物用バナナとしてもっとも広く栽培されている。日本に台湾やフィリピンから輸入されているものはすべて、このムサ・アクミナタの三倍体品種群の果実であり、温室で栽培される三尺バナナ(*M. cavendishii*, *M. nana*)と呼ばれるものも、突然変異によって生じたこの種の矮型(わいけい)の品種群である。他方、料理用バナナ品種群 *M. x paradisiaca* L.(英名 plantain)は雑種起源で、ムサ・アクミナタとリュウキュウイトバショウ *M. balbisiana* Colla(東南アジアからミクロネシア、ポリネシア西部まで野生分布)とが交雑し、三倍体あるいは四倍体になったものである。この雑種三倍体は料理用のみならず、果物用にも利用される品種があるが、じょうぶで食用バナナのなかでもっとも耐寒性があり、九州南部でも栽植可能な品種がある。また東南アジアから太平洋諸島で多くの品種が分化して、食用としても重要なものはこの雑種品種群であるが、日本にはほとんど輸入されていない。

バナナは、果実が食用になるだけでなく、雄花序や若芽は野菜とされ、根茎は家畜の飼料に利用される。リュウキュウイトバショウのように偽茎から繊維をとり出して芭蕉布(ばしょうふ)やマットを編んだり、潤大な葉は食料品を包むのに広く利用されているし、巻きタバコの巻紙代用にもされる。

野生のバナナの種は東南アジアからニューギニアに30種以上も知られ、ヒメバショウ *M. coccinea* Andr. のように花の美しいものは観賞に用いられ、また種子のデンプン質の胚乳や若芽、花序が食用にされる種も多い。南太平洋域には東南アジア起源のバナナとは異なるフェイバナナ *M. fehi* Bert. ex Vieill. が地方的に栽植されている。直立した果軸に大きな果実がつくので、東南アジア系のバナナからすぐに区別できる。堀田 満

バヤニハン bayanihan

フィリピン社会でみられる伝統的相互扶助慣行のこと。村落内の道路・橋・水路作りなど住民の共同利益、共通課題解決のための無償労働提供から、農作業における労働力の互助交換、家屋の建築・移動、出産、結婚、葬儀など生活面での助け合いまですべてこの概念の中に入る。その意味でこれはきわめて一般的、包括的用語といえよう。類似的用語としてスユアン、パタリス、ダマヤン、ポリガイなど数多くみられるが、これらは使われ方にある程度限定があって、例えばスユアンは農作業での労働力互助交換、パタリスとダマヤンは生活面での助け合い、ポリガイは共同利益のための無償労働提供といった具合である。なおフィリピンに限らずどこでもそうであるように、バヤニハンもしだいにすたれつつあることはまちがいない。梅原弘光

バラグタス 1788 - 1862 Francisco Balagtas

フィリピンのタガログ語詩文学の父。ブラカン州ピガア町の貧しい鍛冶屋に生まれた。11歳のときマニラの下町トンドの富裕な家庭に奉公に出、主人の世話でサン・ホセ学院、サン・フアン・デ・レトゥラン学院を卒業した。当時のトンドはホセ・デ・ラ・クルスなど著名なタガログ詩人の集う町で、バラグタスの天与の詩才はここで花開いた。しかし彼の人生はかならずしも幸せなものではなく、1835年ごろから2~3年間と、56年から4年間、奇怪な罪状で牢獄生活を強いられた。なお1849年ごろバルタサルと改姓している。生活の資を得るために、また牢獄の悲憤を晴らすために、彼は多くの優れた韻文詩、韻文物語を書いた。《フロランテとラウラ》(1838)はなかでも不朽の名作といわれている。1924年に彼の文学的功績を記念して、バラグタサン Balagtasan と呼ばれる、掛合いの詩作の競争形式が作り出され、今日でも盛んに行われている。池端 雪浦

原田喜右衛門 はらだきえもん

天正(1573 - 92)末より文禄年間(1592 - 96)、慶長(1596 - 1615)初頭にかけのフィリピン島(呂宋(ルソン))と貿易を行った豪商。生没年不詳。原田孫七郎は喜右衛門の一族であろう。喜右衛門は毎年のように呂宋や台湾に渡航して貿易を行い、秀吉の大使役も務めていた。彼は台湾を中継地にすべきだと考えて秀吉に台湾征服をすすめ、みずから一時台湾遠征を考えるが、財政難で果たせなかった。貿易、外交以外にあまり知ることができない人物であるが、一時、のちの村山等安や末次平蔵程度の財力をもつ有力な豪商であったことは事実であろう。中田易直

パラワン[島] Palawan Island

フィリピン南西部に位置する島。北東から南西方向に細長く横たわり、全長410km、最大幅39km、面積1万1800km²。周辺の島々を含めてパラワン州を構成し、州人口は37万2000(1980)。州の人口密度は25人/km²で、全国最低である。東岸中央部のプエルト・プリンセサ Puerto Princesa(人口60234(1980))が州都。東はスルー海、西は南シナ海に面し、南端はバラバク海峡でボルネオ島と相対する。島の中部から南西部にかけて石灰岩質の険しい山々が連なり、最高峰は、ブルックス岬の西方のマンタリンガハン山(2087m)。島の大半が熱帯雨林に覆われ、ラワン以外の硬質優良材を産する。純度の高いマンガン鉱、水銀(辰砂)、クロム、石油などの地下資源もみられ、また島の周辺部には水産資源も豊富であるが、まだ十分開発されていない。梅原弘光

パリアン parian

スペイン統治時代のフィリピンで、おもにマニラの中国人居住地区を指した言葉。セブやナガ、ビガンなどの中国人居住地区や、マニラの日本人居住地区を指す場合もあったが、一般にはマニラのパシグ河口南岸沿いの中国人居住地区の呼称として用いられた。語源については、従来諸説があったが、現在はタガログ古語説が最も有力である。同義語として、しばしばアルカイセリーア alcaiceria(スペイン語で 生糸市場)が用いられたが、それはパリアンで中国人が取り扱った最大の商品が中国産生糸だったからである。スペイン人はフィリピンにいる中国人をサンレイ Sangley, Xanglai と呼んだが、サンレイはスペインのフィリピン経営になくてはならない存在だった。彼らは中国からさまざまな商品を輸入して、植民者の消費生活を支える一方、ガレオン貿易の集貨を担当した。また、各種の中国人職人、医師、薬剤師などの存在も植民者の日常生活には不可欠だった。しかし、異教徒で経済力に勝る中国人が増大することは、スペイン政府にとって脅威でもあったので、1582年に中国人の隔離居住地区としてパリアンを設置し、彼らの行動を監視するようになった。パリアン設置のもう一つの目的は、特別課税による財源の確保にあった。中国人は原住民より重いトリブート(貢税)を課せられ、さらに、輸入税に相当する三分税や滞留許可税を徴収された。

こうしたスペイン政府の警戒的・抑圧的対中国人政策が原因で、17世紀には4次にわたる反乱がパリアンで発生し、それに対する弾圧が中国人大虐殺事件をひき起こした。パリアンの所在地は、創設時から1860年の解体命令時まで幾度か移動した。大別すると、(1)城壁都市マニラの市内にあった時期(1582 - 93)、(2)マニラ城外東側のサン・ガブリエル地区にあった時期(1593 - 1784)、(3)再度マニラ城内に置かれた時期(1785 - 1860)に分かれる。最盛期は1630～40年代で、居住人口2万、店舗数1000以上を数えた。しかし18世紀後半になると、中国人の居住地区制限は大幅にゆるめられたので、パリアンの存在理由は小さくなった。池端雪浦

バリオ barrio

フィリピンにおける地方行政末端組織としての村落、つまり行政村のこと。1972年からバランガイ barangay と改称されている。スペインが16世紀後半にフィリピンの植民地支配を開始した当時、フィリピン群島住民のあいだにはバランガイと呼ばれる村落共同体がみられた。それは30～100家族からなり、ダトゥ datu と呼ばれる首長に率いられた比較的小さな社会集団で、分布はきわめてまばらであった。限られた数のスペイン人宣教師と官吏でそれらを統治し布教するのははなはだ不都合であった。そこで打ち出されたのがバランガイ統合再編計画で、各地にまず教会を建設、そこに分散するバランガイを集めてカベセラ(中心集落)を作り、周辺部の集落をピシタ(近隣集落)と呼び、カベセラといくつかのピシタを統合してプエブロ(町)とした。これらがのちに改称されてプエブロはムニシパリティ、カベセラはポブラシオン、ピシタはバリオとなったが、行政の基本構造に変化はなかった。この構造のもとで地方行政の実質的末端はプエブロであった。バリオは多くの場合、人為的に区切られた行政的・地理的単位にすぎず、その首長はスペイン時代にティニエンテ(代行者)、アメリカ時代にルーテナント(副官)の称号しか与えられなかった。こうして伝統的村落は自治機能の多くを失った。1959年のバリオ憲章(1964年改訂)は、こうした村落の自治機能の回復と拡大をねらって制定されたものである。そのポイントの一つはバリオに財政的基礎を与えるための村基金(不動産税徴収分の10%)交付と特別課税権限の付与であったが、その実効はいまだ乏しい。梅原弘光

バロン・タガログ barong tagalog

フィリピンで男性が正装として用いる上着。バロン・ビリビノまたは略してバロンとも呼ばれる。パイナップルの繊維を材料とした長袖シャツで、両サイドにスリットが入り、前面に刺斥が施されている。スペイン領時代にメキシコから移入されたといわれる。1960年代以前はかぶり型で胴回りのゆるやかなものが一般的だったが、70年代に入ってから前開式で胴の引き締まった型が流行した。後者はマルコス大統領が好んで身につけたので、マルコス・タイプとも呼ばれる。女性の正装はテルノ terno(ないしテルナ terna)という裾の長いワンピース・ドレスで、パイナップルの繊維で作ったクリーム色の布地に細かい刺斥がたくさん施されている。バタフライ・スリーブ(チョウの羽の意)と呼ばれる釣鐘袖が特徴で、かつては上層階級の間でのみ用いられたが、今日では村の祭りに欠かせない衣装となっている。宮本勝

ビコル族 ビコルぞく Bikolano

フィリピンのいわゆる平地キリスト教民の一グループで、ルソン島南東端にのびるビコル半島およびカタンデュアネス島に住み、ビコル語を話す。人口は293万(1975)で、総人口の約7%を占めている。米、トウモロコシ、ココナッツおよびマニラ麻(アバカ)の栽培を行うが、台風の襲来を頻繁にうけ、多大な被害を被ることが多い。アルバイ州の州都レガスピはビコル族の中心地で、ほぼ完全なコニーデ型のマヨン火山を背後に擁し、観光地としても知られている。他の諸族に比較してカトリック教徒の比率が高く、信心深いと考えられており、より若いときに結婚してより多くの子どもをもつ傾向が強い。またその気性は穏やかで、運命を享受して郷里にとどまることを好み、他地域へ移住することが比較的少ない。料理は唐辛子をたっぷり用いて、辛い味付けにするのが特徴である。清水 展

ビサヤ[諸島] Visayan Islands

フィリピンのルソン島とミンダナオ島の間に広がる島群。総面積約6万km²。自然地理的にはサマル、レイテ、マスバテ、ボホール、セブ、ネグロス、パナイの主要7島にシブヤン、ロンブロン、タブラス、シキホールの4島を加えた11島とその属島からなる。降水量は東西両端の島々で多く(サマル島ボロンガンで年4257mm)、諸島中央部で少ない(セブ島セブで年1626mm)。住民はビサヤ族と総称されるが、言語的には多くの異なる言語が話され(ビサヤ語)、主なものでは、ワライワイ語(ワライ語)がレイテ島東半分とサマル島に、セブアーノ語(セブ語)がセブ島を中心に中部ビサヤに、ヒリガイノン語がパナイ島を中心に西部、北部の島々に

分布する。行政的にはマスバテ島はビコール地区、シブヤン、ロンブロン、タブラスの各島は南タガログ地区に加えられ、残る主要6島とシキホール島がビサヤ地域とされ、東・中・西ビサヤの3行政地区、14州に区分される。梅原弘光

ビサヤ語 ビサヤ語 Bisayan 語 Visayan

フィリピンのビサヤ諸島で話される言語(すべてアウストロネシア語族)はビサヤ語と総称されることが多いが、実は非常に多くの異なる言語が含まれている。大きく下位分類すれば次の通りである(話者人口はいずれも1975年)。(1)西部ビサヤ諸語 パナイ島のアクラノン語 Aklanon(約30万)とキナライア語 Kinaray - a(約35万)。(2)中部ビサヤ諸語 パナイ島のヒリガイノン語 Hiligaynon(約30万)とサマル島、レイテ島のワライ語 Waray(ワライワライ語とも。約200万)。(3)南部ビサヤ諸語 セブ島、ボホール島、ミンダナオ島北部沿岸のセブ語 Cebuano(セブアーノ語とも。約1000万)とスルー諸島のタウスグ語 Tausug(約33万)。

西部ビサヤ諸語と中部ビサヤ諸語は北部ビサヤ諸語と呼ばれ、南部ビサヤ諸語よりはむしろルソン島のビコール語やタガログ語に近い関係にある。これらビサヤ諸語の文法構造はタガログ語に似ているが、語彙、機能語が異なり、また祖語の^{*}eの反映が異なる(タガログ語では i, ビサヤ諸語では u)。土田 滋

ビサヤ族 ビサヤぞく Visayan

フィリピンのいわゆるビサヤ地方(ビサヤ諸島)に住む平地キリスト教民の総称。彼らが居住する面積はフィリピン全体の21%を、人口では約40%をも占める大グループである。言語的分類に基づけば、セブ島、ボホール島、ネグロス島東部、レイテ島西部などの中部ビサヤ地域に住むセブアーノ族(人口1026万。1975、以下同)、西部ビサヤ地域のとくにネグロス島西・北部、およびパナイ島東部に住むイロンゴ族 Ilonggo(ヒリガイノン族 Hiligaynon とも呼ばれる。420万)、東ビサヤ地域のサマル島およびレイテ島北東部に住むワライワライ族 Waray - waray(195万)、そのほかパナイ島西部のキナライア族 Kinaray - a(アムティコン族 Hamtikon とも呼ばれる。35万)、パナイ島北部のアクラノン族 Aklanon(31万)、マスバテ島のマスバテ族 Masbate(31万)などに分けられる。

西部ビサヤ地域は19世紀後半から糖業が盛んであり、全国の製糖工場およびその生産量の過半数を占めて一大中心地となっている。とくにネグロス島の西ネグロス州では耕地の40%以上がサトウキビのプランテーションである。中部ビサヤ地域ではトウモロコシが耕地の半分以上に植えられ、二期作あるいは三期作が行われている。東部ビサヤ地域では稲、トウモロコシ、ココヤシ、マニラ麻(アバカ)などを栽培しているが、一般に農業の生産性は低い。とくにサマル島は他の地域と異なって、東海岸を北上する台風の影響を受けやすく、気候が湿潤で、まだ広大な森林が残されている。ビサヤ地域は全般に沿岸漁業が盛んである。地域的、言語的な差異にもかかわらず、ビサヤ族と総称される人々はきわめて均質な文化を共有しており、一般に性向は楽天的で、享樂的な生活を好む傾向が強いとされている。清水展

ビスカイノ 1548 - 1628 Sebastian Vizcaino

スペイン人の商人、探検家。1580年スペインのポルトガル侵入のさいに従軍し、83年メキシコに渡った。のちフィリピンに向かい、86年から89年まで滞在して商人として成功した。89年メキシコに戻り、カリフォルニア半島の開発に情熱を燃やし、96 - 97年同地域の調査のため、太平洋沿岸を北緯29°まで探検した。1602年5月 - 03年3月、総司令官として3隻の船を率い、カリフォルニア太平洋沿岸の測量、地図作成を行って成功し、北緯43°まで達した。このときに命名された地名で今日なお使用されているものもある。11年(慶長16)3月、前フィリピン臨時総督ロドリゴ・ビペロ・イ・ベラスコ(ビペロ)救出の謝礼のため、メキシコ副王の大使として来日。同年6月浦賀に到着し、徳川秀忠、家康に謁見して任務を果たした後、日本の太平洋沿岸の測量、地図作成を行った。12年10月帰路につき、日本近海で金銀島探検を行ったが失敗し、日本に戻った。翌13年伊達政宗の派遣した船でメキシコに戻り、一時アカプルコ市長を務め、メキシコで没した。著書に《ビスカイノ金銀島探検報告》(《異国叢書》所収)がある。岸野久

漂海民 ひょうかいみん

船を住居とし、海上移動を続けながら漁業を行ってきた集団の総称。香港の蛋民(たんみん)やミャンマーの南部メルギー諸島からタイ南部のアンダマン海、さらにマラッカ海峡、インドネシア沿岸諸地域に分布し、一般にオラン・ラウト orang laut(水の民)と呼ばれる人々などが漂海民として知られている。後者のなかでは北ボルネオからフィリピンのスルー諸島、ミンダナオ島南部沿岸に分布するバジャウ族 Bajau が著名である。日本では 家船(えぶね) と呼ばれる漂海民が、長崎県西彼杵(にしそのき)郡や瀬戸内海の各地に分布していた。それぞれ本拠地を持ち、盆、正月などには必ず帰港することを掟としていた。生涯を船上で過ごし、死後墓だけを陸地に作るというのが 家船 の人々の伝統的生活だったが、現在ではほとんど見られなくなった。水上生活民という概念からいえばカンボジアのトンレサップ湖やアフリカの一部河川の船上生活者も該当するであろうが、漂海民という場合には、日本・華南および東南アジアに見られる人々を指すのがふつうである。また船の構造などから外洋での漁労をともなった生活には困難があり、風波の影響を比較的受けることが少ない多島海の島陰や入江などが、これらの人々の本拠地となることが多い。

本来、陸上に一片の土地も持たず、もちろん農業などは行わなかった集団であるから、生活の基盤は種々の漁労と、農耕民との物々交換による穀物、イモなどの獲得によって成立していた。日本の家船に典型的に見られる農村への女性の行商活動は、漂海民の側からすれば農民側への積極的行為といえるが、これなくしては家船の生活は成り立たず、この家船の女性の行商を、日本の商業の起源と考えるものもある。自給自足の生活形態が人類の生活の原型とすれば漁労を専業とし、陸上民との交易に依存する漂海民の生活は人類文化史のうえでは第2次の段階のものと考えられる。漂海民の起源については諸説あり明らかではないが、それぞれなんらかの事情で陸上から追い出され、陸上に住居を構えることができなくなった伝承を持っていることが興味深い。

漂泊の生活であるので、その人口なども確かめることは困難で、海上での生活実態にも不明の部分が多い。ボルネオの西部沿岸では100年ぐらい前から陸上との関係が急に深まり、北ボルネオのバジャウ族などは、定期市に現れたり、水稻耕作民やポニー飼育民に変化した者もある。また海岸から沖合へと順に水上に杭上家屋の集落を作っている例などもみられる。タイ南部のブケ島近辺やマレー半島南端のジョホール・バルなどでは、観光開発にともなう海鮮料理屋の増加により、オラン・ラウトの中にはそこに魚貝類を売るなどして生計を立てているグループもあり、移動の範囲もしいに限られつつある。東南アジアの漂海民の間にはイスラムがかなり浸透している。野口武徳

フィリピン独立教会 フィリピンどくりつきょうかい Philippine Independent Church

ローマ・カトリック教会から分離したフィリピンの民族教会。フィリピン革命の過程でフィリピンのローマ・カトリック教会の統治権を民族化しようとする構想が生まれた。革命軍宗務総長に任命されたフィリピン人司祭アグリパイが1898年10月に教会の民族化を宣言し、1年後には民族教会の創立が決議され、アグリパイらはローマ教皇の承認を求めたが実現しなかった。革命敗北後、1902年8月に民族主義者イサベロ・デ・ロス・レイエスがローマから分離したフィリピン独立教会の創立を提案し、アグリパイを大司教に指名した。翌03年1月にアグリパイは独立教会の初代大司教に聖別された。創立直後はその民族主義的立場のゆえに急速に教勢を拡大し、少なく見積もっても100万以上が信徒になったといわれる。神学の面ではホセ・リサルなど4人の民族英雄を聖人にするなど、しだいに正統的カトリック神学から離れた。独立教会はカトリック教会の建物を占拠して活動していたが、06年の裁判所の判決でこれらの建物を返還しなければならなくなり、教会の物質的基盤を失った。以後は教会運営がなおざりにされたこともあり、教勢は下降の一途をたどり始めた。第2次大戦後、独立教会は神学的立場の再検討を行い、その結果、61年には聖公会との間に共同陪餐協約を結び、現在にいたっている。70年現在で独立教会とその分派からなるアグリパイ派の信徒数は全国民の約3.9%にあたる143万4688人である。

フィリピン・アメリカ戦争 フィリピンアメリカせんそう

1899 - 1902年にフィリピンとアメリカの間で戦われた戦争。1896年8月以来フィリピンではスペインの植民地支配を打倒する独立革命が進行していた。おりしもキューバでも95年2月からスペインに対する独立革命が始まっていた。キューバに莫大な経済権益をもつアメリカは、キューバ独立を大義名分に98年4月25日スペインに宣戦布告し(米西戦争)、フィリピン情勢にも介入した。アメリカは当初フィリピン独立運動支援を唱えたが、同年5月1日マニラ湾を占領したアメリカ軍は、革命軍との連帯を拒否して8月13日に単独でマニラを開城、9月下旬よりスペインと講和条約交渉に入り、12月10日両国間でパリ条約に調印した。この結果アメリカはスペインからフィリピンの領有権を獲得した。しかしこの間に革命軍は自力でルソン島からビサヤ諸島にいたるスペイン支配地を解放し、98年9月には革命議会を設立、99年1月にはマロロス憲法を發布して、第1次フィリピン共和国(マロロス共和国)を樹立していたので、こうしたアメリカの背信的侵略を許すことができなかった。

99年2月フィリピン革命政府とアメリカとの間に戦闘が開始された。近代的装備に勝るアメリカ軍は破竹の勢いで革命軍の防衛線を突破し、全島に侵略の歩を進めた。99年3月末首都マロロスが陥落し、11月には革命政府大統領アギナルドが北部ルソン山岳地帯に追い込まれて、全軍的指揮能力を失った。だがアメリカにとつての苦戦はむしろこの時から始まった。各地で農民たちがそれぞれの指導者を中心に、まことに執拗なゲリラ戦を展開するにいたったからである。しかし有産階級の功利的妥協や、アギナルドの逮捕、降服などによって、アメリカの占領体制は日をおって進んだ。99年3月には早くも J. G. シャーマンを委員長とする第1次フィリピン委員会が到着、占領行政の実施と関連の諸調査を開始した。1901年7月には軍政から民政への移行が発表され、W. H. タフトが初代民政長官に就任した。そして02年7月4日、アメリカはフィリピン平定作戦終了を宣言、02年7月1日にアメリカ議会を通過した フィリピン組織法 に基づいて、全面的なフィリピン植民地統治を開始した。しかし南タガログ地方、東ビサヤ地方、南部フィリピンのイスラム地域では13年ごろまで、アメリカの植民地支配に抵抗する戦いが継続した。池端雪浦

米西戦争 べいせいせんそう

1898年キューバとフィリピンを舞台にアメリカとスペインの間で戦われた戦争。アメリカ・スペイン戦争ともいう。アメリカはこれに勝利、カリブ海を制覇し西太平洋への根拠地を手にして世界帝国への道を決定的なものにする。この戦争はアメリカ史上 素晴らしい短い戦争 と呼ばれるが、実際には、キューバとフィリピン民衆の、独立への長い凄惨な戦争の表層部にすぎなかったことがまず確認されなくてはならない。

長年のスペイン植民地支配に苦しむキューバ人は、高揚したナショナリズムを背景に、1868年から10年間に及ぶ独立戦争を戦い、のち運動は鎮静化するが、95年再び反乱に立ち上がる。それと前後しフィリピンでも、スペインの圧制をはねのけようと、96年民族主義者アギナルドを中心に大規模な反乱が起こされる。これに対し、当時キューバの砂糖・タバコ産業に多額の投資を行っていたアメリカでは干涉論が高まった。また、すでにハワイ併合に乗り出していたアメリカは、極東への通商拡大の拠点としてフィリピン諸島支配の機をうかがっていた。時あたかもアメリカ国内で、白人の責務 をうたうナショナリズムが台頭していた。

1898年2月メーン号爆破事件を契機にアメリカ国内の世論が沸騰し、スペイン懲罰論が決定的となる。4月アメリカ議会はスペイン軍撤退を要求するが、これに対してスペイン政府は対米宣戦布告をもってこたえ、ここに米西戦争が始まった。アメリカは世界第2の海軍力を生かし、香港待機中のアジア艦隊をマニラ湾に向け、5月マニラに侵攻し、8月には同市を制圧した。一方、北大西洋艦隊はサンチアゴに上陸し、7月中旬同市を陥落させた。この戦闘に T. ローズベルトは志願兵を募って参加している。その後アメリカはプエルト・リコを占領するが、フランスの仲介で休戦会談、講和会議が開かれ、12月10日パリで講和条約が調印された。その結果アメリカは、2000万ドルをスペインに支払うことを条件に、全フィリピン諸島を譲り受け、さらにスペインはキューバを放棄、プエルト・リコとグアム島もアメリカに割譲した。翌年2月アメリカの帝国主義的拡張に反発する民主党を中心とした諸勢力の激しい反対を押し切って上院は同条約を批准した。

しかし、こうした大国間取引とは別に、アギナルドらはこれより先スペインとの戦争の中で98年6月独立を宣言して革命政府を樹立し、翌99年1月には東アジアにおける最初の共和国を誕生させた。しかしアメリカはそれを認めず、ここにフィリピン・アメリカ戦争が始まる。1902年フィリピン側は一応の降伏をするが、反米闘争の残り火は13年ころまで続いた。他方キューバは独立したとはいえ、アメリカの政治的経済的従属下に組み入れられ(プラット修正)、プエルト・リコはアメリカの保護領に、グアムはアメリカ領に編入された。進藤栄一

ボホール[島] Bohol Island

フィリピン中部のビサヤ諸島主要7島の一つ。形状は楕円形に近く、面積3864km²は全国第10位。北半分は風化の進んだ火山性物質の小丘陵からなり、南半分には隆起した石灰岩の溶食による小高い山の林立する独特の景観(チョコレート・ヒルズ)が展開し、観光客を魅了する。属島を含む島全体でボホール州を構成し、人口80万6013(1980)であるが、早くから人口流出が目立つ。州都は南西端のタグビラン Tagbilaran で、ここは16世紀後半、植民地支配を目ざしてやってきたスペイン人総督レガスピが現地人首長シカツナと最初の血盟を結んだ土地だといわれる。梅原弘光

福本日南 1857 - 1921(安政4 - 大正10) ふくもとにちなん

明治・大正期のジャーナリスト、史論家。本名は誠。福岡藩士の長男に生まれ、司法省法学校に学ぶが、1879年学校騒動で退学。自由民権論を唱え、北海道開拓に携わる。89年新聞《日本》の記者として筆をふるう一方、南方雄飛の志を抱きフィリピンに渡る。日清戦争後はフィリピン独立運動に参加し、中国問題に関心を寄せる。1905年玄洋社の機関紙《九州日報》社長となる。代議士も務めたが、《元禄快拳録》で史論家の地位を確立し、赤穂義士の研究にうちこんだ。第1次大戦に際し、国民精神の高揚を意図して、16年中央義士会を興した。広瀬 玲子

ホロ[島] Jolo Island

フィリピン南部のスールー諸島中、バシラン島に次ぐ大きい島。面積893km²。西部のトゥマタンガス山(標高812m)を最高峰としていたるところに円錐形の小火山がそびえる。半農半漁のタウソグ人を中心に、海岸部には海上生活を得意とするサマール人が住み、古くからスールー海域の政治、交易の中心地であった。マニラの支配下に入ったのは20世紀になってからである。周辺の島々と一緒にスールー州を構成し、島の北西岸のホロ町が州都(人口5万2429。1980)。梅原弘光

ボントック族 ボントックぞく Bontocs

フィリピンのルソン島北部山岳地帯のマウンテン州を中心として居住するプロト・マレー系の民族。マウンテン州(州都ボントック)の人口は9万4096(1975)で、このうちボントック語を母語とする住民は3万2800(34.9%)である。ボントック族は首狩り、勲功祭宴、雑穀耕作、動物供犠、巨石記念物の建立、頭蓋崇拜などの文化特性から、インド北東部のナーガ系諸族、東インドネシアのニアス島民などととも、いわゆる東南アジアの巨石文化複合を共有すると考えられる。主たる生業は雑穀耕作による水稻の栽培で、タロイモ、ヤムイモ、ダイズ、インゲンマメなども栽培し、水牛、豚、鶏、犬などの家畜も食料とする。州都ボントックに約5000人が居住するほかは、平均人口1000人ほどの集村形態をとる村落ごとに生活している。村落には聖樹の森、石積みを施したアト ato と呼ぶ男子集会所、オログ olog という娘宿をもち、政治的、儀礼的、地理的な単位をなしている。男子集会所は未婚男子と壮年男子の宿泊所であり、かつては首狩りの宣戦、講和などを行う単位であった。豊穡儀礼、イニシエーション儀礼などもアト単位で行う。動物供犠を伴う複雑な儀礼が発達し、とくに一連の婚姻儀礼では水牛を含む大規模な動物供犠が行われる。村落領域内の山林は分割され、始祖の全子孫によって共有される。伝来の水田、装身具、壺などは私有財で、父から長男に、母から長女に相続される両系相続を理念とする。ただし子どもが一方の性にかたよれば、父から長男に、母から次男に相続させることも可能である。夫婦は結婚後も別財を貫徹し、子のない場合、夫は自己の血族から、妻も自己の血族から養子を取り、それぞれ自己の私有財を相続させる。このことは相続慣行において、夫婦紐帯に対して血縁紐帯が卓越することを示している。 合田 濤

本間雅晴 1887 - 1946(明治20 - 昭和21)ほんままさはる

陸軍軍人、中将。新潟県出身。陸軍士官学校、陸軍大学校を卒業し、イギリス大使館付武官、参謀本部第2部長、第27師団長などを経て、1940年には台湾軍司令官となる。太平洋戦争が開始されると、第14軍司令官としてフィリピン攻略作戦の指揮にあたったが、バターン半島に立て籠ったアメリカ・フィリピン軍を攻めあぐね、作戦終了後、予備役に編入される。敗戦後、アメリカ軍捕虜から多数の死者を出した バターン死の行進 の責任を問われて、マニラで処刑された。イギリスでの勤務が長く、英米的な教養を身につけた数少ない陸軍軍人として知られている。吉田裕

マカバガル 1910 - 97 Diosdado Macapagal

フィリピンの政治家。ルソン島中南部のパンパンガ州ルバオの貧農の生れ。苦学してサント・トマス大学法学部を卒業、博士号を取得し、弁護士業に従事した。第2次大戦後外務省に入り外交官の道を歩んだが、1949年リベラル党下院議員となり、政治家に転身した。61年同党の大統領候補としてナショナルスタ党的のガルシア大統領を破って当選し、独立後のフィリピン共和国第5代大統領として65年まで務めた。その間、経済自由化政策を打ち出して為替統制を廃止し、平価切下げを断行した。また農地改革法を制定した。65年の大統領選でマルコスに敗れたが、その後は在野政治家としてマルコスの強権体制に終始批判的で、民主政治の回復を唱えた。滝川 勉 現在の大統領、グロリア・マカバガル・アロヨの実の父親。

マグサイサイ 1907 - 57 Ramon Magsaysay

フィリピンの政治家。ルソン島中西部のサンバレス州イバの生れ。少年時代、機械工として父親の店で働いたが、その後マニラのホセ・リサール・カレッジ商学部を卒業した。マニラの運輸会社に入って頭角を現し、サンバレス支店の責任者に任ぜられた。1941年の日本軍のフィリピン侵攻とともにサンバレス・ゲリラ隊を結成し、抗日戦に従事した。戦争末期の45年解放軍により軍政下で同州知事に任命された。戦後の46年にリベラル党のサンバレス州選出下院議員となり、国防委員会議長などを務めた。49年以降フィリピンはフクバラハップによる内戦に直面し、未曾有の政治危機に遭遇した。マグサイサイは50年国防長官に任命されてフクバラハップ討伐の最高責任者となり、アメリカの経済的・軍事的援助の下に鎮圧に成功した。この功績により53年の大統領選でナショナルスタ党的の候補となり、キリーノ大統領に圧勝、共和国第3代大統領に就任した。在任中、フクバラハップ騒乱の背景には土地問題があるとして、55年土地改革法を制定した。57年3月、セブ島において飛行機事故で死亡した。その率直かつ行動的な性格により大衆の政治家と評されてきた。滝川 勉

マクタン[島] Mactan Island

フィリピン中部、セブ島のすぐ東側にある属島。面積61.1km²。セブ市の対岸に横たわるサンゴ礁の隆起によってできた。マゼランは世界周航の途中この島で戦死したが、当時の首長ラプ・ラブの勲功をたたえて記念碑が建てられている。島全体が標高3m以下の低平地からなるが、風化が進んでいないため農耕には適さない。1960年代に国際空港が建設され、70年代に橋がかかってセブ市と直結された。島全体がラプ・ラブ市で、人口は14万1000(1994)。梅原弘光

マゼラン 1480 - 1521 Fern1o de Magalh1es

最初の世界周航者。マゼラン Magellan は英語名で、ポルトガル語ではマガリャンイス。ポルトガルのオポルト付近に生まれたが、その出自などについては不明な点が多い。1505年 D. F. アルメイダの艦隊に参加してインドに向かい、09年には D.L. セケイラの

艦隊に加わってマラッカを訪れている。12年に本国に帰還したが、報酬について王室に対し不満を抱き、翌年モロッコ遠征に参加した際には戦利品を不法に取得したかどで訴えられた。おそらくこうした不満のために彼は17年にスペインに移り、かねてからの持論であった西回りでトルデシーラス条約で定められたスペインの海域のみを通過して香料諸島に到達する航海を提案した。そしてスペイン国王と契約を結び、19年9月20日5隻の船隊(総員237名)を率いてサンルカル・デ・バラメダ港を出帆した。一行はマゼラン海峡の通過(1520年11月28日)、南太平洋の横断という偉業を成し遂げ、21年3月17日フィリピンのサマル島の南にあるオモンオン島に上陸した。一行はさらにセブに向かい、住民を服従させようとしたが失敗し、4月27日マゼランはマクタン島で交戦中にラブラブによって殺された。一行はそのまま香料諸島に向かい、そこで香料を積荷したのち、スペインに直行し、22年9月6日生存者18名がサンルカル港に到着した。この世界周航によって地球は球形であることや、日付に1日の差の生ずることが実証された。生田滋

マッカーサー 1880 - 1964 Douglas MacArthur

アメリカの軍人。陸軍軍人の家庭に生まれた。1903年ウェストポイント陸軍士官学校を首席で卒業後、父の任地がフィリピン、日本であった関係から、最初の任地をフィリピンとしたのち、駐日アメリカ大使館武官の副官として来日するなど、極東の事情に詳しい経歴をもつ軍人としてアメリカ陸軍の要職を歴任した。30年には陸軍大将となり、またアメリカ史上最も若い陸軍参謀長となった。大不況下の32年には、恩給先払いを要求してワシントンに集まった第1次大戦の退役軍人を、フーバー大統領の要請に応じて軍隊を使って追い払い、不評を買った。37年に退役したが、41年に現役に復帰しアメリカ極東陸軍司令官として太平洋戦争に参加、フィリピンで敗れてコレヒドール島からオーストラリアに脱出し、I shall return とフィリピンに戻ることを誓った。44年元帥となり、日本の敗戦とともに連合国最高司令官として45年8月30日日本に進駐した。連合国最高司令官は行政官としての権限しかもっていなかったが、GHQ(連合国総司令部)の指令をとおして、日本の非軍事化、民主化などの対日占領政策を遂行し、彼は戦後日本の新しい権力者としてふるまった。朝鮮戦争の継続と拡大を主張したが、トルーマン大統領と対立して51年解任された。帰国後はレミントン・ランド社の社長に就任した。高橋彦博

マニラ Manila

フィリピン共和国の首都。人口165万、メトロ・マニラの人口1486万(ともに1995)。ルソン島南西部、天然の良湾マニラ湾の東岸に立地し、パシグ川が東西に流れて市内を南北に二分する。年平均降水量は1791mm、その大半が南西モンスーンの卓越する6～11月に集中する。ルソン島屈指の農業地帯である中部ルソン平野と南部ルソンの丘陵地帯を後背地にもつ。

1571年にスペイン総督レガスピが植民地経営の根拠地をここに移して以降、300年以上にわたりスペインのフィリピン支配と極東におけるスペイン・カトリック権力の中核で、かつメキシコと東洋を結ぶガレオン船の母港であった。またスペイン人到来以前から中国人商人が訪れ、16～17世紀には日本の商人も訪れ、日本人町(南洋日本人町)が形成された。当時はパシグ川河口左岸に築構された城郭都市イントラムロス Intramuros が中心で、そこには要塞はもとより総督府、大司教府、カトリック各派教会、大会堂、市会館、公立学校、大学、病院などが立ち並び、スペイン人のみがこのなかで生活した。フィリピン人や中国人集落(パリアン)はその周辺に配置された。1834年のマニラ開港後国際貿易がしだいに活発化し、城郭の外側が繁栄して19世紀末までに人口20万の大都市に成長した。アメリカの領有後もさらに発展が続き、植民地特有の首位都市の傾向をいっそう強めた。イントラムロスの成長は19世紀末までに限界に達し、都心機能を果たすのは無理となった。第2次大戦中の破壊がひどく、戦後はいち早く一大スラムと化してしまった。こうして戦後期までにでき上がったマニラの都心部は、パシグ川右岸の卸売業、小売業、金融機関の集中するピノンド、サンタ・クルス、キアボ地区、大統領宮殿のあるサン・ミゲル地区と、左岸に展開する新しい官公庁地区、ホテル、高級ショッピング街のエルミタ、マラテ地区とが連担したものであった。

マニラ港はパシグ河口をはさんで北港と南港に分かれ、前者に内航船、後者に外航船が接岸するが、この港湾地区と都市地区の間にはさまれたトンド、ニコラス、イントラムロス地区がスラムを含む低所得階層の住宅地帯を形成し、パシグ川沿いのパコモ中級住宅地区からしだいに下級住宅地区化した。他方、高級住宅地区はケソン・シティ、サン・フアン、マカティ Makati 町などマニラ郊外へと東進した。市域面積が32km²でしかないマニラの発展が、早くから市域を越えて隣接市町に拡大したことはいうまでもない。とくにそれが顕著となるのは1950年代以降であった。例えばマニラ市の人口は1948年から80年にいたる32年間に98万から163万へと65万の増加をみたにすぎないが、ケソン・シティでは11万から117万へと10倍以上の大幅増加をみだし、カロオカン、マカティなどの周辺地域も同様であった。こうして60年代には大マニラ、首都圏マニラという新しい概念が登場し、75年にはついにマニラ市を含む4市13町が合併、ここにメトロ・マニラが公式に誕生し、マルコス大統領夫人イメルダがその初代知事に就任した。この間に都心地区の分化が起こった。1960年代から建設が始まっていた近代都市マカティに、金融機関、外国企業、在外公館、高級ショッピング・センター、ホテル、レストラン街といった近代的CBD(中心業務地区)構成要素がすべて吸収され、ピノンドやエルミタ地区の成長力がおおいに減退した。梅原弘光

マビニ 1864-1903 Apolinario Mabini

フィリピン革命の思想的指導者。ルソン島南部のバタンガス州タナワン町出身。父は村長を務めた徳望家であったが貧しかったので、苦学して30歳でサント・トマス大学法学部を卒業した。学生時代からリサールのフィリピン民族同盟などに参加してスペイン統治改革運動に従事していたので、1896年フィリピン革命が始まるとまもなく投獄されたが、両足麻痺症のため数ヵ月で釈放された。98年6月アギナルドに請われて政治顧問となり、革命政府の設立からマロロス共和国の樹立、自ら組閣した内閣の運営(99年1～5月)まで、一貫して革命が大資本家グループの階級利害に利用されないよう抵抗し続けた。その後アメリカ軍の侵略に徹底反抗したので、1901年02年グアム島に流刑された。革命に関する政治哲学的著述が多数ある。池端雪浦

マヨン[山] Mount Mayon

フィリピンのルソン島南東部、レガスピの北北西にそびえる活火山。標高2417mはピコル地方で最高。定期的に火山活動が活発となるが、激しい爆発を伴うことは少ない。山頂から噴煙をあげ、ほぼ完全な円錐形の山容は世界でも有数の美しさといわれ、毎年多くの観光客をひきつける。梅原弘光

マルコス 1917 - 89 Ferdinand Edralin Marcos

フィリピンの政治家。ルソン島北部、北イロコス州サラットの生れ。父親は同州選出の下院議員。1939年3月にフィリピン大学法学部を卒業。在学中から雄弁をもって知られ、また39年、弁護士資格試験に最高点で合格したことは有名である。太平洋戦争の開始とともに、パターン戦に将校として参加し、捕虜として 死の行進 を経験した。戦後はロハス大統領の経済担当補佐官として政界に進出、49年にリベラル党下院議員に当選し、以後3選ののち59年には上院議員に当選した。63年上院議長となったが、リベラル党選出のマカバガル大統領と対立し、64年ナショナリスタ党に移籍した。翌65年の大統領選にナショナリスタ党候補としてのぞみ、マカバガルに大差をつけて当選、共和国第6代大統領となった。69年米の自給化政策および社会資本充実に掲げて再度大統領選に出馬し、リベラル党候補のオスメニャ Sergio Osmeña, Jr. を破って再選された。72年9月21日、国内治安上の危機を理由として戒厳令を布告し(1981年1月解除)、国軍最高司令官として立法・行政・司法権を一手に集中した。73年新憲法を制定・公布して永久政権への道を開き、夫人のイメルダも政権内で重要な地位についた。86年2月の大統領選直後、独裁への国民の不満が爆発、軍の離反もあり、国外へ脱出した。滝川 勉

マロロス Malolos

フィリピンのルソン島中部平野南部にあるブラカン州の州都。マニラの北西37kmに位置し、人口9万5699(1980)の一地方都市にすぎないが、19世紀末のフィリピン革命期には中心舞台の一つであった。1898年9月から共和国独立後最初の首都となり、革命政府による議会開催、憲法(マロロス憲法)制定がこの町のバラソアイン教会で行われた。1901年2月、アメリカ統治下で州都に定められた。梅原 弘光

マロロス憲法 マロロスけんぽう

1899年に制定されたフィリピンで最初の憲法。正式名称はフィリピン共和国憲法。フィリピンでは1896年8月からスペインの植民地支配を打倒する独立革命が開始され、アギナルドを大統領とする革命政府は、98年9月ルソン島中部のブラカン州マロロス町で革命議会(通称マロロス議会)を開催した。同議会は大地主、大商人、弁護士などの大資産家階級に牛耳られ、彼らは革命の指導権を自らの統制下に置くために、議会の権限を絶対化した憲法制定を急いだ。これには大統領顧問マビニの強力な反対があったが大勢に押し切られ、99年1月21日、この憲法が発布された。同憲法に基づいて、同1月23日には第1次フィリピン共和国、通称マロロス共和国が発足した。同憲法は前文と14条101項および1追加項目からなり、三権分立、代議制、基本的人権の保障、国家と宗教の分離などを定めた近代的ブルジョア憲法である。しかし、先述の制定目的から、三権分立とはいえ、立法府の権限が圧倒的に大きい点に特徴がある。池端雪浦

マンギャン族 マンギャンぞく Mangyan

フィリピンのミンドロ島山地民の総称。人口は2万から3万と推定される。言語学・民族学的には七つの種族に分けられる。いずれもマラヨ・ポリネシア語系の言語をもつが、互いに意味は通じない。北からイラヤ族、アランガン族、タジャワン族、バタンガン族(タオブイド族)、ブヒッド族、ハヌノオ・マンギャン族(ハヌノオ族)、ラタグノン族の順に分布する。このうちの大半の種族にとって、マンギャン という語は 人間 を意味するという。マンギャン諸種族の服装の特徴は、男がふんどしを身につけていることで、ミンドロ島中央部でかなり未開な生活をおくっているバタンガン族やアランガン族は、女も樹皮布のふんどしをつける。アランガン族の場合は、木のつるを巻いてスカート状にした衣類でふんどしを覆う。インド起源の文字を今日でも用いていることで知られるブヒッド族とハヌノオ・マンギャン族の女性は、機織の技術を有し、スカート風の腰巻をまとう。マンギャン族はいずれも山中で焼畑農耕を営み、陸稲、サツマイモ、キャッサバ、タロイモ、ヤムイモ、トウモロコシ、料理用バナナなどを栽培して主食とする。バタンガン族やアランガン族にとっては狩猟採集も欠かせない。家屋は高床式が一般的で、木や竹やブリ(シュロの一種)やコゴン(カヤの一種)などを材料とするが、バタンガン族の家屋のように地面に木の枝を立てて骨組みを作ってコゴンで覆った簡素なものもみられる。1家屋に1家族が住むのが普通である。しかしアランガン族の場合は例外で、近親関係にある5～20家族が共住する大家屋をもち、同一の大家屋の居住者が一つの共同体を形成する。他の種族の場合は、近親関係にある複数の家族が集落をなして共同生活する。マンギャン族の宗教は精霊信仰に基づき、さまざまな種類の精霊や悪霊、死者の霊魂などをめぐって宗教儀礼がとり行われる。宮本勝

マンゴー mango 澹 Mangifera indica L.

ウルシ科の常緑の高木(イラスト)。果実は黄肉桃よりも濃厚な味で、松やにに似た芳香があり、熱帯果実の王女と称される。花は無数に咲くが、結実の少ないことから、宗教上の悟りの困難さを示唆する木ともいう。高さ30mにおよぶ巨木となり、開張性で樹冠の直径が20mを越えるこんもりした樹姿となる。葉は長楕円形で互生する。枝の先端につく複総状花序は数千個の小花よりなるが、全体の1～36%が完全花、その他が雄花となる雑性花である。盛花期には樹冠表面が花穂で覆われ、萌黄色となる。果実は系統により数十gから2kgと変化し、果形は一般的に勾玉(まがたま)状である。果皮の色は成熟すると黄から桃紅色と変異に富むが、果肉は黄色が多い。種子は扁平な紡錘形で1個ある。北インドからマレー半島にわたる地域が原産地と推定されている。現在は全世界の熱帯域で広く栽培されている。単胚性系統の多いインドでは多数の品種があり、多胚性系統の多いフィリピン、フロリダ、西インド諸島では品種数が少ない。多胚性は、珠心細胞が受精の刺激により分裂して母親と同じ遺伝形質の個体を形成する。1種子から2本以上芽生えるのでわかる。繊維の多い果実を生食する際は、ナイフで切り分けて食べるが、輸入されるほどの高級品種は繊維が少なく、扁平な種子を中心に3枚に切り離し、果皮を皿にみたてて縦横に刻み目を入れてスプーンで食べる。ジュース、ジャム、ゼリーなどにも加工できる。未熟果は、酢漬にしたり、塩をつけて生食したり、料理に用いる。また、熟しても酸味が強く、料理専用にされる品種もある。種子は粉にして主食に利用する。材はボートをはじめ各種の軽構造材に用いる。

マンゴー属 *Mangifera* は東南アジアを中心に40種ほど知られ、ピンゼイ *M. caesia* Jack. やニオイマンゴー *M. odorata* Griff. など、果樹として栽植される種がある。野生マンゴー属植物でも熟果が食べられるものもあるが、酸味が強く、ウルシかぶれをおこす例もある。岸本修

ミンダナオ[島] Mindanao

フィリピンでルソン島の次に大きい島。面積9万4600km²。人口約1500万(1995)。行政的には島全体が18州に分かれ、そのなかに14

の政令都市が含まれる。フィリピン群島最南部に位置し、四方を太平洋、ミンダナオ海、スルー海、セレベス海に囲まれる。東西約520km、南北約470kmで、不規則な形のサンボアンガ半島が西部に突出する。東岸部のディワタ山脈、その西側の中央高地、サンボアンガ半島の脊梁山脈、南西部のティルライ山地の4褶曲山脈と、中央北部のブキドノン、ラナオ両台地が島の骨格を形成する。ミンダナオ川およびアグサン川流域に広がる沖積平野はもとより、ブキドノン、ラナオ両台地上に開けるなだらかな高原が、豊かな農業開発に適地を提供してくれる。最高峰は中央高地南部のアボ山(2954m)で、フィリピンの最高峰でもある。低緯度に位置するため北東端を除いて台風に襲われることはなく、降雨も年間を通して分布し、季節性に乏しい。年降水量は南部のサランガニ湾付近のように1000mm前後の寡雨地帯から、北西部のクラリン(西ミサミス州)のように5000mm以上に達する地点まである。

島は北岸部を除き元来フィリピン人イスラム教徒(モロ族)と山間部族民の住む島であった。20世紀に入ってアメリカによる平定が進み、以来中・北部からフィリピン人キリスト教徒が大量に移住・入植し、先住民を追いやって肥沃な低平地を占拠した。これが現在にまで続くイスラム教徒問題の発端である。主たる産業は農業で、小農民による米・トウモロコシ栽培のほか、大農園によるマニラアサ(アバカ)、パイナップル、バナナ、ゴムなどの商品生産の展開が顕著である。とくに注目されるのは外資系企業と大農園による小農駆逐の進展で、社会不安の重要な要因となりつつある。森林資源にも恵まれ、ダバオ、スリガオ、アグサンの諸州から大量のラワン材が切り出され、日本に輸出された。目下乱伐による自然破壊、資源枯渇が大きな問題となっている。鉱物資源としてはシブゲイ半島の鉄鉱石、北スリガオ州の褐鉄鉱が有望視されている。梅原弘光

ミンドロ[島] Mindoro

フィリピン、ルソン島の南西に横たわる大きな島。面積9818km²はフィリピン群島中第7位。行政的には二つの州に分かれ、人口56万(1975)。島の中央部を北北西から南南東方向に急峻な脊梁山脈が走り、ハルコン山(2586m)、バコ山(2489m)などの高い火山がそびえる。西海岸では雨が多く乾季と雨季の交替がみられるが、東海岸では明瞭な乾季がない。北東部に開ける沿岸平野にはタガログ地方からの、南西部の平野部にはピサヤ地方からの移住者が住みつき、内陸部はマンギャン族などが占拠する。南西岸のサン・ホセ町に1911年フィリピンで最初の分蜜糖工場が建てられた。島名はスペイン語で金鉱を意味するミナ・デ・オロに由来するといわれるが、現在ではそれらしき鉱山は見当たらない。梅原弘光

木材貿易 もくざいぼうえき

1995年の日本の木材需要(供給)量は1億1193万m³(薪炭材、シイタケ原木を除く)で、内訳は製材用5038万m³、パルプ・チップ用4493万m³、合板用1431万m³、その他である。このうち外材は8900万m³を占め、外材依存率は80%、輸入金額も1兆円を超え、石油、液化天然ガス、石炭などに次ぐ大きな輸入品目となっている。1955年にはわずか5.5%にすぎなかった外材依存率は70年に55%に達し、現在に至っている。こうした木材輸入の急増は、高度経済成長に伴う木材需要量の増加に対して日本の林業の木材供給力が追いつかず、價格的にも天然林の伐採による安価な外材と太刀打ちできなかったことによる。しかしながら石油危機(1973)以後、日本の木材需要も停滞に転じ、また世界的に森林保護と木材資源の不足が叫ばれるようになって、世界一の木材輸入国日本にも変化が現れている。木材輸出国の輸出規制強化と、とくに発展途上国で国内産業の保護育成のため丸太輸出を制限し、製材品、合板などの加工品輸出に努めるようにしているためである。丸太輸入の減少、製材品、チップ、合板の輸入増が近年の特徴である。輸入木材は地域別に米材、南洋材、ロシア材に大別され、その輸入割合はほぼ9対5対3であり、傾向としては南洋材の減少、米材、ロシア材の増加が目立つ。

【南洋材】 南洋材の供給国はインドネシア、フィリピン、マレーシア、パプア・ニューギニアなどで、近年ではインドネシアとマレーシアがとくに多く、この両国で輸入南洋材の80%強を占める。かつて輸入木材の首位にあったフィリピンは70年をピークとして大幅な減少に転じた。南洋材はラワンなどフタバガキ科の広葉樹がほとんどを占める。南洋材産地国では、自国における木材産業の発展を図るため、丸太輸出の制限を強めており、代りに製材、合板などの製品輸出を進めている。また自国森林資源の保護、有効利用を図り、有利な取引を行う必要から SEALPA(東南アジア木材生産者連合。1975設立。インドネシア、フィリピン、マレーシア、パプア・ニューギニアの木材生産者により構成)が結成された。インドネシアでは木材産業の振興を図るため丸太輸出を規制し、合板などの製品の国内生産、輸出の増大に力を入れている。またインドネシア人による国の経済的自立化策も進められており、外国資本に対する制限が厳しさを増している。マレーシアでは1977年から丸太輸出を規制する一方、木材産業の振興と製品輸出の拡大を図っている。フィリピンでは丸太の全面的輸出禁止の方向を打ち出している(輸出制限は1977年から)。パプア・ニューギニアでは丸太輸出を進めて外貨収入の増大を図り、外国資本も導入して木材工業を発展させる方策をとっている。

モロモロ moro - moro

フィリピンの平地キリスト教民の間で、フィエスタ(祝祭)の際に野外の仮設舞台で演じられた大衆劇。18世紀半ばより盛んとなったが、19世紀末のサルスエラの紹介とともに衰退に向かい、農村部のみで行われるようになった。キリスト教徒の王子とイスラム教徒モロ族の姫(あるいはその逆)のロマンスを軸に、両グループ間の様式化された戦闘を含む活劇で、最終的にはキリスト教徒側の勝利、イスラム教徒姫の改宗、結婚という形で終わる。キリスト教徒側が文化と正義、イスラム教徒側が野蛮と邪悪という色調で描かれ、フィリピンの一般民衆に対して、スペイン支配の正当性とキリスト教の優越性を暗黙裏に伝えるときにも、イスラム教徒に対するいわれなき偏見を与える結果となった。山下美知子

山下奉文 1885 - 1946(明治18 - 昭和21) やましたともゆき

陸軍軍人(大将)。高知県出身。陸軍士官学校、陸軍大学校を卒業。オーストリア大使館兼ハンガリー公使館付武官、陸軍省軍事課長などをへて1935年に陸軍省軍事調査部長に就任し、翌年の二・二六事件の勃発に際しては反乱軍に対して好意的立場をとる。また、北支那方面軍参謀長時代の39年には天津の英仏租界を封鎖するという強硬方針をとって、国際問題を引き起こした。太平洋戦争が開始されると、第25軍司令官としてマレー攻略作戦を指揮し、短期間のうちにシンガポールを陥落させて一躍、国民的英雄となった。その後、44年にはフィリピンの防衛にあたる第14方面軍司令官となり、アメリカ上陸軍との戦闘を指導したが、潰滅的打撃をこうむって山中で敗戦を迎えた。敗戦後、フィリピンにおける日本軍の戦争犯罪に関して最高責任者としての責任を問われ、マニラで処刑された。吉田裕

ラジャ・ソリマン ? -1571 Raja Soliman

フィリピンのマニラに築かれたイスラム社会の最後の支配者。フィリピン群島では14世紀後半に最初のイスラム社会が南端のホロ島に形成され、16世紀初めには北部の交易港マニラ湾周辺部にもイスラム社会が形成された。16世紀後半スペインの侵略が開始されたとき、パシグ川南岸のマニラにはラジャ・ソリマンの率いる大規模なムスリムのバラングイが存在し、パシグ川北岸のトンドには彼のおじラジャ・ドゥラ Raja Dula(ラカン・ドゥラLakan Dula)の率いるムスリムのバラングイが存在した。2人はブルネイのスルタン家と親戚関係にあり、そこそ密接な交流をもった。ラジャ・ソリマンは1570年、71年の2度にわたるスペインの侵略と果敢に戦って倒れ、71年以降マニラはスペイン植民地の主都となった。池端雪浦

ラピタ式土器 ラピタしきどき

南西太平洋、メラネシアのビスマーク諸島ニューブリテン島以東、西ポリネシアまでにわたって、紀元前1600年から紀元ころにかけて分布したオセアニア最古の土器。ニューブリテン島北東岸のワトム島から最初に発見されたが、ニューカレドニア島ラピタ Lapita 遺跡からの出土により型式名となった。焼成温度の低いこわれやすい土器で、粘土の添加物として砂や貝殻粉が使われた。有文のものは30%以下で、文様は繊細な侯歯や貝殻縁の圧文、隆起線文、沈線による幾何学文などが壺の上半部に施されている。アウストロネシア語を話す海洋民族のもたらした土器といわれ、海岸近くにその遺跡が発見される。北部ニューブリテン原産の黒曜石が土器とともにニューカレドニアまでにわたる地域で発見されることから、広大な海域を航海し、交易を行っていたことがわかる。類似の土器がフィリピンや台湾から発見され、ラピタ式土器の起源がこのあたりか東インドネシアあたりにあるのではないかといわれている。篠遠喜彦

ラプ・ラプ Lapu - Lapu

世界周航途次のマゼランをマクタン島で殺したフィリピンの民族的英雄。生没年不詳。マゼラン一行は1521年3月フィリピン群島に達し、4月7日セブ島に上陸してこの島最強の首長ラジャ・フマボンと友好の血盟を結んだ。そして近隣諸島の首長にラジャ・フマボンを彼らの王として認めるよう要求したが、セブに東接する小島マクタンの首長ラプ・ラプはこれを拒否し、スペインとの友好をも拒んだ。おりからマクタン島のもう一人の首長ダトゥ・スラがラプ・ラプとの抗争にからんでマゼランに援助を求めてきたので、4月27日マゼランはラプ・ラプ討伐に出て、かえってラプ・ラプの手勢に惨殺された。ラプ・ラプは現在フィリピンで民族独立の最初の防衛者としてたたえられている。池端雪浦

蘭嶼 らんしょ Lan yǎo

中国、台湾省の南端から東方約60kmにある島。旧名は紅頭嶼。面積45km²。フィリピン諸島から続く火山脈に属し、溶岩山地からなる。住民はフィリピンのルソン島バターン半島の住民と同系統のヤミ(Yami)族で、人口約2000人。ミズイモ(水田でつくるサトイモ)とトビウオがおもな食料で、1日にとるいもの量は夫婦と子供4人で石油缶に約1杯。トビウオは3月～9月が漁期で、刺し網でとり、とった魚は干して貯蔵する。西村睦男

リカルテ 1863 - 1945 Artemio Ricarte

フィリピン革命の軍事指導者。ルソン島北イロコス州バタック町出身。マニラのサント・トマス大学、師範学校を卒業後、カビテ州で初等教育塾の教師となり、また秘密結社カティブーナンの会員となった。1896年フィリピン革命が勃発すると、革命軍將軍として活躍した。アメリカ占領後、アメリカへの忠誠を拒否して入獄、流刑の生活を繰り返し、1915年日本へ亡命した。初めは名古屋で土工として働いたが、22年にビハリ・ボースの世話で上京、後藤新平の紹介で東京駒場の海外植民学校でスペイン語を教えた。41年日本軍のフィリピン占領にあたって協力を求められ、宣撫工作に従事、45年7月山下兵団と敗走中、イフガオ準州で病死した。池端雪浦

リサルル 1861 - 96 Jose Rizal

フィリピン革命に先立つ改革運動の中心的指導者、民族英雄。ルソン島南部のラグナ州カランバ町の教養ある大借地農の家庭に生まれ、マニラのアテネオ・デ・マニラ学院、サント・トマス大学で学んだ後、1882年スペインのマドリード中央大学に留学して医学と古典文学を学んだ。留学前から民族意識に目覚めていたホセは、フィリピンに比して自由主義的な植民地本国の空気の中でその自覚を強め、同胞の留学生らに呼びかけてフィリピン統治改革を求める言論活動(プロパガンダ運動)を開始した。87年出版の最初の小説《われに触れるな》はスペイン当局に強い衝撃を与え、彼らの運動を一躍有名にした。しかし、この年帰国して郷里カランバ町で組織した修道会所領の小作料値上げ反対運動は当局の徹底した弾圧を受け、指導者の彼は国外脱出を余儀なくされた。この経験以後、穏健な改革運動は不毛だとの認識を深め、状況によっては革命もやむなしとする急進的な思想を抱くにいった。2番目の小説《反逆》(1891)はそのメッセージを伝えたものである。同時に彼はこの事件以後、スペイン当局に向かってする言論活動よりも、フィリピン人自身の民族的自覚を育成する著述活動に専念するようになった。92年6月決死の覚悟で再度帰国し、7月2日にフィリピン民族同盟を結成してその思想の実践に着手した。しかし数日後に反逆罪の名で逮捕され、ミンダナオ島のダピタンへ流刑された。幽囚の生活に疲れた彼は、96年スペイン政府軍医としてキューバ独立戦争に従軍することを申し出て、一度はスペインへ到着したが、同年8月フィリピン革命が勃発したため、革命扇動者の容疑をうけて連れ戻され、12月30日に処刑された。池端雪浦

リベラル党 リベラルとう Liberal Party

第2次大戦後に結成されたフィリピンの代表的政党。大戦後、フィリピン政治は、日本占領期の対日協力者をどう扱うかという難問に直面した。ワシントンでコモンウェルス亡命政権を維持したナショナリスタ党のオスメーニャ大統領は、アメリカ国防省の圧力で対日協力者処罰方針をとらざるをえなかったが、戦後政治の新しい指導者をめざすロハスは、GHQ 司令官マッカーサーの後盾を得て対日協力者免罪方針を打ち出し、1945年12月ナショナリスタ党を離党した。彼と同調者は46年1月リベラル党を結成、同年4月の大統領および国会議員選挙に臨んで大勝し、党の地盤を確立した。以後フィリピン政治は、リベラル、ナショナリスタの二大保守政党の手で運営されることになった。両党間には政策的に根本的な違いはなく、政治家たちはその時々選挙の有利さで、両党間を行き来した。72年の戒厳令で党活動は廃止になった。池端雪浦

ルソン[島] Luzon

フィリピン群島中最も大きい島。漢字では呂宋と表記される。面積10万4687km²は国土総面積の約35%にあたる。東は太平洋、西は南シナ海に面し、北はルソン海峡により台湾と、南はシブヤン海によりビサヤ諸島と隔てる。島の北部から中部にかけてシエラ・マドレ、中央(セントラル)山脈、サンバレスの3本の山脈が南北方向に走って骨格を形成し、これらの間にカガヤン、中部ルソンの2大沖積平野が開ける。南部から南東のピコル半島にかけては大小の火山が林立し、その間に平野、盆地、丘陵が点在する。最高峰は中央山脈のプログ山(2934m)で、山容が最も美しいのはピコル半島のマヨン山(火山。2462m)である。気候は山脈によって支配され、西側では6～11月に南西モンスーンにより雨季がもたらされ、東側では12月～2月に多雨季が現れる。降水量は東海岸と中央山脈、サンバレス山脈の西側で多く、山脈にはさまれた部分で少ない。

人口は約3500万(1995)で、フィリピン全体の約50%を占める。人口密度は約350人/km²で、北部西海岸、中部、南部、ピコル半島で高い。住民は多くの言語集団からなるが、主要なものだけでも北からイロコ、パンガシナン、パンパンゴ、タガログ、ピコルの五つに分かれる。主たる産業は農業で、稲作は中部ルソン平野を中心に全域に、換金作物としてのタバコは北部、サトウキビは中部、ココヤシは南部、マニラアサ(アバカ)はピコル半島に分布する。鉱物資源はカマリネス州の鉄、金、マンガン、サンバレス州のクロムと銅、中央山脈の金と銅が代表的なものである。工業はマニラとその周辺部に集中し、地方への波及はまだ小さい。北部西海岸、マニラ湾岸、バイ湖沿岸、ピコル半島にはスペイン人の到来までかなりの居住がみられた。1571年にマニラがスペインの植民地支配の根拠地となったが、開発の波が全島に及ぶのは19世紀の商品生産展開以降であった。マニラを中心に道路網が発達し、南北両端まで国道が達する。鉄道はマニラから北のサン・フェルナンドと南のレガスピまでのびるが、道路交通ほどの重要性はない。島はメトロ・マニラ(首都圏マニラ)と28州に分かれ、そのなかに23の政令都市を含む。梅原弘光

ルバング[島] Lubang Island

フィリピンのマニラの南西約130km、ミンドロ島の北西20kmの南シナ海に浮かぶ小島。面積191km²。北西から南東に約30kmと細長い。北西部に開ける平坦地を除くと山がちで、南岸には急な海食崖が続く。降水量は必ずしも多くはないが、雨は南西モンスーンの影響をうけて5月から10月に集中してみられる。行政的には西ミンドロ州に属する。住民はタガログ族で、人口集中がみられるのは北部のティリック港とルバング町くらいである。第2次大戦後30年近くにわたり敗戦を信じない日本兵がこの島にたてこもった。1974年3月、小野田寛郎元少尉の救出に成功したものの、ほかの兵士たちはそれまでに貴重な命を失っていた。梅原 弘光

レイテ[島] Leyte Island

フィリピン中部、ビサヤ諸島の島。北東部を一衣帯水のサン・フアニコ海峡によりサマル島と隔てる。面積7249km²、全国で8番目に大きい。人口約136万(1990)。海岸線は複雑であるが、北西～南東方向に並走する中央山脈、北東高地、北西山地の3本の山脈が島の骨格を形成する。降水量は中央山脈の東側で多く西側で少ないが、両地域ともに顕著な乾季を欠く。中央山脈の東側、カリガラ湾からレイテ湾に抜けるレイテ平野は、島内はもとより中・東部ビサヤで最大規模を誇る。低平地で稲作、周辺高地でトウモロコシ作が行われる。中央山脈西側のオルモック平野ではサトウキビ、レイテ湾沿岸ではマニラアサ(アバカ)栽培が盛んである。中央山脈からは良質な木材が切り出され、東岸のアブヨク町で製材される。地下資源としてはピリアバのオイルシェール(油頁(ゆけつ)岩)、岩石アスファルト、バイバイ近くのマンガンが代表的なものである。島全体が2州に分かれ、住民は主としてワライ人からなる。第2次大戦末期の日本軍とアメリカ軍の激戦地として知られる。梅原弘光

レイテ戦記 レイテせんき

大岡昇平の長編小説。1967年から69年にかけて《中央公論》に連載され、71年中央公論社より刊行。44年10月、フィリピン奪回を目指してレイテ島に上陸した圧倒的なアメリカ軍を迎え撃ち、敗れ去ってゆく日本の兵士たちの悲劇を精細克明に記述する。日米双方の膨大な史料を駆使し、戦史の骨格を冷静に把握すると同時に、戦闘の細部をダイナミックに描き出しているところに特色がある。厳正を期する歴史家の知と、死者の鎮魂を願う文学者の心情とが一体となって創り出された戦争文学の傑作であり、フィリピンにおける戦争体験を核心とする大岡文学の頂点を形づくっている。吉田厩生

レガスピ 1505 - 72 Miguel Lopez de Legazpi

スペインのフィリピン遠征隊総司令官、初代フィリピン総督。スペインのギブスコア州スマラガの貴族の家庭に生まれた。法学と軍事学を修めて、1528年にメキシコへ渡り、弁護士業を開いて名声を得た。その後メキシコ市の市会議員、公証人、市長などを歴任したのち、同郷の親戚ウルダネータの推薦で、64年に国王よりフィリピン遠征隊の総督ならびに総司令官に任命され、4隻の帆船と380名の部下を率いて太平洋を横断した。途中、サン・ルーカス号が船団から脱走したが、残る3隻は65年2月にフィリピン群島へ到着した。同年4月、セブ島に最初の植民地を建設、これを根拠地に周辺諸島の征服を進めた。原住民の抵抗とポルトガルの妨害で征服事業は困難をきわめたが、71年にはイスラム教徒が支配するルソン島の海港都市マニラを占領して、ここを植民地の主都とした。しかし、彼はルソン島攻略半ばの72年8月に心臓病で倒れ、征服事業は第2代総督ラサレスの手にひき継がれた。池端 雪浦

レクト 1890 - 1960 Claro Mayo Recto

フィリピンの民族主義的政治家、憲法学者。ルソン島のタヤバス(現、ケソン)州ティアオンで生まれる。1914年サント・トマス大学で法学修士号を取得した。19年にバタガス州選出下院議員として政界に進出、31年に初めて上院議員に選ばれ(2年後ナショナリスト党に入党)、34年憲法草案のための制憲会議議長をつとめた。第2次大戦後の49年に再びナショナリスト党上院議員となり、自らの標榜する民族主義十字軍の立場からマグサイサイ大統領(ナショナリスト党)の親米主義を痛烈に批判した。その後、民族主義市民党 LapiangMakabansa を結成し、57年の大統領選に出馬したが落選した。当選したガルシア大統領(ナショナリスト党)の経済的民族主義政策を支持しつづけたが、60年ローマで心臓発作のため急死した。滝川勉

ロハス 1892 - 1948 Manuel Roxas

フィリピンの政治家。パナイ島のカピス州カピス(現、ロハス市)の生れ。1913年フィリピン大学法学部を優秀な成績で卒業し、同年の弁護士資格試験に最高点で合格した。その後、州知事、下院議員、同議長を歴任し、34年の独立法制定に貢献した。35年のコモンウェルス成立とともにケソン大統領の下で財務長官を務めた。41年秋上院議員に当選したが、太平洋戦争中にミンダナオ島で日

本軍の捕虜となった。神保信彦中佐の尽力で死刑を免れ、以後の親密な交友関係は有名である。46年リベラル党を創設し、同年の大統領選でナショナリスタ党のオスメーニャ Sergio Osmena を破って当選、フィリピン共和国の初代大統領に就任した。戦後の戦災復興に努めたが、48年心臓病で急死した。滝川勉